

基本計画書

基本計画									
事項	記入欄								備考
計画の区分	学部設置								
フリガナ 設置者	ガッコウホウジン トウキョウカセイガクイン 学校法人 東京家政学院								
フリガナ 大学の名称	トウキョウカセイガクインダイガク 東京家政学院大学 (Tokyo Kasei Gakuin University)								
大学本部の位置	東京都千代田区三番町22番地								
大学の目的	東京家政学院大学は、教育基本法及び学校教育法の趣旨に則り、知識の啓発、徳性の涵養、技術の錬磨の建学の精神を具現する高度の知識、技能を研究教授し、もって人々の生活の向上に貢献する有為な人材を育成することを目的とする。								
新設学部等の目的	<p>生活共創学部 生活共創学部は、知、徳、技のバランスを重視する建学の精神に基づき、共感性、協働性、達成力を柱として、共感性では①感じ取る力、②寄り添う力、③相互尊重力を、協働性では①実行する力、②マネジメント力、③牽引する力を、達成力では①面白がる力、②考え抜く力、③やり遂げる力を身に付けさせ、各学科の専門的知識・技能を身に付け、広く地域・社会の発展に貢献できる人材育成を目的とする。</p> <p>生活共創学科 生活共創学科は、生活者の視点から、自らの生き方、地域・社会のあり方を主体性を持って考え、周囲と協働して、人々が快適に生活できる社会を「共に創り上げる」ことができる。また、多面的な知識・経験から将来的な地域や社会の需要を予測し、新しい衣食住のあり方を企画・提案・推進できる人材育成を目的とする。</p> <p>こども教育学科 こども教育学科は、こどものウェルビーイング向上に寄与する専門的知識・技能を身に付け、こどもを取り巻く社会における問題を見つけ、論理的・多角的に考え、解決していくことができる。また、地域社会に参画・貢献する主体性・協働性・共感性を持ち、こどもが心豊かに生きていくための学習環境を創造することができる人材育成を目的とする。</p>								
新設学部等の概要	新設学部等の名称	修業年限	入学定員	編入学定員	収容定員	学位	学位の分野	開設時期及び開設年次	所在地
	生活共創学部	年	人	年次人	人			年 月 第 年次	東京都町田市相原町2600番地
	生活共創学科	4	127	-	508	学士（生活共創学）	家政関係	令和7年4月 第1年次	
	食科学コース	4	70	-	280	学士（生活共創学）	家政関係	令和7年4月 第1年次	
	こども教育学科	4	50	-	200	学士（こども教育学）	教育学・保育学関係	令和7年4月 第1年次	
計		247	-	988					
同一設置者内における変更状況 (定員の移行、名称の変更等)	<p>現代生活学部 生活デザイン学科（廃止）（△80） （3年次編入学定員）（△10） 食物学科（廃止）（△70） 児童学科（廃止）（△90） （3年次編入学定員）（△5） ※令和7年4月学生募集停止 （3年次編入学定員は令和9年4月学生募集停止）</p>								

教育課程	新設学部等の名称	開設する授業科目の総数				卒業要件単位数		
		講義	演習	実験・実習	計			
	生活共創学部 生活共創学科	100科目	63科目	20科目	183科目	124単位		
	生活共創学部 こども教育学科	94科目	70科目	15科目	179科目	124単位		
新設分	学部等の名称	基幹教員					助手	基幹教員以外の教員 (助手を除く)
		教授	准教授	講師	助教	計		
	生活共創学部 生活共創学科	14 (12)	9 (11)	0 (0)	1 (1)	24 (24)	3 (3)	69 (69)
	a. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事する者であって、主要授業科目を担当するもの	13 (11)	9 (11)	0 (0)	1 (1)	23 (23)		大学設置基準別表第一イに定める基幹教員数の四分の三の数 10人
	b. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの（aに該当する者を除く）	1 (1)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	1 (1)		
	小計（a～b）	14 (12)	9 (11)	0 (0)	1 (1)	24 (24)		
	c. 基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの（a又はbに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)		
	d. 基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事する者以外の者又は当該大学の教育研究に従事し、かつ専ら当該大学の複数の学部等で教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの（a、b又はcに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)		
	計（a～d）	14 (12)	9 (11)	0 (0)	1 (1)	24 (24)		
	生活共創学部 こども教育学科	7 (0)	3 (3)	0 (0)	4 (0)	14 (3)	0 (0)	79 (79)
	a. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事する者であって、主要授業科目を担当するもの	7 (7)	3 (3)	0 (0)	4 (4)	14 (14)		大学設置基準別表第一イに定める基幹教員数の四分の三の数 6人
	b. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの（aに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)		
	小計（a～b）	7 (7)	3 (3)	0 (0)	4 (4)	14 (14)		
	c. 基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの（a又はbに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)		
	d. 基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事する者以外の者又は当該大学の教育研究に従事し、かつ専ら当該大学の複数の学部等で教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの（a、b又はcに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)		
	計（a～d）	7 (7)	3 (3)	0 (0)	4 (4)	14 (14)		
	計	21 (19)	12 (14)	0 (0)	5 (5)	38 (38)	3 (3)	92 (92)

既設分	現代生活学部 現代家政学科	8 (9)	5 (5)	0 (0)	2 (2)	15 (16)	1 (1)	64 (64)	大学設置基準別表第一イに定める 基幹教員数の 四分の三の数 9 人
	a. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事する者であって、主要授業科目を担当するもの	8 (9)	5 (5)	0 (0)	2 (2)	15 (16)			
	b. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの（aに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)			
	小計（a～b）	8 (9)	5 (5)	0 (0)	2 (2)	15 (16)			
	c. 基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの（a又はbに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)			
	d. 基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事する者以外の者又は当該大学の教育研究に従事し、かつ専ら当該大学の複数の学部等で教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの（a、b又はcに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)			
	計（a～d）	8 (9)	5 (5)	0 (0)	2 (2)	15 (16)			
	人間栄養学部 人間栄養学科	9 (8)	6 (8)	1 (1)	3 (3)	19 (20)	4 (4)	13 (13)	大学設置基準別表第一イに定める 基幹教員数の 四分の三の数 9 人
	a. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事する者であって、主要授業科目を担当するもの	9 (8)	6 (8)	1 (1)	3 (3)	19 (20)			
	b. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの（aに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)			
	小計（a～b）	9 (8)	6 (8)	1 (1)	3 (3)	19 (20)			
	c. 基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの（a又はbに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)			
	d. 基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事する者以外の者又は当該大学の教育研究に従事し、かつ専ら当該大学の複数の学部等で教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの（a、b又はcに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)			
	計（a～d）	9 (8)	6 (8)	1 (1)	3 (3)	19 (20)			
	計	17 (17)	11 (13)	1 (1)	5 (5)	34 (36)	5 (5)	67 (67)	
	合計	38 (36)	23 (27)	1 (1)	10 (10)	72 (74)	8 (8)	137 (137)	
	職 種	専 属		そ の 他		計			
事務職員	50 (53)	人	15 (15)	人	65 (68)	人		大学全体	
技術職員	0 (0)	人	0 (0)	人	0 (0)	人			
図書館職員	1 (1)	人	0 (0)	人	1 (1)	人			
その他の職員	0 (0)	人	0 (0)	人	0 (0)	人			
指導補助者	0 (0)	人	0 (0)	人	0 (0)	人			
計	51 (54)	人	15 (15)	人	66 (69)	人			

校地等	区分	専用	共用	共用する他の学校等の専用	計				
	校舎敷地	132,245㎡	0㎡	0㎡	132,245㎡				
	その他	7,699㎡	0㎡	0㎡	7,699㎡				
	合計	139,944㎡	0㎡	0㎡	139,944㎡				
校舎	専用	専用	共用	共用する他の学校等の専用	計				
	40,223㎡ (40,223㎡)	0㎡ (0㎡)	0㎡ (0㎡)	0㎡ (0㎡)	40,223㎡ (40,223㎡)				
教室・教員研究室	教室		36室	教員研究室	37室				
図書・設備	新設学部等の名称	図書 〔うち外国書〕		学術雑誌 〔うち外国書〕		機械・器具	標本	学部単位での特定不能の為、大学全体の数	
		冊	電子図書 〔うち外国書〕	種	電子ジャーナル 〔うち外国書〕	点	点		
	生活共創学部 生活共創学科 こども教育学科	296,590 [32,534] (296,590 [32,534])	2,073 [0] (2,073 [0])	3,976 [483] (3,976 [483])	32 [20] (32 [20])	1,252 (1,252)	33 (33)		
	計	296,590 [32,534] (296,590 [32,534])	2,073 [0] (2,073 [0])	3,976 [483] (3,976 [483])	32 [20] (32 [20])	1,252 (1,252)	33 (33)		
スポーツ施設等	スポーツ施設		講堂		厚生補導施設				
	4,863㎡		1,184㎡		6,564㎡				
経費の見積り及び維持方法の概要	区分	開設前年度	第1年次	第2年次	第3年次	第4年次	第5年次	第6年次	届出学部全体
	教員1人当り研究費等	-	300千円	300千円	300千円	300千円	-	-	
	共同研究費等	-	500千円	500千円	500千円	500千円	-	-	
	図書購入費	1,500千円	1,500千円	1,500千円	1,500千円	1,500千円	-	-	
	設備購入費	5,000千円	5,000千円	5,000千円	5,000千円	5,000千円	-	-	
	学生1人当り納付金		第1年次	第2年次	第3年次	第4年次	第5年次	第6年次	
学生納付金以外の維持方法の概要	私立大学経常費補助金、雑収入等								
既設大学の状況	大学等の名称	東京家政学院大学							
	学部等の名称	修業年限	入学定員	編入学定員	収容定員	学位又は称号	収容定員充足率	開設年度	所在地
	現代生活学部 現代家政学科	4年	130人	5年次人	530人	学士(家政学)	71.9%	平成22年度	東京都千代田区 三番町22番地
	人間栄養学部 人間栄養学科	4年	140人	-	560人	学士(栄養学)	95.2%	平成30年度	
附属施設の概要	該当なし								

(注)

- 1 共同学科の認可の申請及び届出の場合、「計画の区分」、「新設学部等の目的」、「新設学部等の概要」、「教育課程」及び「新設分」の欄に記入せず、斜線を引くこと。
- 2 「新設分」及び「既設分」の備考の「大学設置基準別表第一イ」については、専門職大学にあつては「専門職大学設置基準別表第一イ」、短期大学にあつては「短期大学設置基準別表第一イ」、専門職短期大学にあつては「専門職短期大学設置基準別表第一イ」にそれぞれ読み替えて作成すること。
- 3 「既設分」については、共同学科等に係る数を除いたものとする。
- 4 私立の大学の学部又は短期大学の学科の収容定員に係る学則の変更の届出を行おうとする場合は、「教育課程」、「教室・教員研究室」、「図書・設備」及び「スポーツ施設等」の欄に記入せず、斜線を引くこと。
- 5 大学等の廃止の認可の申請又は届出を行おうとする場合は、「教育課程」、「校地等」、「校舎」、「教室・教員研究室」、「図書・設備」、「スポーツ施設等」及び「経費の見積り及び維持方法の概要」の欄に記入せず、斜線を引くこと。
- 6 「教育課程」の欄の「実験・実習」には、実技も含むこと。
- 7 空欄には、「-」又は「該当なし」と記入すること。

教育課程等の概要																	
(生活共創学部生活共創学科)																	
科目区分	授業科目の名称	配当年次	主要授業科目	単位数			授業形態			基幹教員等の配置					備考		
				必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手		基幹教員以外(助手を除く)	
共通教育科目	リテラシー	リテラシー演習	1前		1				○			3				3	【オムニバス】
		データサイエンス入門	1前			2			○							1	
		デジタル&AI基礎	1後			2				○						1	
		情報リテラシー基礎	1前			2				○						1	
		コンピュータ演習a	1前			1				○			1				
		コンピュータ演習b	1後			1				○			1				
	教養教育	哲学入門	1前			2			○								1
		心理学	1前			2			○			1					1
		世界の歴史	1後			2			○								1
		ジェンダー論	1後			2			○								1
		人権と平和	1前			2			○								1
		法学入門(日本国憲法)	1通			2			○								1
		法と暮らし	1後			2			○								1
		経済学入門	1後			2			○								1
		基礎数学	1前			2			○								1
基礎統計学		1後			2			○								1	
基礎化学		1前			2			○								1	
基礎生物学		1前			2			○								1	
環境と資源		1後			2			○								1	
自然科学に親しむ		1前			2			○								1	
現代社会と家政学	1前			2			○								1		
色彩論	1後			2			○								1		
グローバルスタディズ	英語コミュニケーション1	1前			2			○			1					1	
	英語コミュニケーション2	1後			2			○			1					1	
	英語セミナー	2前			2			○			1					1	
	韓国語コミュニケーション1	1前			2			○								1	
	韓国語コミュニケーション2	1後			2			○								1	
	中国語コミュニケーション1	1前			2			○								1	
	中国語コミュニケーション2	1後			2			○								1	
	異文化コミュニケーション	1前			2			○								1	
	異文化交流a	1前			2					○		1				1	
	異文化交流b	1後			2					○		1				1	
	※事情日本語・日本 留學生科目	アカデミック・ジャパニーズ1	1前		2				○			1					留學生のみ必修 留學生のみ必修 留學生のみ必修
アカデミック・ジャパニーズ2	1後		2				○			1							
	日本の歴史と文化	1前		2				○								1	
	社会人としての日本語	1後		2				○								1	
キャリア	キャリア形成概論	1前			2			○			1					【一部共同】 【一部共同】	
	キャリア実践演習1	1前			2			○			1						2
	キャリア実践演習2	1後			2			○			1						2
	キャリアアドバンストゼミa	2前			2			○			1						
	キャリアアドバンストゼミb	2後			2			○			1						
ウェルネス	心と身体の健康	1前			2			○								1	
	健康スポーツ演習a	1前			1			○								2	
	健康スポーツ演習b	1後			1			○								2	
	健康スポーツ演習c	1休			2			○								2	
	体育講義	1後			1			○								1	
	体育実技	1後			1					○						1	
	森の体験活動	1前			2					○						1	
小計(48科目)				7	82	0					2	4		1		32	
学部共通科目	生活科学	生活共創学概論	1前	○	2			○			3	2		1		5	【オムニバス】
		食科学概論	1後	○		2		○				1					【オムニバス】
		住環境デザイン概論	1前	○		2		○				1					
		被服学概論	1後	○		2		○			2						
		こども学概論	1前	○		2		○									1
生活イノベーション概論	1前	○		2		○			1	2					3	【オムニバス・一部共同】	

学部共通科目	生活共創基礎	AI時代の生活科学	1後	○		2		○			1				1	
		リーダーシップ基礎	1前			2		○								1
		マーケティング基礎	1後			2		○							1	
		データサイエンス基礎 (生活とデータ)	2前			2			○						1	
		ロジカルシンキングとデザイン思考	1後			2		○							1	
		小計 (11科目)				2	20	0			5	4		1	12	
専門教育科目	ゼミナール	初年次ゼミA	1前	○		2			○		6	4				
		初年次ゼミB	1後	○		2			○		5	2				
		共創プロジェクトゼミA	2前	○		2				○		13	9		1	
		共創プロジェクトゼミB	2後	○		2				○		1	1		1	
		小計 (4科目)				6	2	0				13	9		1	
専門基礎	食の創造	フードビジネス概論	1前			2			○							1
		比較食文化・食生活論	1後			2			○							1
	食の科学	有機化学	1前			2			○			1				
		こどもの食とアレルギー	2後			2			○							1
	人体の構造と機能	解剖生理学I (解剖学)	1後			2			○							1
		解剖生理学II (生理学)	2前			2			○							1
		解剖生理学実習	2前	○		1				○		1				
	食品と衛生	食品学総論	1後	○		2			○			1				
		食品学各論	2前	○		2			○			1				
		食品学実験	2前	○		1				○		1				
	栄養と健康	基礎栄養学	2前	○		2			○				1			
		基礎調理学実習	1後	○		2				○			1			
	給食の運営	調理学	1前	○		2			○				1			
		栄養士論	1前	○		2			○			1				
	教職科目	被服学演習	被服学演習	2前			2			○		1			1	
			家庭経営学概論	1後			2			○		1				
			保育学	3後			2			○						1
小計 (17科目)						0	32	0				5	3		1	4
住環境デザイン	建築設計	住居デザイン演習A	1前	○		2			○		1	1				
		住居デザイン演習B	1後	○		2			○		1	1				
		住居デザイン演習C	2前	○		2			○		1				2	
		住居デザイン演習D	2後	○		2			○		1				2	
	建築計画・環境	建築史A	1後	○		2			○							1
		建築史B	2後	○		2			○							1
		住環境マネジメント論	1後	○		2					1					
		住居計画	2前	○		2			○		1					
	建築構造・施工	構造力学A	2後			2			○							1
		住宅設計論	2前	○		2			○		1					
		構法計画	2後	○		2			○		1					
		インテリア材料	2前	○		2			○		1					
	園芸	ガーデニング概論	1後	○		2			○		1					
		園芸論	2後	○		2			○		1					
		ガーデニング実習 I	2前	○		2				○	1					1
			小計 (16科目)				0	32	0			4	1			5
生活イノベーション	ライフウェルネス	多感覚感受とデジタルデトックス	1前	○		2			○						2	
		ダイエット&フィットネス	1後	○		2			○						1	
		マネーフローの世界とくらし	2後			2									1	
	フューチャーライフ	生活イノベーション最前線	2前	○		2			○							1
		Society 5.0論	1前			2			○							1
	ビジネスイノベーション	行動経済学	2後			2			○							1
		知的財産権を学ぶ	1集中			2			○							3
			ビジネストrendキーワードを読み解く	2前	○		2			○		1		1		
		小計 (8科目)				0	16	0				1		1	10	
専門発展	食の創造	食生産体験演習A	1前			1			○							1
		食生産体験演習B	1後			1			○							1
		応用調理学実習	2前	○		2				○		1				
		食品の企画と設計	3後			2				○		1				
		食空間コーディネート論	2後			2			○							1
	食の科学	食品機能学	3前			2			○			1				
		食科学総合演習	4前			2				○		6	3			
康活社と健康	公衆衛生学 I (総論)	2後			2			○							1	
	公衆衛生学 II (各論)	3前			2			○							1	

【オムニバス・一部共同】

【共同】
【共同】
【共同】
【共同】

【共同】

【一部共同】

【オムニバス】
【オムニバス】

専門教育科目	食科学	人体の構造と機能	生化学(総論)	2後			2		○									1		
			代謝栄養学(生化学各論)	3前			2			○									1	
			栄養学・生化学実験	2後	○		1					○			1	1				
		衛生食品と	食品衛生学	3前	○		2				○				1					
			食品衛生学実験	3後	○		1					○			1					
		栄養と健康	応用栄養学	2後	○		2				○									
			栄養学各論実習	3後	○		1					○				1				
			臨床栄養学総論	3前	○		2				○					1				
			臨床栄養学各論	3後	○		2				○					1				
			臨床栄養学実習	3後	○		1					○								1
			栄養学実習	3前	○		1						○			1				
		栄養の指導	栄養指導論	3前	○		2				○				1					
			栄養指導実習	3後	○		1					○			1					
			栄養カウンセリング論	3前	○		2				○				1					
			栄養カウンセリング実習	3後	○		1					○			1					
	公衆栄養学		3前	○		2				○				1						
	公衆栄養学実習		3後	○		1					○			1						
	給食の運営	給食管理学	2前	○		2				○				1						
		校内給食管理実習	3前	○		1					○			1						
		校外給食管理実習	3後	○		1					○			1						
		調理科学実験	2後	○		1					○				1					
	強化科目	栄養士総合演習	2後	○		1				○				1						
		小計(31科目)	-	-	0	48	0			-				6	3				5	
	住環境デザイン	建築設計	建築デザイン演習A	3前	○		2			○				1					2	
			建築デザイン演習B	3後			2			○				1					2	
			住居CAD演習	2後	○		2				○					1				
			建築CAD演習	3前			2				○								1	
			建築総合演習	4前			2				○								1	
		建築計画・環境	建築計画	3前	○		2				○				1					
			インテリアデザイン論	3前	○		2				○				1					
			地域デザイン論	3後			2				○					1				
建築環境学A			2前			2				○								1		
建築環境学B			3前			2				○								1		
住居設備			2後			2				○								1		
建築環境システム			3後			2				○								1		
建築法規			3後	○		2				○				1						
工建築構造・施工		構造力学B	3前			2				○									1	
		構造力学C	4前			2				○									1	
	構造計画	3後			2				○								1			
	建築材料学	3前			2				○				1							
	建築施工	3後	○		2				○				1							
園芸	ガーデニング実習Ⅱ	2後	○		2					○			1					1		
	ガーデンマテリアルズ	2前	○		2				○				1							
	インテリアグリーン	2後			2				○									1		
	エクステリア演習	3前	○		2					○			1					1		
	社会園芸	3前			2				○									1		
	ランドスケープデザイン論	3後			2				○									1		
	小計(24科目)	-	-	0	48	0			-				4	1				10		
生活イノベーション	ネウラスイフ	社会現象と哲学	2前	○		2			○									1		
		ミュージッキング	1後			2				○								2		
	フューチャーチャイライ	サステナブルファッション	2後	○		2				○			1							
		クールジャパン(日本文化とテクノロジーの融合)	2前	○		2				○								1		
		ユニバーサルデザインⅠ(生活)	2後			2				○								1		
		ユニバーサルデザインⅡ(環境)	3前			2				○								1		
		アシスティブ・テクノロジー	3前	○		2				○								1		
		アントレ・イントレプレナーシップ	3前			2				○								1		
	シビジョネスイノベーター	SNSプロモーションとマーケティング	2後			2				○									1	
		感性デザイン	2後	○		2				○				1						
イノベーションデザイン演習		3前			2				○				1							
ドローン活用とビジネス		2集中			2				○				1					1		
ビジネスイノベーション研究(ケーススタディⅠ)		3前	○		2				○									1		
起業・創業プロジェクト	3前	○		2				○									1			

専門教育科目	生活イノベーション	地域課題を考える	2後	○	2		○							1
		社会起業と非営利組織	3後		2		○							1
		地域イノベーション研究（ケーススタディⅡ）	3後	○	2		○			1				
		地域イノベーション演習（PBL）	4前	○	2			○		2	1		1	1
		国際貢献活動	2前		2			○						1
		小計（19科目）	—	—	0	38	0	—		3	2		1	9
	卒業論文研究・卒	アドバンストゼミA	3前	○	2			○		11	8		1	
		アドバンストゼミB	3後	○	2			○		11	8		1	
		卒業研究A	4前	○	2			○		11	8		1	
		卒業研究B	4後	○	2			○		11	8		1	
		卒業論文・卒業制作	4通	○	4			○		11	8		1	
		小計（5科目）	—	—	12	0	0	—		11	8		1	
合計（183科目）			—	—	27	318	0	—		14	9		1	69
学位又は称号		学士（生活共創学）			学位又は学科の分野			家政関係						
卒業・修了要件及び履修方法								授業期間等						
<p>修業年限及び卒業必要単位数の要件を満たしていなければならない。4年間で在学し、共通教育科目を14単位（必修1単位、選択13単位、うちグローバルスタディズ科目群から4単位）以上、学部共通科目を必修2単位、選択6単位以上、ゼミナール科目の必修6単位、基礎科目・発展科目（すべて選択）は54単位以上、卒業研究・卒業論文（必修）12単位、合計124単位以上修得しなければならない。広く学べるよう選択科目が多いが、資格取得のために必ず履修しなければならない科目についてはカリキュラムマップ・カリキュラムツリーで指導する。</p> <p>なお、履修科目の登録上限は年間44単位であるが、成績上位者には制限を緩和する。</p>								1学年の学期区分			2学期			
								1学期の授業期間			14週			
								1時限の授業の標準時間			100分			

(注)

- 1 学部等、研究科等若しくは高等専門学校等の学科の設置又は大学の学部若しくは大学院の研究科又は短期大学の学科における通信教育の開設の届出を行おうとする場合には、授与する学位の種類及び分野又は学科の分野が同じ学部等、研究科等若しくは高等専門学校の学科（学位の種類及び分野の変更等に関する基準（平成十五年文部科学省告示第三十九号）別表第一備考又は別表第二備考に係るものを含む。）についても作成すること。
- 2 私立の大学の学部若しくは大学院の研究科又は短期大学の学科若しくは高等専門学校の収容定員に係る学則の変更の認可を受けようとする場合若しくは届出を行おうとする場合、大学等の設置者の変更の認可を受けようとする場合又は大学等の廃止の認可を受けようとする場合若しくは届出を行おうとする場合は、この書類を作成する必要はない。
- 3 開設する授業科目に応じて、適宜科目区分の枠を設けること。
- 4 「主要授業科目」の欄は、授業科目が主要授業科目に該当する場合、欄に「○」を記入すること。なお、高等専門学校の学科を設置する場合は、「主要授業科目」の欄に記入せず、斜線を引くこと。
- 5 「単位数」の欄は、各授業科目について、「必修」、「選択」、「自由」のうち、該当する履修区分に単位数を記入すること。
- 6 「授業形態」の欄の「実験・実習」には、実技も含むこと。
- 7 「授業形態」の欄は、各授業科目について、該当する授業形態の欄に「○」を記入すること。ただし、専門職大学等又は専門職学科を設ける大学若しくは短期大学の授業科目のうち、臨地実務実習については「実験・実習」の欄に「臨」の文字を、連携実務演習等については「演習」又は「実験・実習」の欄に「連」の文字を記入すること。
- 8 「基幹教員等の配置」欄の「基幹教員等」は、大学院の研究科又は研究科の専攻の場合は、「専任教員等」と読み替えること。
- 9 「基幹教員等の配置」欄の「基幹教員以外の教員（助手を除く）」は、大学院の研究科又は研究科の専攻の場合は、「専任教員以外の教員（助手を除く）」と読み替えること。
- 10 課程を前期課程及び後期課程に区分する専門職大学若しくは専門職大学の学部等を設置する場合又は前期課程及び後期課程に区分する専門職大学の課程を設置し、若しくは変更する場合は、次により記入すること。
 - (1) 各科目区分における「小計」の欄及び「合計」の欄には、当該専門職大学の全課程に係る科目数、「単位数」及び「基幹教員等の配置」に加え、前期課程に係る科目数、「単位数」及び「基幹教員等の配置」を併記すること。
 - (2) 「学位又は称号」の欄には、当該専門職大学を卒業した者に授与する学位に加え、当該専門職大学の前期課程を修了した者に授与する学位を併記すること。
 - (3) 「卒業・修了要件及び履修方法」の欄には、当該専門職大学の卒業要件及び履修方法に加え、前期課程の修了要件及び履修方法を併記すること。
- 11 高等専門学校の学科を設置する場合は、高等専門学校設置基準第17条第4項の規定により計算することのできる授業科目については、備考欄に「☆」を記入すること。

教育課程等の概要																
(生活共創学部こども教育学科)																
科目区分	授業科目の名称	配当年次	主要授業科目	単位数			授業形態			基幹教員等の配置					備考	
				必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手		基幹教員以外の教員
共通教育科目	リテラシー	リテラシー演習	1前		1			○						2	5	【オムニバス】
		データサイエンス入門	1前			2									1	
		デジタル&AI基礎	1後			2			○						1	
		情報リテラシー基礎	1前			2			○						1	
		コンピュータ演習a	1前			1			○						1	
		コンピュータ演習b	1後			1			○						1	
教養教育	哲学入門	1前			2			○							1	
	心理学	1前			2			○							1	
	世界の歴史	1後			2			○							1	
	ジェンダー論	1後			2			○							1	
	人権と平和	1前			2			○							1	
	法学入門(日本国憲法)	1通			2			○							1	
	法とくらし	1後			2			○							1	
	経済学入門	1後			2			○							1	
	基礎数学	1前			2			○			1					
	基礎統計学	1後			2			○			1					
	基礎化学	1前			2			○							1	
	基礎生物学	1前			2			○							1	
	環境と資源	1後			2			○							1	
	自然科学に親しむ	1前			2			○							1	
現代社会と家政学	1前			2			○							1		
色彩論	1後			2			○							1		
グローバルスタディズ	英語コミュニケーション1	1前			2			○							2	
	英語コミュニケーション2	1後			2			○							2	
	英語セミナー	2前			2			○							2	
	韓国語コミュニケーション1	1前			2			○							1	
	韓国語コミュニケーション2	1後			2			○							1	
	中国語コミュニケーション1	1前			2			○							1	
	中国語コミュニケーション2	1後			2			○							1	
	異文化コミュニケーション	1前			2			○							1	
	異文化交流a	1前			2			○		○					2	
	異文化交流b	1後			2			○							1	
	アカデミック・ジャパニーズ1	1前			2			○							1	
アカデミック・ジャパニーズ2	1後			2			○							1		
日本の歴史と文化	1前			2			○							1		
社会人としての日本語	1後			2			○							1		
キャリア	キャリア形成概論	1前			2			○							1	
	キャリア実践演習1	1前			2			○					1		2	
	キャリア実践演習2	1後			2			○					1		2	
	キャリアアドバンストゼミa	2前			2			○							1	
	キャリアアドバンストゼミb	2後			2			○							1	
ウェルネス	心と身体の健康	1前			2			○				1				
	健康スポーツ演習a	1前			1			○							2	
	健康スポーツ演習b	1後			1			○							2	
	健康スポーツ演習c	1休			2			○				1			1	
	体育講義	1後			1			○		○					1	
	体育実技	1後			1			○		○					1	
	森の体験活動	1前			2			○		○			1			
小計(48科目)				7	82	0					2		3	34		

学部共通科目	生活科学	生活共創学概論	1前	○	2		○			1	1				9	【オムニバス】	
		食科学概論	1後	○		2		○									1
		住環境デザイン概論	1前	○		2		○								1	【オムニバス】
		被服学概論	1後	○		2		○								2	
		こども学概論	1前	○		2		○			1						【オムニバス・一部共同】
		生活イノベーション概論	1前	○		2		○			2			1		3	
生活共創基礎	AI時代の生活科学	1後	○		2		○								1	【オムニバス・一部共同】	
	リーダーシップ基礎	1前			2		○								1		
	マーケティング基礎	1後			2		○								1		
	データサイエンス基礎（生活とデータ）	2前			2		○	○							1		
	ロジカルシンキングとデザイン思考	1後			2		○								1		
	小計（11科目）	—	—	2	20	0	—	—	—	3	1		1		17		
専門教育科目	ゼミナール	初年次ゼミA	1前	○	2					2	1		1			【共同】	
		初年次ゼミB	1後	○	2			○		3	1		1				
		共創プロジェクトゼミA	2前	○	2			○		6	3		4				
		共創プロジェクトゼミB	2後	○	2			○		1			1		3		
		小計（4科目）	—	—	6	2	0	—	—	7	3		4				
専門基礎	STEAM	森を学ぶ・森から学ぶ	1前	○		2		○					1			【共同】	
		音感受の世界	1前	○		1		○		1							
		ヴォーカルレッスン	1後			1		○					1		3		
		ものづくりと教育	1後	○		1		○		1					1		
		ヴィジュアルコミュニケーション	1前	○		1		○		1							
		教学トピックス	1後	○		1		○			1						
	保育の目的の本質と	保育原理	1前	○		2		○		1			1			【オムニバス】	
		児童福祉論	2前			2		○							1		
		社会福祉	1前	○		2		○							1		
		社会的養護Ⅰ	2前			2		○							1		
保育の内容と方法	発達心理学	1前	○		2		○				1						
	こどもの理解と援助	1後	○		1		○			1					【共同】		
	乳児保育Ⅰ	1後	○		2		○			1							
	乳児保育Ⅱ	1後	○		1		○		1					1			
	児童文化	1後			2		○										
	こどもと健康	2前			1		○				1						
	こどもと人間関係	2前			1		○			1							
	こどもと環境	2前			1		○		1								
こどもと言葉	2前			1		○		1									
こどもと表現	2前			1		○		3									
教育課程と教科指導	国語科研究（書写を含む）	1後			2		○							1	【オムニバス】		
	社会科研究	2前			2		○							1			
	算数科研究	2後			2		○			1							
	理科研究	2後			2		○					1					
	生活科研究	1後			2		○		1								
	音楽科研究	3前			2		○		1					1			
	図画工作科研究	2後			2		○		1								
	家庭科研究	1後			2		○							1			
	体育科研究	2前			2		○					1					
	外国語科研究	1前			2		○							1			
と教育方法の理念	教育原理	2前	○		2		○		1						【オムニバス】		
	教育心理学	1前			2		○							1			
	ICT活用の理論と実践	2後	○		2		○					2					
	教師・保育者論	2前	○		2		○		2								
と特別支援教育の基礎	障害の基礎的理解	1前	○		2		○					1			【オムニバス】		
	特別支援教育総論	1前			2		○		1								
	知的障害者の心理・生理・病理	1前			2		○					1		1			
	特別支援学校教育課程論	1後			2		○		1								
	視覚障害の理解と支援	1後			1		○							1			
	聴覚障害の理解と支援	2後			1		○							1			
	発達障害の理解と支援	2後	○		2		○					1					
保育・教育実習	こども教育インターンシップ	1前	○		1			○	7	3		4		【共同】			
小計（42科目）		—	—	0	69	0	—	—	7	3		4		17			

専門教育科目	S T E A M	こどもとアート	2前	○		2		○		1							3	【共同】	
		ピアノのテクニック	2前			1		○										1	
		人工知能と教育	2後			1		○											
		科学する心	2後	○		1		○					1						
	質 保 育 と 目 的 本	こども家庭支援論	3後	○		2		○			1							1	【オムニバス】
		保育方法論	3後	○		2		○					1						
		こころの臨床	4後			2		○				1							
	保 育 の 内 容 と 方 法	こども家庭支援の心理学	2前	○		2		○				1							
		こどもの保健	2後			2		○										1	
		こどもの食と栄養	2後			2		○										1	
		保育の計画と評価	3後	○		2		○			2								【オムニバス】
		保育内容総論	3後	○		2		○			2								【オムニバス】
		健康の指導法	2後	○		2		○					1					1	【オムニバス】
		人間関係の指導法	2後	○		2		○				1							
		環境の指導法	2後	○		2		○			1								
		言葉の指導法	2後	○		2		○			1								
		表現の指導法	2後	○		2		○			3								
		小児保健演習	3前			1		○											1
		障害児保育	3前			2		○											1
		社会的養護Ⅱ	2後			1		○			1								1
		子育て支援	3後			1		○											2
		保育・教職実践演習	4通	○		2		○			4	2		3					【オムニバス・ 共同】
		多文化教育・保育	3前	○		2		○			1								1
	発達臨床心理学	3後			2		○				1								
	子育て支援実践演習A	3通			2		○				1								
	子育て支援実践演習B	4通			2		○				1								
	自然体験活動実践演習A	3通			2		○						1						
	自然体験活動実践演習B	4通			2		○						1						
教 育 課 程 と 教 科 指 導	国語科教育法（書写を含む）	2前			2		○											1	
	社会科教育法	3前			2		○											1	
	算数科教育法	3前	○		2		○			1									
	理科教育法	3後	○		2		○					1							
	生活科教育法	2後			2		○											1	
	音楽科教育法	3後	○		2		○			1								1	
	図画工作科教育法	3前	○		2		○			1									
	家庭科教育法	2前			2		○											1	
	体育科教育法	3後	○		2		○						1					1	
	外国語科教育法	3後			2		○											1	
初等教育演習	2後			2		○			1										
教育の理 念と方法	カリキュラム論	3前	○		2		○		2									【オムニバス】	
基 礎 別 と 支 援 用 教 育 の	重複障害の理解と支援	3後			2		○						1						
	肢体不自由者の心理・生理・病理	2後			2		○											1	
	病弱者の心理・生理・病理	2後			2		○											1	
	知的障害者の教育	2後	○		2		○			1			1						
	肢体不自由者の教育	3前	○		2		○						1						
病弱者の教育	3前	○		2		○			1										
	小計（46科目）	—	—	0	86	0	—	—	7	3		4					23		
業 卒 論 文 研 究 ・ 卒	アドバンストゼミA	3前	○	2			○			6	3		4						
	アドバンストゼミB	3後	○	2			○		6	3		4							
	卒業研究A	4前	○	2			○		5	3		4							
	卒業研究B	4後	○	2			○		5	3		4							
	卒業論文・卒業制作	4通	○	4			○		5	3		4							
	小計（5科目）	—	—	12	0	0	—	—	6	3		4							

資格科目	幼稚園一種・小学校一種	教育・保育制度論	2前				2	○			2						【オムニバス】		
		特別支援教育論	2前				1	○			1							【オムニバス】	
		道徳教育論	2後				2	○			1	1						【オムニバス】	
		特別活動論	3前				2	○										【オムニバス】	
		総合的な学習の指導法	3後				1	○			1					1		【オムニバス・共同】	
		教育方法・技術論	3前				1	○			2							【共同】	
		生徒指導論	3前				1	○								1		【共同】	
		教育相談論	2前				2	○								1		【共同】	
		進路指導論	3前				1	○								1		【共同】	
		小学校教職実践演習	4後				2		○			1				1		【オムニバス・共同】	
		幼稚園教育実習指導	3後				1		○			1				1		【共同】	
		小学校教育実習指導	3前				1		○			1				1		【共同】	
		幼稚園教育実習	4前				4			○		7	3			4		【共同】	
		小学校教育実習	4前				4			○		7	3			4		【共同】	
特別支援学	特別支援学	特別支援教育実習・実習指導	4前後				3			○				7	3		4	【共同】	
保育士	保育士に必要な科目	保育実習指導ⅠA	2後				1		○					1				【共同】	
		保育実習指導ⅠB	3前				1		○					1				【共同】	
		保育実習ⅠA	2後				2			○				7	3		4	【共同】	
		保育実習ⅠB	3前				2			○				7	3		4	【共同】	
		保育実習指導Ⅱ	3後				1		○					1				【共同】	
		保育実習Ⅱ	3後				2			○				7	3		4	【共同】	
		保育実習指導Ⅲ	3後				1		○					1				【共同】	
		保育実習Ⅲ	3後				2			○				7	3		4	【共同】	
		小計(23科目)	—	—	0	0	40	—	—	—	—	—	—	7	3	—	4	4	
合計(178科目)			—	—	27	259	40	—	—	—	—	—	—	7	3	—	4	79	
学位又は称号		学士(こども教育学)			学位又は学科の分野				教育学・保育学関係										
卒業・修了要件及び履修方法										授業期間等									
修業年限及び卒業必要単位数の要件を満たしていなければならない。4年間で在学し、共通教育科目を14単位(必修1単位、選択13単位、うちグローバルスタディズ科目群から4単位)以上、学部共通科目を必修2単位、選択6単位以上、ゼミナール科目の必修6単位、基礎科目・発展科目(すべて選択)は54単位以上、卒業研究・卒業論文(必修)12単位、合計124単位以上修得しなければならない。広く学べるよう選択科目が多いが、資格取得のために必ず履修しなければならない科目についてはカリキュラムマップ・カリキュラムツリーで指導する。 なお、履修科目の登録上限は年間44単位であるが、成績上位者には制限を緩和する。										1学年の学期区分					2学期				
										1学期の授業期間					14週				
										1時限の授業の標準時間					100分				

(注)

- 学部等、研究科等若しくは高等専門学校の学科の設置又は大学の学部若しくは大学院の研究科又は短期大学の学科における通信教育の開設の届出を行おうとする場合には、授与する学位の種類及び分野又は学科の分野が同じ学部等、研究科等若しくは高等専門学校の学科(学位の種類及び分野の変更等に関する基準(平成十五年文部科学省告示第三十九号)別表第一備考又は別表第二備考に係るものを含む。)についても作成すること。
- 私立の大学の学部若しくは大学院の研究科又は短期大学の学科若しくは高等専門学校の収容定員に係る学則の変更の認可を受けようとする場合若しくは届出を行おうとする場合、大学等の設置者の変更の認可を受けようとする場合又は大学等の廃止の認可を受けようとする場合若しくは届出を行おうとする場合は、この書類を作成する必要はない。
- 開設する授業科目に応じて、適宜科目区分の枠を設けること。
- 「主要授業科目」の欄は、授業科目が主要授業科目に該当する場合、欄に「○」を記入すること。なお、高等専門学校の学科を設置する場合は、「主要授業科目」の欄に記入せず、斜線を引くこと。
- 「単位数」の欄は、各授業科目について、「必修」、「選択」、「自由」のうち、該当する履修区分に単位数を記入すること。
- 「授業形態」の欄の「実験・実習」には、実技も含むこと。
- 「授業形態」の欄は、各授業科目について、該当する授業形態の欄に「○」を記入すること。ただし、専門職大学等又は専門職学科を設ける大学若しくは短期大学の授業科目のうち、臨地実務実習については「実験・実習」の欄に「臨」の文字を、連携実務演習等については「演習」又は「実験・実習」の欄に「連」の文字を記入すること。
- 「基幹教員等の配置」欄の「基幹教員等」は、大学院の研究科又は研究科の専攻の場合は、「専任教員等」と読み替えること。
- 「基幹教員等の配置」欄の「基幹教員以外の教員(助手を除く)」は、大学院の研究科又は研究科の専攻の場合は、「専任教員以外の教員(助手を除く)」と読み替えること。
- 課程を前期課程及び後期課程に区分する専門職大学若しくは専門職大学の学部等を設置する場合又は前期課程及び後期課程に区分する専門職大学の課程を設置し、若しくは変更する場合は、次により記入すること。
 - 各科目区分における「小計」の欄及び「合計」の欄には、当該専門職大学の全課程に係る科目数、「単位数」及び「基幹教員等の配置」に加え、前期課程に係る科目数、「単位数」及び「基幹教員等の配置」を併記すること。
 - 「学位又は称号」の欄には、当該専門職大学を卒業した者に授与する学位に加え、当該専門職大学の前期課程を修了した者に授与する学位を併記すること。
 - 「卒業・修了要件及び履修方法」の欄には、当該専門職大学の卒業要件及び履修方法に加え、前期課程の修了要件及び履修方法を併記すること。
- 高等専門学校の学科を設置する場合は、高等専門学校設置基準第17条第4項の規定により計算することのできる授業科目については、備考欄に「☆」を記入すること。

授 業 科 目 の 概 要					
(生活共創学部生活共創学科)					
科目区分	授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容	備考	
共通教育科目	リテラシー		(概要) レポート・論文を作成する技術の習得を通して、大学教育に対応できる基礎力を育成することを目指す。演習形式で具体的な作業を経験しながら実践的に学ぶことを通じて、主体的な学びの姿勢を身に付けさせるとともに、高校までとは質の異なる大学での教育へとスムーズに移行させる橋渡しの役目を担うこともはかる。レポートの形式や表現/テーマ設定の方法やアウトラインの作り方/文献検索の方法や文献の利用方法/表・図からの読み取りや表・図の使い方を扱う。 (オムニバス方式/全14回) (21森朋子・20千葉一博・41原田晋吾・53小野春奈/全8回) 第1回～第4回：レポートの形式や表現を扱う。 第5回～第8回：テーマ設定の方法やアウトラインの作り方を扱う。 (23澤田雅彦・40末松加奈・24佐々木麻紀子・53小野春奈/全6回) 第9回～第11回：文献検索の方法や文献の利用方法を扱う。 第12回～第14回：表・図からの読み取りや表・図の使い方を扱う。	オムニバス方式	
		リテラシー演習			
		データサイエンス入門		データサイエンス・AIやデータ倫理等の基礎を説明し、また学内の情報ネットワークに接続したパソコンでデータリテラシーを養う演習に取り組む。説明の理解と演習により、データ・AIを活用する上での留意事項や新たなビジネスやサービスを知り、またデータを適切に読み解き扱うことができるようになることを目指す。社会や日常生活が大きく変化していることを理解し、ビッグデータとその活用、活用の結果生まれる新しい価値等についても、事例を通して考える。	
		デジタル&AI基礎		学内の情報ネットワークに接続したパソコンで、基礎的なプログラミングの演習に取り組む。演習により、デジタルリテラシーを向上させ、デジタル技術を有効に活用することができるようになることを目指す。アルゴリズムとデータ構造を理解することから始め、自らコーディングすることに取り組む。また、AIを応用する演習にも取り組む。演習により、自らの学修や創作活動のスキルを向上させることができるようになることを目指す。AIの機能を理解することから始め、その利用方法を学ぶ演習に取り組む。	
		情報リテラシー基礎		学内の情報ネットワークに接続したパソコンで、情報検索の演習に取り組む。演習により、検索結果の評価に関するスキルを向上させることができるようになることを目指す。プライバシーや著作権に関わる情報の取り扱いを理解し、使用する情報を適切に管理することを学ぶ。また、情報社会における脅威を理解し、セキュリティ対策を適切に行う演習にも取り組む。情報検索やセキュリティ対策の演習により、情報倫理に関する理解を深めることを目指す。	
		コンピュータ演習a		学内の情報ネットワークに接続したパソコンで、文書やプレゼンテーションを作成する演習に取り組む。演習により、コンピュータを自ら利用して、簡単な文書やプレゼンテーションを正確に作成できるようにすることを旨とする。タイピングやメールの送受信を練習することから始め、文書作成ソフトウェアで文章を入力して適切に編集することに取り組む。また、図表を処理する技術も演習を通して身に付ける。さらに、プレゼンテーション作成ソフトウェアでスライドを作成し、プレゼンテーション全体を適切に編集することにも取り組む。	
	コンピュータ演習b		学内の情報ネットワークに接続したパソコンで、表計算の演習に取り組む。演習により、コンピュータを自ら利用して、表計算による情報処理が正確にできるようになることを目指す。データや関数を入力して数式の基本を理解することから始め、データや数式による計算結果を元にグラフを作成することに取り組む。また、データの整列や抽出、条件判断や検索に基づく処理も演習を通して身に付ける。さらに、簡単なプログラミングも確認する。		
教養科目	哲学入門		ひとは生まれつき「知る」ことを欲する。生活のためでもなく、娯楽のためでもなく、「ただ知るために知る」ところに「知る」ことの真の意味がある。と人は言う。そこで自己自身や、そして自己を取り囲む自然・世界に心の眼を向けるとき、さまざまな疑問や問題が生まれる。この授業では、哲学についての知識を深める中で、「何故?」、「どうして?」、「何のために?」などの問いを自分自身に発する姿勢を養う。ここから「哲学」が始まる。忙しい現代社会の中で、私たちは自らに問い掛けることを忘れがちである。「知る」ことを恋い求めることこそ、「哲学」であるといえよう。		

授 業 科 目 の 概 要				
(生活共創学部生活共創学科)				
科目区分	授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容	備考
共通教育科目 教養科目	心理学		心理学の起源は古代ギリシアの哲学にさかのぼる。20世紀に「行動の科学」として自立した学問となり、科学技術の進歩と密接に関係しながらさらに発展しようとしている。この講義では、行動の生理・生物学的基礎、知覚、認知、情動、学習と記憶、動機づけ、パーソナリティ、社会的行動などのテーマを取り上げ、「心と行動の謎」についてその基礎的知識を学び、現代社会で起こっている様々な話題と心理学との関連を学習することで、豊かに生きるヒントを得ることを目指す。	
	世界の歴史		多数の国家・地域や民族がどう関係し合いながら人類の歴史をつくってきたかを学ぶ。世界の歴史の大きな枠組みと流れを、日本の歴史とも関連づけながら理解し、文化の多様性と現代世界の特徴を広い視野から考察することによって、歴史的思考力を培う。ヨーロッパやアメリカ、中国の歴史に片寄らず、イスラーム、アフリカ、ラテンアメリカ、東欧諸国にも触れ、横断的な広い視野から世界史が本来もっている面白さを理解できるよう努める。	
	ジェンダー論		ジェンダーの基礎を学ぶことから、男らしさや女らしさやしぼられず、個人の能力を伸ばし生きていくことの大切さを学ぶ。ジェンダーの問題は女性だけの問題ではなく、男性にも大きく関わっている。女性も男性も、またセクシュアル・マイノリティの人々も自分らしく生きるものの大切さについて考える。また、ジェンダー問題と深く関わるリプロダクティブ・ヘルス/ライツ(性と生殖の健康と権利)について歴史的経緯や制度・政策面も含め学ぶ。以上のことから、人は一人ずつ異なる存在であり、尊厳をもって生きるものの大切さを考える。	
	人権と平和		日本国憲法を含む法の意義と機能を明らかにし、憲法を含む法に規定されている人権に関するものの見方や考え方が身に付けられるよう努める。従来体系にとらわれず、現実の人権問題を直視して、その構造的な特徴を明らかにし、そこから理論を帰納的に形成し、今日の社会に存する「人権と平和」に関する問題を解明する契機を見出したい。主として女性のあらゆるライフステージ(就職、結婚、子育て、離婚、介護、相続など)に関わる「人権と平和」を考察する。	
	法学入門(日本国憲法)		はじめに、法の基礎を概観し、私たちの生活の中で法をどのように活用すればよいのか、法的作用や役割を考えてみる。次に、日本国憲法の理念から現実の憲法政治の問題状況を分析する。とりわけ、国民権のもとにおける国会の機能、行政の肥大化現象と地方行政、裁判所の人権保障機関としての役割などについて考察する。後半は、憲法訴訟における人権の憲法判例のリーディング・ケースを考察し、今日の基本権をめぐる問題状況を明らかにする。	
	法とくらし		私たちが安心してくらしを営むのは法によって社会の秩序が保たれているからである。法なしにくらしは成り立たず、社会で生きていくためには法に対する理解が不可欠である。授業では、弁護士である法実務家が、憲法、民法、刑法などの法律に加えて、会社などの組織で働く際に知っておくべき労働法など、これからの生活に必要なと考えられる法律を取りあげ、それぞれの法律の目的や基本的事項について、判例(実際の裁判例)なども紹介しながら解説を行う。法がくらしにどう関わっているかを理解し、法的な思考の基礎を身に付けることを期待したい。	
	経済学入門		人間が現代社会で生きている長い年月の間、経済と関わらない一日はない。人が生きていくためには、何らかの経済取引を重ねていかななくてはならない。言い換えれば、経済と生活は、表裏一体で営まれ、社会をつなぎ、命をはぐくんでいくのである。このことを、国の経済・政府の機能・私たちの納める税を通して学んでいく。自分の財布と経済と社会が敏感に関わりあい循環していることを学ぶ。生活理解→人間理解→社会理解へと、思考が展開し多角的な思考をもつことを狙いとする。	
	基礎数学		高校までの数学は、どの分野も生きる上で役に立つ重要なものばかりである。授業では、高校までに学習した数学Ⅰ・数学A・数学Ⅱ・数学B・数学Ⅲ・数学Cの中から特に重要な項目を選び出して復習し発展させることで、知識・技術・思考を確実なものとし、それらを自然科学や社会科学のみならず日常の様々な事象に応用することで、数学の大切さを学ぶ。また、この科目を履修することで、公務員試験やSPI試験で出題されるテーマを大まかにフォローすることができる。	
	基礎統計学		統計の基礎を学び、データを適切に処理でき、かつ得られた結果を正しく理解、解釈するために必要な知識・技術を学ぶ。まずは、記述統計学としての1変量の標本データの要約ができるように平均値、分散、標準偏差に代表される基本統計量を学ぶ。次に、2変量のデータ解析の基本として相関分析、回帰分析を学ぶ。最後に、離散型確率分布や連続型確率分布などにおける確率計算および大数の法則・中心極限定理を理解し、推定、検定の考え方につながる推測統計学の基本的考え方を学ぶ。毎回の講義では、事例を複数提示し、様々な事象への応用に触れる。	

授 業 科 目 の 概 要

(生活共創学部生活共創学科)

科目区分	授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容	備考
共通教育科目	基礎化学		化学は、物質を扱う学問であり、自然科学分野における中心的役割を果たしている。また、私たちの生活は化学に支えられているといっても過言ではない。「物質とは何か」、「物質の性質を決めているのは何か」、「なぜ物質は変化するのか」等、物質を分子の目から捉え、物質の変化におけるエネルギーの役割を学ぶ。本講義は、科学的に物質を捉える力を養うとともに、有機化学など化学的素養が必要な専門科目を理解するための入門科目である。	
	基礎生物学		生命の基本単位は細胞で、細胞自体の基本構造は生物によってほとんど差が見られない。そこで、この授業ではまず細胞について学び、次いで、細胞が集まって作り上げる組織やいろいろな組織が集まって作り上げる器官などの構造や機能を学ぶ。その中で、私たちの生活、生命を支えるしくみについて理解を深める。	
	環境と資源		毎日のように、新聞記事やニュースで環境や生態系に関する話題が取り上げられている。その多くは地球温暖化やオゾンホール、野生生物の絶滅など好ましくない話題ばかりで、環境問題は日ごとに深刻化している。この授業では、地球環境とそこに生活する生物の関係、生物同士が与え合う関係、人類を含む生物が環境に与える影響などについてわかりやすく解説し、環境・資源の利用・保全の実態と問題点について理解を深めることを目的とする。	
	自然科学に親しむ		自然科学の教養は、私たちが日常生活を送る上で必要不可欠な知識である。しかしながら、それらが生活の中で当たり前存在であるがゆえに、私たちはその不思議に目を留めることが少ない。そこで本講義では、学生の皆さんが、身近な自然科学への理解を深め、科学的な思考を促し、より科学的な視点を持つことを目的として展開する。具体的には、科学的な基本原則や方法論、自然界の理解、科学技術の日常生活への応用や現代社会への影響、科学的な思考などについて、事例を紹介しながら、自然科学の魅力と実用性を伝える。	
	現代社会と家政学		家政学はすべての人が質の高い生活を維持し、生きがいをもって人生を全うするための方法を、生活者の視点に立って考察し、提案することを目的として発展してきた。授業では、家庭生活や家族関係の変化を学び、生活と社会の関わりについて理解を深める。また、グローバルに生活を捉えるための視点を身に付けてもらいたい。家政学の理念や基本的姿勢を学び、現代社会が直面する問題を解決するために自分には何ができるのかを考え、今後の学習につなげていくことを目標とする。	
	色彩論		色彩に関する科学的な基礎知識について学ぶとともに、デザインや美術の分野における色彩の扱い方に関して考察を行う。色彩について感覚的に認識するだけでなく、色が見える仕組みや色の知覚についての考察を通じて、色とは何なのかという問題を論理的に分析し、理解することを目的とする。あわせて、インテリアやファッション、食品など、生活の中のさまざまな場面で色彩を効果的に活用する力を養い、色彩に対する感性を磨きあげていくことも目指す。	
グローバルスタディーズ	英語コミュニケーション1		英語を使った教室活動を通して、英語によるコミュニケーション能力を養うことを目的としている。授業では、身近なテーマについて、言語の4技能（「聞く」「話す」「読む」「書く」）を総合的に使い、我々が真のコミュニケーションで通常行っているコミュニケーションに近い形で学ぶ。教室活動のタスクを完了するために必要な音声を訓練し、語・文法・表現を学ぶことで、より正確でなめらかな英語の習得を目指していく。また、英語によるコミュニケーションでの応答表現や英語圏の習慣・文化についても学んでいく。	
	英語コミュニケーション2		英語を使った教室活動を通して、英語によるコミュニケーション能力を高めることを目的としている。授業では、複数のテーマについて「説明する」「比較する」「自分の考えを述べる」「質問する」「質問に答える」などの機能を学び、最終的に自分の選んだテーマで発表（ミニレポート、ポスター、口頭など）する。その過程で必要な音声を訓練し、語・文法・表現を学ぶことで、より正確でなめらかな英語の習得を目指していく。また、英語でよく使われる応答表現や英語圏の習慣・文化についても学んでいく。	
	英語セミナー		英語を使った教室活動を通して、短期留学や地域・ビジネスの場でも対応できる英語コミュニケーション力を習得することを目的としている。授業では、相手によって使い分けが必要な丁寧さのレベルなども学び、コミュニケーションでより的確に表現する力を養う。また、「調べる」「まとめる」「自分の考えを述べる」「他者に伝える」というプロセスを行う中で、英語による思考力を高めていく。公的な場での応答表現やプレゼンテーション術も実践的に学び、「日常会話」を超えた英語力を目指す。	

授 業 科 目 の 概 要

(生活共創学部生活共創学科)

科目区分	授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容	備考
共通教育科目	グローバルスタディズ 韓国語コミュニケーション1		日本と韓国は政治、経済、文化などあらゆる分野できわめて密接な関係にある。そのため人の往来も活発であり、日本国内における韓国語学習の必要性は高まってきている。この科目では、韓国語・ハングルの初めを学習する学生を対象とし、文字、発音、初級文法などを学ぶ。授業では発音や聞き取りの確認テストを繰り返し、韓国語の基礎を一つ一つ確実にマスターすることを目指す。あいさつなどの基礎的な文章を勉強するうちに、日本語と韓国語がよく似ていることに気づき、韓国語に親しみがわくことを期待したい。	
	韓国語コミュニケーション2		日本と韓国は政治、経済、文化などあらゆる分野できわめて密接な関係にある。そのため人の往来も活発であり、日本国内における韓国語学習の必要性は高まってきている。この科目では、韓国語・ハングルの文字、発音、初級文法を確認し、基礎会話などを学ぶ。授業では発音や聞き取りの確認テストを繰り返し、韓国語の基礎を一つ一つ確実にマスターすることを目指す。あいさつなどの基礎的な文章を勉強するうちに、日本語と韓国語がよく似ていることに気づき、韓国語に親しみがわくことを期待したい。	
	中国語コミュニケーション1		日本と中国の関わりは長い。現代では、日本との経済的な結びつきもますます深まってきているため、日本国内における中国語学習の必要性も高まってきている。この科目では中国語を初めて学ぶ学生を対象とし、「現代漢語標準語」を初歩から学ぶ。まずは発音の練習を重点的に行い、正しく発音できるようになることを目指す。基本文型・文法も確実に身に付くよう反復的に学習し、中国語学習の基礎固めをする。	
	中国語コミュニケーション2		日本と中国の関わりは長い。現代では、日本との経済的な結びつきもますます深まってきているため、日本国内における中国語学習の必要性も高まってきている。この科目では中国語の発音や基本文型・文法を確認し、より複雑な文法も身に付くよう反復的に学習する。また、中国語の簡単な会話ができるようになることを目指す。	
	異文化コミュニケーション		グローバル化が進んだ現代において、情報・人・物が国境を越えて交わりあう現象は日常茶飯事の出来事である。文化に対する理解が不足していれば、異文化間における不用意な接触は緊張や摩擦を生み出すきっかけにもなる。では、文化背景の異なる人々と好ましい人間関係を維持するためには、どのようなテクニックが必要だろうか。この授業では異文化の諸現象に直面したとき我々はどういう考え行動すべきか、また文化の違いをどのように調整したらよいか、異文化コミュニケーションの視点から学ぶ。	
	異文化交流a		英語圏の大学またはそれに準ずる英語教育機関で短期英語&文化コースを受講する。同時に研修地の名所旧跡の視察、生活様式の体験、現地で出会った人々との交流を通して、異文化理解を深め、英語によるコミュニケーション力を高めていく。研修前には事前授業が行われ、サバイバル・イングリッシュや研修地の文化等を学ぶ。	共同
	異文化交流b		海外の大学生とオンラインで交流する。家庭、大学、社会における暮らしを互いに紹介し合う中で、人間としての共通点および文化の違いによる相違点についての理解を深めていく。また、地球規模の問題をともに考えることで、よりよい未来を構築するための認識を共有していく。	
※日留学生・科目事情	アカデミック・ジャパニーズ1		留学生在が大学で学ぶ上で必要な思考力および技術力を身に付けることを目的としている。授業では、複数のプロジェクトに取り組む中で、テーマについて理解し、自らの考察を加え、他者に論理的に伝えていくという訓練を繰り返していく。また、その過程において、「アイデアの出し方」「アウトラインの作成」「情報収集の方法」「レポート・発表の構成および表現」「資料の作成」等の技術について学ぶ。「日本語で」学ぶプロセスにおいて、大学生として必要な日本語能力の向上を図っていく。	
	アカデミック・ジャパニーズ2		留学生在が大学で学ぶ上で必要な思考力および技術力を高めることを目的としている。授業では、複数のプロジェクトに取り組む中で、「情報を的確に集め理解する」「理解した情報をもとに自分の考えをまとめる」「他者に分かりやすいように伝える」というプロセスが自分で行えるようになるための訓練を繰り返していく。プロジェクトのテーマには、社会問題や地球規模の問題などを取りあげ、最後は所属学科の学びに関連したテーマを自ら設定する。「考察を深める」ことに重点を置き、よりレベルの高い日本語表現の習得も目指していく。	
	日本の歴史と文化		日本の歴史や文化についての知識は、大学における様々な勉強を理解するための背景として必要であり、また留学生自身の日本社会への適応にも重要な要素となる。しかし日本文化に育った者が大学入学時までに身に付けているこれらの知識を、留学生は意識的に学ぶことで蓄積していかなければならない。「日本の歴史と文化」では、日本の歴史を学ぶことで、日本の政治的、文化的変遷を学び、更にそこから読み取れる日本文化の特徴および日本人の思考形式について理解を深めていく。	

授 業 科 目 の 概 要				
(生活共創学部生活共創学科)				
科目区分	授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容	備考
共通教育科目	※日本語・日本事情 グローバルスタディ	社会人としての日本語	留学生の中には、卒業後日本での就職や進学、母国での日本関連企業等への就職を希望する者が多い。本科目は、卒業後、日本と海外との架け橋として活躍する可能性のある学生に対し、社会人として求められる日本語力を養成することを目的としている。授業では、敬語の文型および用法を理解した上で、実践を意識した練習を多く取り入れていく。また、日本語の言語表現を通して、日本人の思考形式への理解を深め、日本社会における円滑なコミュニケーションの方法を身に付けていく。	
	キャリア	キャリア形成概論	生涯キャリア発達の視点に立ち、社会変化の激しい現代を生きる学生が、自立的に自己のキャリア形成を構築するための知識と実践力を学ぶ。本科目は、キャリア形成の基礎として、自己の生涯にわたるキャリア発達プロセスを理解するとともに、社会活動に関する実践的知識を深めることにより、社会における自己の役割と意義を認識し、労働観、職業観を醸成することを目指す。また、本科目学習後に履修する実践演習を行うための基礎的業務知識も修得する。	
		キャリア実践演習1	社会参加、社会改革意識を持つシティズンシップ教育の一環として、社会活動に参画しながら、大学における学習や活動を社会に還元し、自己の所属するコミュニティに貢献する方法を実践的に学ぶ。本科目(実践演習1)は、学生が所属する最も身近なコミュニティである大学内の多様な職場、事業運営に参画し、大学コミュニティに貢献する。職場運営や就業制度等の基礎的理解を体験的に学ぶとともに、学生個々の主体性や行動力、企画力や協調性、リーダーシップなどの能力を育成する。個々の学生の指導育成は、各部署の職員と科目担当教員が連携して行う。 (8佐々木ひとみ/14回) (29佐野潤子/4回) (共同) (40末松加奈/4回) (共同)	一部共同
		キャリア実践演習2	社会参加、社会改革意識を持つシティズンシップ教育の一環として、社会活動に参画しながら、大学における学習や活動を社会に還元し、自己の所属するコミュニティに貢献する方法を実践的に学ぶ。本科目(実践演習2)は、学外の多様な職場、事業運営に参画し、社会コミュニティに貢献する。社会の多様な組織の実践活動を通して、社会活動の現状と課題を体験的に学ぶとともに、学生個々の主体性や行動力、企画力や協調性、リーダーシップなどの能力を育成する。個々の学生の指導育成は、各受入先の担当者と科目担当教員が連携して行う。 (8佐々木ひとみ/14回) (29佐野潤子/4回) (共同) (40末松加奈/4回) (共同)	一部共同
		キャリアアドバンスゼミa	大学生のアカデミックスキルとしても重要であり、また社会人としても有用なキャリア実践スキルを修得し、より自立的で高度な実践力を持つ人材の養成を目的とする。本科目(アドバンスゼミa)では、特に授業内で文章の作成法、発表、討論を繰り返し実施し、論理的思考力、表現力、キャリア構築力、自己管理力の修得を目指す。また、修得過程では実際の就職活動場面で使用する書式や企業研究事例を題材とし、実際の将来の選択肢の探索に役立つように工夫する。	
		キャリアアドバンスゼミb	大学生のアカデミックスキルとしても重要であり、また社会人としても有用なキャリア実践スキルを修得し、より自立的で高度な実践力を持つ人材の養成を目的とする。本科目(アドバンスゼミb)では、特に授業内で企業等に関する調査、発表、討論を繰り返し実施し、学習習慣を育成するとともに、企業や自治体、NPO/NGO等の機能や役割、実際の事業活動の理解を深める。実際に各組織の関係者等を招聘したり業務施設を訪問したりし、社会の現状と課題を実践的に理解する機会を設ける。また、修得過程では多様な社会活動およびそこで働く人々を知ること、実際の将来の就業先の選択肢の探索に役立つように工夫する。	
	ウェルネス	心と身体の健康	私たちの心と身体は深いところで重なり合い相互に影響し合っている。生涯を通じて心身ともに健康であることは、私たちが自分らしくよりよく生きる(=Well-being)上で重要な意味を持っている。本授業では心と身体それぞれの健康について基本的な知識を学ぶとともに、健康であることの意味や健康であるために必要なことについて理解を深める。その上で、現代社会において私たちが生涯にわたり健康に生きていくことについて、臨床的な視点を取り入れながら考えていく。	
		健康スポーツ演習a	自己の心身の健康を高め、生涯にわたって運動やスポーツに親しみながら自己を成長させる力を身に付けることを目的に、様々なスポーツ種目やレクリエーションスポーツについて、事前事後学習や実際の運動体験を通じ、その知識技術を修得する。同時に、身体活動を通じた他者との関わりや自己との対話を通じ、自己理解を深め、社会性を醸成することを目指す。なお、本科目では春～夏の気候に応じたスポーツの実践と安全管理についても取り上げる。	

授 業 科 目 の 概 要				
(生活共創学部生活共創学科)				
科目区分	授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容	備考
共通教育科目	ウェルネス 健康スポーツ演習b		自己の心身の健康を高め、生涯にわたって運動やスポーツに親しみながら自己を成長させる力を身に付けることを目的に、様々なスポーツ種目やレクリエーションスポーツについて、事前事後学習や実際の運動体験を通じ、その知識技術を修得する。同時に、身体活動を通じた他者との関わりや自己との対話を通じ、自己理解を深め、社会性を醸成することを目指す。なお、本科目では秋～冬の気候に応じたスポーツの実践と安全管理についても取り上げる。	
	健康スポーツ演習c		一人ひとりのライフスタイルや年齢、性別、体力、興味などに応じて、誰もが、いつでも、どこでも、誰とでも気軽にスポーツに親しみ、スポーツを楽しむことのできる生涯スポーツを取り上げる。生涯スポーツの目的、特性、方法を理解し、自ら実践することは、スポーツを通じた幸福で豊かな生活を営む基盤となる。また、生涯スポーツを楽しむ、生涯スポーツを通じて仲間とふれあうことは、生涯を通じた健康の維持増進につながり、人生を豊かにする機会となる。	
	体育講義		子どものからだと運動能力について理解していく上での基礎的な知識を学ぶ。子どもの発育発達にもなう、遊びからルールをともなったスポーツへの参加がどのように身体的・精神的に影響を及ぼしていくのかについて考えていく。運動の効果や評価の方法についても具体的な事例を取り上げながら学んでいく。また、小さい頃からのエリート教育・才能教育について運動環境、指導者、プログラムやスポーツ障害といった観点から考えていく。	
	体育実技		幼児と一緒に運動やスポーツを行うためには、自身が運動やスポーツの楽しさを知り実践しなくてはならない。子どもたちは勝ち負けよりも運動そのものを楽しんでいる。運動やスポーツがコミュニケーションの形成や自己効力の向上に大きな効果を上げていることも明らかである。子どもと一緒に遊べる運動やスポーツを実践していく。室内運動や屋外での運動についても取り上げ、環境に応じた運動やスポーツ種目を実施していく。さらに伝承的運動遊びも実施していく。	
	森の体験活動		都市化やデンタル化が進む現在、豊かな自然環境下での体験活動の機会が減少している。森林などの自然環境での滞在・活動は、人間の心理的、身体的な健康の維持増進に肯定的な影響を与えるとされ、ウェルビーイングを高める方法として近年益々注目が高まっている。本科目では、多様な自然体験活動を実際に体験し、自然体験活動の実施方法に関する知識技術を修得すると同時に、自然を五感で感じ取ること、他者と協働すること、自己と対峙することなどの体験を通じ、そのなかで生じる感情(こころ)・身体(からだ)・認知(あたま)の動きに焦点をあてて省察することで、生涯にわたる心身の健康と自己成長に寄与する力を修得することを目指す。	
学部共通科目	生活科学 生活共創学概論	○	<p>(概要)「生活共創学」の教育目標は、「生活」が人々のくらしの基礎であり、社会を構成する基盤であるとの認識に立って、衣、食、住、こどもを中心とする生活諸領域に関する知識・技能とともに、それらを活かして生活者の視点から、多様な人々と協働し、身近な変革や新たな価値の創出を通して地域・社会の持続的発展に寄与する能力を養うことである。本授業では、生活諸領域に関する学問の最前線、地域・社会が抱える課題、協働・変革・価値創出に必要な要素について、広く関心を持ち、「生活共創」に込めた思いや意義を共に考える。</p> <p>(オムニバス方式/14回)</p> <p>(32吉永早苗/第1回)生活共創学とは何か (29佐野潤子/第2回)家政学の歴史と生活共創学の意義 (10花田朋美/第3回)衣の役割と持続可能性への考察 (38伊藤有紀/第4回)地域の食文化と持続的食生活 (7小池孝子/第5回)持続可能な住環境と地域づくり (34井上清美/第6回)子育ての環境と持続可能な教育 (12三澤朱美/第7回)地域・社会との連携を通じた大学の学び (10花田朋美/第8回)地域課題の発見と理解(ワークショップ含む)</p> <p>(10花田朋美/第9回)地域課題の解決策の共創と提案(ワークショップ含む)</p> <p>(15岩本直樹/第10回)地域・社会との連携(食と教育) (24佐々木麻紀子/第11回)地域・社会との連携(ものづくり) (37柳瀬洋美/第12回)地域・社会との連携(子育て支援) (17小川圭子/第13回)地域・社会との連携(街づくり) (10花田朋美/第14回)地域・社会での持続的な価値創造 学びのまとめと今後の展望</p>	オムニバス方式

授 業 科 目 の 概 要				
(生活共創学部生活共創学科)				
科目区分	授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容	備考
学部共通科目 生活科学	食科学概論	○	「食」は健康で心豊かな生活を送る上で、最も大切な生活の要素の一つである。一方、現代では、科学が食の世界に大きな影響を与えていて、食科学を基本から理解することが生活視点においても必要になってきている。この講義では、食科学の基礎的な知識として、食品成分の種類と保存調理加工による化学変化や物理変化、食品の栄養・嗜好性・健康機能性を学んだ後、食品の分析と食の安全や、培養肉や遺伝子編集食品などの新しいテクノロジーなどの現代的課題について学ぶ。また、クラス全体で各テーマについてディスカッションし、SDGsやQOLとの関連について考え、より良い生活に必要な食を科学的に考え判断・選択する力を養う。	
	住環境デザイン概論	○	住居は個人や家族の生活の拠点であり、人間生活を営むための最も基本的な場である。現代においても住居に関する様々な課題が存在している。この授業は、住居全般についての基礎的知識を習得することを目的に、個人・家族の生活の拠点である住居について、様々な角度から検討を行う講義科目である。人間にとって住まいとは何かを考え、人間らしい生活を送るための空間としての住居のあり方について検討するための基礎的知識を講義する。	
	被服学概論	○	被服に求められる機能は、社会・心理的快適性に関わる機能と、身体・生理的快適性に関わる機能とから成る。したがって、被服について学ぶには、被服材料学、被服管理学、被服衛生学、服飾デザイン、被服構成学、服装史等、多角的に学ぶことが必要となる。本講では、家庭、地域、社会、及び教育の現場で求められる知識や能力を身に付けることを目的として、被服領域全般における基礎的事項を概括的に学ぶ。さらに、現代そして今後の衣生活に求められている課題について考える力を育成する。 オムニバス方式（/14回） （10花田朋美 / 7回） 被服に要求される保健衛生的快適性に関わる機能について概説する。 （14宮田弘美 / 7回） 被服に要求される社会心理的快適性に関わる機能について概説する。	オムニバス方式
	こども学概論	○	こども学の対象である「こども」とは何か。私たちは「こども」についてどのように考え、関わっていけばよいのか。ヒトの発達や人間社会における「こども期」の意味や価値、こどもと共に育つ保育・教育のあり方、おとなや社会の果たすべき責任と役割などについて問い、考えながら、基礎的かつ多面的な「こども理解」を促す。さらに、現代社会のこどもを取り巻く諸課題を現実の生活と関連して捉え、解明に向けて知識を深め、身近な生活の中で自ら実践する力の向上を目指す。	
	生活イノベーション概論	○	最先端の研究成果を私たちの生活に併せていくことによって、我々は、生活のイノベーションを思考・計画・実行していくことが可能である。本講義では、本学の教員によるオムニバスの講義を実施し、各教員の専門領域から生活をイノベーションしていくことについて学ぶ。また、最先端の研究成果を知ることで、自身がどのようにその研究成果を生活へ応用していくかを思考し、アイデアを共有し合うアクティブラーニングを実施する。 （オムニバス方式 / 全14回） （17小川圭子 / 第1回）住環境の視点からイノベーションを考える （15岩本直樹 / 第2回）食の視点からイノベーションを考える （17小川圭子、15岩本直樹 / 第3、4回）（共同） グループ・ディスカッション1、2 （27江田裕介 / 第5回）こども（特別）支援の視点からイノベーションを考える （13嶋田芳男 / 第6回）福祉の視点からイノベーションを考える （27江田裕介、13嶋田芳男 / 第7、8回）（共同） グループ・ディスカッション3、4 （42松山直輝 / 第9回） 健康科学の視点からイノベーションを考える （32吉永早苗 / 第10回）音・音楽の視点からイノベーションを考える （42松山直輝、32吉永早苗 / 第11、12回）（共同） グループ・ディスカッション5、6 （17小川圭子、15岩本直樹、27江田裕介、13嶋田芳男、42松山直輝、32吉永早苗 / 第13・14回）（共同） 生活者が生み出す身近なイノベーションをとりまとめ、グループ発表を行わせる。	オムニバス方式 一部共同 講義13時間 演習17時間

授 業 科 目 の 概 要					
(生活共創学部生活共創学科)					
科目区分	授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容	備考	
学部共通科目	生活共創基礎	AI時代の生活科学	○	急速に進化するAI（人工知能）により私たちの生活はどう変わるのだろうか、AIに関わる研究者や実務家によるゲスト講師による講義を交え、そもそもAIとは何か、これまでの情報技術と何が違うのか、私たちの暮らしにどのような恩恵をもたらすのか、その一方でいかなる課題があるのかなどについて理解を深めた後、AIが生活を大きく変化させつつある事例を学び、AIを上手に活用することで私たちの生活をより良きものにするために何が必要かを共に考えてみたい。	
	生活共創基礎	リーダーシップ基礎		リーダーシップは管理者や上位者だけに求められるものではなく、あらゆる組織、コミュニティ、地域社会など様々な場面において、立場を超えて必要とされる大切な要素である。このような考え方にに基づき、リーダーシップとは何か、どうすればそれを身に付けることができるのかについて、研究で生まれた理論と具体的な事例を通して、共に学び、考えてみたい。その際の重要なキーワードは「信頼」である。信頼があるからこそ、人はその人についていきたいと考える。そして、誰もがリーダーシップを発揮できる可能性を有している。これらのことを理解し、実践につなぐ学びの場としてこの授業を活かしてほしい。	
		マーケティング基礎		マーケティングとは、顧客とのコミュニケーションを通して、顧客の真のニーズとは何かを理解し、顧客にとって価値あるモノやサービスを提供するための組織的な活動である。この考えは企業活動だけでなく、教育機関や医療機関、政治や行政など幅広い分野の活動において活かすことができる。経営学の分野でも日々進化・発展しつつあり、実務に役立つ学問の一つということができる。本授業の目的は、基礎的な理論と具体的な事例を学ぶことでマーケティングの本質を理解し、「顧客の視点に立ち、顧客に価値を提供する」という最も重要な考え方を身に付けることである。	
		データサイエンス基礎（生活とデータ）		現代の生活において、人々の様々な行動がデータとして蓄積される時代にある。例えば、私たちがスマートフォンを持ち歩く事で、1日あたりの歩数や位置情報等のデータが日々スマートフォンに蓄積されている。また、このような一人一人のデータを収集したビックデータは、私たちの社会にイノベーションを起こすヒントとなり得る。本授業では、生活に対する個人データやビックデータを活用し、より良い暮らしについて考察していく。	
		ロジカルシンキングとデザイン思考		私たちは生きていく上で日々様々な問題に直面する。個人だけでなく、組織や社会も多様な問題に直面し、その解決を求められる。「問題解決」は個人にとっても組織や社会にとっても大切な営みといえる。問題を解決することは新たな価値を創出することでもある。そのためには解決すべき問題を認識し、問題点を把握し、解決策を着想・検討・選択し、実行につなげることが必要である。本授業においては、そのための思考法としてロジカルシンキングとデザイン思考を取りあげ、問題解決のための考え方や基礎的な方法を学ぶ。	
専門教育科目	ゼミナール	初年次ゼミA	○	学生が大学での学業と生活にスムーズに適応し、有意義に過ごすことができるよう、大学での学びのスタートアップを行う。大学という場、大学で学ぶということについて理解すると共に、学科を超えた少人数（20名程度）のゼミのなかで、大学での人間関係を構築する。また、各教員が指定するテキストを講読するなかでの双方向的・協働的な学習活動を通し、能動的で自律的・自立的な学習態度への転換を図る。なお、一部の授業回は共創プロジェクトゼミに合流して協働し、学年を超えて問題解決に取り組む。	
		初年次ゼミB	○	15～20人の少人数で学生が教員を囲み、ある特定のテーマについてグループディスカッションやプレゼンテーションを通じて、理解を深めるとともにコミュニケーションスキルの向上を図る。協働して探究学習を行うなかで、ホスピタリティの意義と実践方法を学ぶ。また、将来の進路や目標について考える機会を提供する。	
		共創プロジェクトゼミA	○	プロジェクトベースラーニング（PBL）を中心に据えたアプローチを用いて、学生は、教員と共に実際の問題解決に取り組む。チームで協力し、リアルな課題に対処しながら、自己指導力、チームワーク、コミュニケーション能力、プレゼンテーション力、プロジェクト管理スキルを向上させるなかで、「思考力・判断力・表現力」「主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度」を養う。なお、一部の授業回に参加する初年次ゼミの1年生と協働することを通し、共創3×3の力に繋げていく。	
		共創プロジェクトゼミB	○	PBLの手法を活用して、学生が主体となり、地域社会の課題やニーズに対処し、持続可能な変革を促進するためのスキルを磨く。地域社会への貢献を通じて、実践的な経験を積みながら、リーダーシップ、協働力、共感力、達成力、コミュニケーション力などの能力を高める。	
専門基礎	食の創造	フードビジネス概論		フードサービスビジネスは、「食に関係するサービス産業」の総称であり、その範囲は、小売業、飲食店、流通業、医療福祉、情報産業など幅広い分野におよぶ。フードサービスビジネスは、ライフスタイルの変容やグローバル化の進展など昨今の社会の変化に伴って拡大、発展してきた産業分野である。一方で、食の安全性の確保や食品ロスの増大といった諸問題とも深く関係している。本授業では、私たちの日々の生活と深く関わるフードサービスビジネスについて、その普及の経緯と現代社会における役割や諸課題等を理解するとともに、今後、持続可能な社会を目指していくに際して、同産業のあり方や方向性について考える。	

授 業 科 目 の 概 要					
(生活共創学部生活共創学科)					
科目区分	授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容	備考	
専門教育科目	食の創造 食科学基礎		世界の食文化と日本の食文化が形成された要因を自然環境、社会環境の視点から考え、多様な食文化を学ぶ。さらに、各時代における日本の料理形式の特徴を知り、日本食の原点について考える。近世以降の歴史を辿ることにより現在に繋がる日本食の礎と江戸時代の特徴についても理解する。近代については、西洋文化の受容について学び、日本食が変化の様子を社会の変化から捉える。食生活に関するテーマを通して食生活の現状と諸課題について検討し、将来の食について考える。		
			日々の生活には、加工食品素材やサプリメント・医薬品・包装プラスチックなど、様々な有機化合物の利用が欠かせない。テクノロジーが発展した現代の生活を考える上で、有機化学の基礎を学ぶ重要性はますます高まっている。また、食と栄養の科学を理解するには、食品とからだを構成するタンパク質・多糖類・脂質などの高分子化合物の構造と機能を深く学ぶ必要がある。本授業では、原子・分子など化学の基礎の理解から始め、生活に関与する様々な有機化合物の種類と性質について学んでいく。また、食品加工や食品機能など、食科学を理解するために必要な基礎知識を修得する。		
			子どもに関わる者にとって、子どもの食と栄養についての正しい知識は不可欠である。子どもの栄養のみならず、幅広く食育についての知識も習得する。また、「食べる喜び」は、年齢を問わず与えられるべきものであるが、特定の食品に触れたり、吸い込んだり、摂取することにより心身に様々なアレルギー症状が起こる「食物アレルギー」について、その原因やメカニズム、対処方法を専門的に解説する。関連するガイドラインや近年のデータ等を踏まえ、アレルギー児等の特別な配慮を要する子どもの食と栄養について理解する。		
	食の科学			解剖生理学は、人が生きていくための体のしくみを学ぶ学問である。解剖学者は人体のかたち（構造）からしくみを明らかにしようとし、生理学者は、人体のはたらき（機能）からしくみを明らかにしようとする。かたちとはたらきは、車の両輪であり、かたちを知らずしてはたらきを明らかにすることはできないし、はたらきを知らずして、かたちを明らかにすることはできない。しかし、かたちの一部は目に見えるため、比較的取り付きやすいように見えるが、はたらきは目に見えないため、一見難しいように見える。そこで、解剖生理学I（解剖）では、まず人体のかたち（構造）を学び、そこから理解できる範囲のはたらき（機能）に触れることで、人体の基本的なしくみを学ぶ。	
				解剖生理学I（解剖）で、人体のかたち（構造）を学び、そこから理解できる範囲のはたらき（機能）に触れることで、人体の基本的なしくみを学んだ知識を習得した。解剖生理学II（生理）では、解剖生理学I（解剖）で習得した人体のかたちに対する知識を踏まえ、より深く人体のはたらきに対しての知識を深める。「解剖生理学」は人体の構造と機能について学ぶ学問である。解剖学とは人体の構造を理解することを目的とした学問であり、それに対して生理学は人体の機能を学ぶことである。解剖生理学I・IIを通して習得する正常な（健康な）人体の構造と機能の基礎知識は、臨床栄養、病態生理などを学ぶ基礎となる。	
			○	解剖生理学の講義で学習した内容を振り返り、実習を行うことによって生体の構造と機能について理解を深める。本実習では、ヒトの健康増進、疾病予防等に携わる者として、正常な人体の構造と生理的機能を、様々な計測手技（キャリパー等を用いた身体計測や血圧、心音、心拍数、肺活量の測定や運動機能測定等）の実習を通して具体的に学ぶ。また、細胞から成る生体について、組織標本などの顕微鏡観察とマウスの解剖によって理解を深める。	
	人体の構造と機能			食品は人々にとって、基本的に毎日、何らかしら摂取している大変身近な存在である。将来的に食に携わる職に就く場合、食品成分を理解し、日常生活の維持、健康増進に役立てる知識を第三者へも提供できることが、栄養士業務以外の調理、製造、販売等の現場でも必要となる。食品が有する三つの基本的機能（一次機能；栄養特性、二次機能；嗜好特性、三次機能；健康機能特性）を柱に学びを進める。そのため、食品を構成する成分を化学的に捉えられるようになる力を養いながら、食品成分を総合的に理解する知識を習得する。加えて、食品に関わる法や制度など、特に食品表示法を踏まえた知識の習得も行き、食品学各論の学びに繋がる知識も習得する。	
				多種多様な食品を利用し、ヒトは生命を維持しながら、多彩な食文化を構築し、食生活を営んでいる。数多くの食品は生産（産業）様式、原料の起源、主要栄養素や食習慣、日本食品標準成分表、国民栄養調査等々、目的に応じて分類されている。食品学総論で習得した食品が有する食品が有する三つの基本的機能（一次機能；栄養特性、二次機能；嗜好特性、三次機能；健康機能特性）や食品表示に関わる知識を踏まえ、日本食品標準成分表の各分類の主要な食品（主要事例）を基に、当該食品の特性、調理・加工・貯蔵適性、ならびにそれらの具体的利用方法、利用時の各成分変化などについて、食品を扱う専門職に求められる知識を習得する。	
	食品と衛生				

授 業 科 目 の 概 要

(生活共創学部生活共創学科)

科目区分	授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容	備考
専門基礎 食科学 衛生	食品学実験	○	健康の維持・増進に不可欠な各種食品成分の栄養特性・成分変化、性質を実践的に理解するために、食品に係わる分析法、分析技術、分析値の解析を学ぶ。実験を行うにあたり必要となる化学実験における基礎部分、一般的な注意事項や試薬・器具・機器の取り扱いについても学びながら、科学的な考え方（研究倫理）や技術を学ぶ。食品の特性を実践的に広く理解するために食品に係わる分析法、分析技術の基礎知識とその応用発展栄養を体得するにあたり、可能な限り、日本食品標準成分表で用いられている手法に準拠した形で展開する。そのために食品に係わる分析法の原理と原則を理解したうえで、分析値の解釈を行える栄養と能力を備える技術を習得する。	
	基礎栄養学	○	「栄養」とは、私たちが外界から食物を摂取して生命を維持することで、成長、運動、思考、健康保持などの全ての生活を営む現象である。よって、日常摂取している食物には生きていくために必要とされる成分（栄養素）が含まれていなくてはならない。食物はどのように生体内に取り入れられ、栄養素は生体内でどのように働き、身体構成成分へと変化するのか、健康な生活をおくるにはどのように、どれくらい、いつ、食物を摂取したらよいかなど、栄養の基本概念を学ぶ。	
	給食の運営 基礎調理学実習	○	食材の衛生的な取り扱い方、非加熱調理操作法、加熱調理操作法、調味操作法などの基礎的な調理技術を日本料理、西洋料理、中国料理の実習を通して習得することを目的とする。また、これら食事様式を通して、季節感、食材の組み合わせの適正を学習する。また、料理と器の形状や材質・配色のバランス、盛り付けや食卓への配膳、食器やカトラリーの取扱いなど、配膳・食卓・食事マナーを習得する。各実習内容については、食品成分表を用いての栄養価計算を可能にし、実習を通して献立立案の要素を学習し、調理の基礎を総合的に学ぶ。	
	調理学	○	調理とは、そのままでは食べられないもの、食べにくいものを食べられるもの、食べやすいものへと変換するプロセスであり、さらには、それらを安全で、より美味しくすることへ制御することを目的としている。そのためには、美味しさの形成要因の理解、非加熱、加熱、調味の各操作について栄養面と食味変化の関係性やメカニズムを理解し、各調理実習と調理学実験とも関連させる必要がある。ここでは、穀類、豆類、野菜類、肉類、魚介類、卵、乳・乳製品、抽出性食品などについて、具体的な調理過程で、栄養面、物性、機能性、嗜好性の変化を科学的、理論的に学び、調理の実践力の基とする。	
	強化科目 栄養士論	○	栄養士の有資格者や雇用者、行政の担当者からの講義を得ながら、栄養士として備えるべき資質や知識・技能を理解することを目的とする。具体的には、食産業・保育所・学校給食・高齢者福祉施設・病院・保健所などの栄養士、管理栄養士、これらの施設の雇用者・経営者、さらに、東京都や厚労省などの行政機関からその専門家を招き、栄養士の置かれている現状と、栄養士として何か求められているかなどについて講義を得る。職業倫理と使命感のある栄養士の養成の一基盤とする。	
	教職教科科目 被服学演習			急速な社会の変化に対応する持続可能な衣生活の構築のため、現代そして未来の衣生活に潜する課題を主体的に見出し、課題解決に向けて思考し行動することにより、将来にわたりより良い衣生活を創造することができる力を育成する。本講では、家庭、地域、社会、及び教育の現場で求められる衣生活に関する知識や技能を身に付けることを目的として、被服領域全般における基礎的事項を実践的・体験的に習得する。 (オムニバス方式/全14回) (一部共同) (10花田朋美/第1-4回) 繊維材料と被服の持続可能性 (14富田弘美/第5-8回) 衣生活の文化と被服を構成する技術 (24佐々木麻紀子/第9-11回) 被服の管理と持続可能性 (10花田朋美、14富田弘美、24佐々木麻紀子/第12-14回) (共同) 社会と衣生活
	家庭経営学概論		人間が人間らしく生きる視点が家庭であり、家庭生活を中心とした家族・コミュニティの営みが家政=家庭経営である。現代社会における家庭経営の課題を、「家族」、「消費者」「ジェンダー」をキーワードに概説する。特に、親と子、夫と妻など、家族を核とする人と人の関係や、仕事や消費といった日々の生活と生命の再生産の営みを中心に現代社会の危機的状況を生活者の視点から見直し、誰もが安心してくらせる、持続可能性のある消費者市民社会につくりかえる方法を自分の生活設計と重ねながら考える。1回は外部講師をお招きし、本授業に関連するテーマでご講演頂いている。	

授 業 科 目 の 概 要					
(生活共創学部生活共創学科)					
科目区分	授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容	備考	
専門教育科目	食職教科科目 保育学		子どもにとって大人と一緒にいることには、また、大人にとって子どもと一緒にいることとはどのような意味があるのだろうか。子どもと大人が共に豊かな成長を続けていくことができる社会であるために、教育と同様に保育という営みは重要である。この授業では、子どもの発達と生活の特徴、子どもが育つ環境と家族の役割、子どもの権利、子どもにとっての遊びの意義などの家庭科の中で扱われる保育領域の課題について考究する。また、子どもとのふれあい（自主実習）を通して保育の実際を体験的に学ぶ。		
		建築設計 住居デザイン	住居デザイン演習A	○	近い将来、建築やインテリアのプロ(専門職)として、また、本コースで学んだ知識や技術をいかした職業に就くことを目指すための初歩的かつ基礎的な建築製図手法や技術を習得するための演習授業である。住宅をはじめとする建物の基本的な図面作成方法と構成及び構法と模型制作方法を学習する。各種図面の表記記号や図面相互の関係を理解し、製図道具を正しく用いた図面表現や模型制作を通して、基本的な図面の読み書きができるよう進めていく。
	住居デザイン演習B	○	住居デザイン演習Aで習得した技術を踏まえ、住宅の設計・作図を通して、設計技術、作図技術、プレゼンテーション技術などの習得と上達を目指す演習科目である。提示された計画敷地より、具体的にそこに居住する家族構成を想定し、その生活をイメージした計画を行っていく。そしてそれらを踏まえ、平面図、立面図、断面図、パース(透視図)などの作図を行い、模型を作成する。さらに、図面の着色、模型写真の写真撮影などを通して、プレゼンテーション技術の上達も目標とする。	共同	
	住居デザイン演習C	○	住居デザイン演習A、住居デザイン演習Bで習得した製図の技術を踏まえ、区分所有マンション、商業施設のインテリアの設計を通して、設計製図の基本をマスターし、デザイン、プレゼンテーション技法の上達を目指す。エスキース、平面図、立面図、断面図などの作図、模型やパースなどの作成、着色などを通じて、立体としてのインテリア、建物の構造や空間を理解し、把握できるようにする。さらに立体と図面との関連性の理解も深める。	共同	
	住居デザイン演習D	○	住宅、店舗付き住宅の設計演習を通じて、デザイン、設計、作図、プレゼンテーション技術の習得と上達を目的とする。木造、鉄筋コンクリート造の図面のエスキースやボリューム模型の作成、平面図、立面図、断面図などの作図を行う。作図法だけでなく、木造の在来工法における軸組み構造、鉄筋コンクリートのラーメン構造、壁構造などの構造方式の基本をマスターすることも目標とする。さらに模型の作成、パースの作成などを通して、立体としての建物を理解し、立体と図面との関連性の理解も深める。	共同	
	建築計画・環境	建築史A	○	日本建築史の通史を学ぶ。竪穴住居や高床住居などの原始的な建築から最新の現代建築にいたるまで、また、住宅、社寺、公共建築など、さまざまなタイプの伝統的な日本建築に関して、写真・図面を用いて実例を詳細に検討しながら、その建築的・社会的意義に関して概観する。それにより、木構造など日本建築に特有な技術的な発展過程を学ぶと同時に、わが国の建築文化・生活様式の変化を学び、建築を通して伝統文化に対する理解を深めることを目指す。	
		建築史B	○	西洋建築史の通史を学ぶ。ヨーロッパ大陸を中心に展開してきた西洋建築は、現代建築の根幹をなしており、その歴史の習得は、現代建築までつながる世界の建築文化の理解につながる。そこで建築史Bでは、各国を代表する著名な西洋建築をひとつずつ詳細に検討することによって、世界の建築文化の系譜を学ぶと同時に、個々の建築とその建設の背景を探り、建築文化の理解をはかる。これらを通して、国際的文化人としての素養を身に付けることを目指す。	
		住環境マネジメント論	○	人口減少に伴う空き家の増加、高齢化問題、都市部への人口集中など、私たちの暮らしをとりまく住環境は変化を続けている。また、地球環境や資源の有効活用の視点からは、住まいのストック活用が急務とされ、維持管理やリフォームに関する知見が求められている。良好な住宅ストックの形成と都市居住・地域活性化への対応など、住み手が住まいを適切に管理しながら豊かな生活環境・地域環境を維持していくための方策について検討する。	
		住居計画	○	住居はそこに住む家族のためのものであると同時にまちの財産でもある。家族の暮らしの場である住居について、歴史的な変遷を振り返るとともに、近年の傾向についてその背景とともに概観する。現代的な課題を踏まえたうえで、それぞれの家族にとって快適な住宅、住宅地のあり方について検討をおこない、住宅および住宅地を計画する際に必要となるさまざまなことについて理解し、住居設計のための基礎知識を習得することを旨とする。	

授 業 科 目 の 概 要				
(生活共創学部生活共創学科)				
科目区分	授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容	備考
専門基礎 デザイン 環境	建築計画・環境 福祉住環境	○	超高齢社会を迎えた現在、高齢者や障害者が在宅で自立した生活をおくるための住環境整備が求められている。本授業は、この福祉住環境整備分野の初歩的な知識を習得することを目的とし、高齢者や身体障害者を対象とした住環境整備についての基礎知識を学ぶとともに、在宅介護の現状と問題点、特徴、必要な視点等から、介護保険制度の対象となる住宅改修、福祉用具、特定疾病等、建築・福祉・医療などに関して体系的な幅広い知識を学ぶ。	
	建築構造・施工 構造力学A		建築（住居）構造力学の入門編として、その興味を喚起し、建築（住居）構造力学を学ぶ能力の育成を目的とする。そのために、簡単な事例を題材に（単純梁や片持ち梁などの基本的な構造を題材に）、用語や定義といった入門的な内容から学びを始める。その後、建築（住居）構造力学で最も基本となる反力（支点に作用する力）や応力（部材内部に作用する力）の意味、考え方、計算の仕方や表現の仕方について学ぶ（建築（住居）構造力学の基礎編につながる最も基本的な内容を学ぶ）。	
	住宅設計論	○	木造住宅、木造建築の基本を学び、デザイン演習の補助とする。尺、間、坪などの日本における木造独自のモジュール、各種家具や作業などの寸法、広さ、高さ、和小屋と洋小屋の違い、在来工法とツーバイフォー工法（枠組壁工法）の違い、地盤、基礎形式、柱の大きさと配置、横材の位置と名称、各種金物、耐震壁の位置、各階の床組、小屋組、屋根形、屋根材、外装材、各種納まり、開口部の構成、断熱材などの基礎知識を学ぶ。	
	構法計画	○	建物全般の中で最も基礎的な木構造を中心にして、建物がどのようにして建てられているか、各部材の構成方法はどのようになっているかについて、構造や構法の名称（在来軸組構法、木造枠組壁構法、木質系プレハブ構法など）、造作部材の呼び名を含めて具体的に解説する。また、建物を設計・施工し、維持管理するために必要な知識である、建物の構成要素である各部位の材料と、それらが統合された建物全体としての構成及び性能についても学ぶ。	
	インテリア材料	○	建築材料の中から、インテリアを中心とした仕上げ材料（壁材料、天井材料、床材料など）を取り上げて、それらの材料（せっこうボード、繊維補強系ボード、軽気泡コンクリート、タイル、れんが、石材、ガラス、塗料、断熱材、接着剤、プラスチックなど）の基本的事項を平易に解説する。また、インテリア材料は構造材料とは異なり、安全性や耐久性以外に、機能性、快適性、美観性などの性能も要求される。そこで、各部位に要求される性能条件と材料との関連性を理解させると共に、建築仕上げ材料選定にあたっての基礎的知識を養う。	
	園芸 ガーデニング概論	○	人々が様々なストレスを抱えた現代の社会では、植物に求められる機能や用途も多様化している。本講義では、園芸やガーデニングとは何かについて考え、定義する。主にガーデニングを行う際に必要な植物学や庭のデザインに関する基礎的な知識や技術について紹介する。本講義を通じ、私たちの生活の中に多く存在している植物に気づき、見る力を養う。園芸領域科目（園芸学、ガーデニング実習など）の入門編の講義である。	
	園芸論	○	近年、園芸植物やそれを扱う人々が必要とする技術は多様化している。本講義では、野菜（野菜）、果樹、花卉（花）の生産を主とする商業園芸と家庭菜園や庭づくりなどの家庭園芸の現状、ガーデニングなどで植物を栽培し、利用するために必要な基礎的な技術や植物生理について解説する。園芸領域科目（ガーデニング実習等）の他の科目につながる基礎的な力を養う。	
	ガーデニング実習Ⅰ	○	ガーデニング概論や園芸論などの講義で得た基礎的な知識をいかし、実際に植物の栽培管理を行う。ガーデニング実習Ⅱと合わせて年間を通じた植物の栽培管理法を解説する。季節に適した植物を用い、その栽培に必要な管理計画を検討し、実習する。安全に作業をするための知識を養う。植物を生活に取り入れ利用する様々な方法についても、文化的な年間行事と植物の関係性に着目して、工夫やその効果について実践を通して解説する。	共同
	ライフワーク 多感覚感受とデジタルド トックス	○	日常の景色のなかに住まう心身を自覚し、感じたり考えたりすることが生き方の姿勢をつくっているのではないか。この科目では、身近な情景や場面に感覚を研ぎ澄ませることで、情報過多の日常、デジタルテクノロジー依存から自己を解放し、ストレス管理、感受性の向上、良好なコミュニケーションといった心身の健康を向上させるための理解とスキルを体験的に学ぶ。 (32吉永早苗／第1～14回) (33立川泰史／第7～第10回)（一部共同） 感じた音や感情を形や色に置き換えたり、感受した形や色、光や風の効果を音や音楽に表現したりすることを通して、クロスモーダル（多感覚感受）な感覚を理解する。	一部共同

授 業 科 目 の 概 要				
(生活共創学部生活共創学科)				
科目区分	授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容	備考
専門教育科目	ライフウェルネス	○	健康は日常的な食事管理、運動の実施、社会的なストレスマネジメント等の影響を受けて形成される。しかしながら、現代社会においては様々な情報に溢れ、どのような食事、どのような運動、どのようなストレスマネジメントが効果的なのかがわかりづらくなっている。本科目では科学的な視点から情報を精査し、健康につながる食事管理、運動の実施方法、ストレスの解消方法を解説する。加えて、運動では心拍センサーや最新のトレーニング器具等を活用した実技に取り組む。そして、最終的には食事管理、運動実践、ストレスの解消をセルフマネジメントでできる力を身に付けることを目指す。	
	マナーフローの世界とくらし		私たちの生活に関わりがあるマナーフローについて、現在・未来の視座から考えていく。現在については、我が国の生活に関わる貯金や投資に関する制度、世界のコモディティ、為替、仮想通貨、ベーシックインカム等の現在の動向についてを講義し、今後どのように自身の資産を運用していくかを検討する。また未来については社会状況を踏まえて予測し、将来的な資産形成に向けた指針を自身で立てることを目指していく。	
	生活イノベーション最前線	○	私たちの生活は日々進化している。携帯電話を例にとっても、普及が始まったのはわずか30年前であり、その後携帯電話の多機能化を経て、現在はスマートフォンの時代である。テクノロジーが進化するだけでなく、それに伴って私たちの日々の生活は大きく変わってきた。同じことは、衣・食・住はじめ生活の様々な分野で起きている。本科目では、イノベーションとは何かについて理解した上で、私たちの生活に関する分野でいまだどのような変革が起きつつあるのかについて、SDGsとの関係も踏まえながら、最前線に関わる研究者や実務家の講義を通して学ぶこととする。	
	Society 5.0論		現代社会は生成AIやXR等の技術革新によって新たなフェーズを迎えつつある。その変化は、過去に人間社会が、狩猟社会から農耕社会、工業社会、情報社会へと進んだ段階に匹敵し、かつ急速に展開されつつある。新たな時代に向けて、生活やビジネス、教育のモデルを早急に見直し、再構築していく必要がある。本科目では、「生活」「技術」「教育」「ビジネス」「芸術」等のキーワードから、すでに実現している改革の事例を概観し、変化の方向性を探る。その経過を通じて、新たな時代を「たくましく心豊かに生きる力」を備えたSociety5.0人材について論考する。	
	行動経済学		これまでの伝統的な経済学では、人々が合理的な判断に基づいて最適な選択をすることを前提に経済現象を理解することを目的としていた。しかし、実際には人々は常に合理的であるとは限らず、むしろ人間は不完全であり、不合理な行動をとることが多いことを前提に、経済現象を理解することが必要との立場から「行動経済学」が発展し、経済学において最も注目される分野の一つになっている。本科目においては、行動経済学の基礎を学ぶことで、日々のくらしや自身の行動と結びつけて経済を考える能力を養い、人々の幸せにつながる経済とは何かについて共に考える。	
	知的財産権を学ぶ		自分のアイデアや作品、発明等に対して、その獨創性を主張し、他者による模倣や盗用から守るためには、著作権や意匠権等の知的財産に関する知識が不可欠である。また、その知識は、自分が他者の権利を侵害しないためにも必要である。特にインターネットの時代において知的財産の侵害は容易に起こり、その権利化と侵害予防の重要性が増している。本科目では、著作権、意匠権、商標権、特許権、実用新案権、育成者権、地理的表示法といった知的財産権の基本を実例から学ぶとともに、一部演習を含み、既存権利の検索プロンプト等の実用スキルを身に付ける。 (オムニバス方式/全14回) (66高橋 一哉/第1回~4回) ガイダンス・知的財産の基礎知識、著作権の権利(著作権法) (61佐野 浩太郎/第5回~9回) 発明とアイデアの権利(特許法・実用新案の実際)、デザインの権利(意匠法・意匠創作の実際)、マークとネーミングの権利(商標法・ネーミングの実際) (88森山 朗/第10回~14回) 身近な商品・サービスと知的財産、レポート講評	オムニバス方式

授 業 科 目 の 概 要

(生活共創学部生活共創学科)

科目区分	授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容	備考
専門基礎 生活イノベーション 専門教育科目	ビジネスイノベーション ビジネストレンドキーワードを読み解く	○	最新のビジネス、マーケティング、テクノロジー分野で中長期的に注目すべきトレンドワードを複数取り上げる。学習ではグループワークを取り入れ、各トレンドワードについてグループで調査・発表するアクティブラーニングを実施する。具体的に、グループでの調査では、各トレンドワードの意味、話題となった背景、現在のビジネスにどのように活かされているか、将来のビジネスにどのような発展性が考えられるか等に焦点をあてる。以上の学習活動より、Society 5.0時代のビジネスについて創造的に学習していく。 (オムニバス方式/全14回) (23澤田雅彦/第1回~7回) 主にビジネス分野のトレンドキーワードを取り上げ、アクティブラーニングを実施する。 (24佐々木麻紀子/第7回~14回) 主に、マーケティングとテクノロジー分野のトレンドキーワードを取り上げ、アクティブラーニングを実施する。	オムニバス方式
専門発展 食科学	食の創造 食生産体験演習A		生産現場に対する関心や理解を深めるだけでなく、日本の食生活が自然の恩恵の上に成り立ち、食に関わる多様な人々の活動に支えられていることについて理解を深めることがこれからの食の現場では重要である。体験学習型の学びとして、地域との交流、次世代や社会へ広く食に関わる事柄を発信できるように、実際に作物などを自分たちで栽培・収穫することを通し、生産の大変さ、食べ物の大切さなどを体得することを目的とする。	
	食生産体験演習B		生産農家、漁業、食品メーカー、加工工場、市場、食品分析機関、食品開発研究所、行政管轄機関(空港食品衛生チェック機関、輸入・輸出関係食品衛生関連機関、食肉解体、清掃)など生産から食卓、廃棄物に至る様々な課程の見学を行い、それを通して食循環についての一端を学ぶ。	
	応用調理実習	○	基礎調理実習で習得した調理技術をもとに、日本料理においては、行事食、精進料理、本膳料理、茶懐石料理の献立組みによる調理実習を行うとともに、これらに用いられる食材の意味合いや調理法の適正への学び、多種多様な食材の調理技能の向上、一食材の多様な料理への展開を可能にすることを目的とする。中国料理の飲茶の実習、西洋料理・中国料理の実習から日本や諸外国の食事・食卓構成を学ぶ。また行事食の献立作成・実習を行い調理技術や献立立案についての応用力を養う。	
	食品の企画と設計		食品を開発する上で必要な企画と設計の知識と技術を学ぶ。企画では、ターゲットの選択と理解するためのマーケティング手法・ニーズの分析とウォンツの発掘の方法などを習得する。設計では、食品素材と加工法の選択の方法・目標とする一次機能、二次機能、三次機能を実現するための成分の設計と計算方法などを習得する。次に、以上の知識と技術を応用して、食品の試作を行い、評価方法や分析方法を習得する。また、市場で販売されている食品について、マーケティング・加工法・機能に関する科学的エビデンス・コンプライアンスなどを分析し、ディスカッションする。	
	食空間コーディネート論		心地よい食卓・食事空間の演出は、豊かな食生活を営む上で最も重要なことである。日常の食卓や行事に伴う様々な趣向を凝らした食卓の演出について、日本や諸外国の基本的テーブルセッティングのルールとその歴史的・文化的背景を含めて学ぶ。また、食器やカトラリー、クロスの材質、フラワーアレンジメントやこれらを総合したカラーコーディネート、食卓とイスなどテーブルを中心としたコーディネートの適正、採光や音響、湿度などについてもその適切な条件について実演・実習を加えながら解説する。また、これらを基本とするテーブルマナーを解説する。	
食の科学 食品機能学			近年の栄養学や食品科学の発展は目覚ましく、食品機能に関する多くの知見が蓄積されている。また、それらの知見を利用して新しい食品素材や技術が開発・実用化されている。本講義では、まず、食品の栄養・嗜好性・健康機能を理解するために必要となる有機化学・生化学の基礎を復習する。次に、栄養・嗜好性・健康機能に関する最新の科学研究に関する文献を読み、その内容をディスカッションし、批判的に理解する力を養う。最後に、市場で販売されている健康機能性食品、培養肉や遺伝子編集食品など新しいテクノロジーから生み出される食品、加工もしくは人工的に生産される食品素材を多面的に評価し、食品の有効性と安全性をエビデンスに基づいて客観的に判断できる力を養う。	

授 業 科 目 の 概 要					
(生活共創学部生活共創学科)					
科目区分	授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容	備考	
専門教育科目 食の科学 食料学	食料学総合演習		卒業研究を進めるに当たっては、進めている研究内容に関連した最新の動向を理解する一方で、それらの先行研究の内容を批判的に評価する能力を向上させる必要がある。そこで、本演習では、各自進めている卒業研究に関する文献を検索し、その内容を要約し紹介する。その要約では、論文の信頼性・適格性等について批判的な分析を行い、もし問題点・疑問点等があればその内容を明確にする。プレゼンテーション能力向上のため、論文要約は口頭発表の形式をとる。発表された内容についてはその場で討論を行い、発表者にフィードバックを提供することで異なる視点からの解釈も得られるようにし、論文読解能力の向上につなげるものとする。		
	公衆衛生学Ⅰ（総論）		公衆衛生とは、組織的な地域社会の努力を通じて疾病を予防し、寿命を延伸し、身体的および精神的健康と、能率の増進を図る科学であり、技術である。小さなコミュニティから国全体に至るまで、人々の集団の中で病気を予防し、健康を増進させることである。ヒトの集団を対象とし、疾病の予防、健康の保持と増進等に対する知識修得のため、健康の概念と公衆衛生の歴史および環境と健康を、我が国の現状を踏まえ、総体的に学ぶ。公衆衛生学Ⅰでは特に『環境問題と健康』、『依存症』（たばこ、飲酒、ゲーム）、『感染症』、『高齢者』などをテーマに、日本社会が抱える健康問題とその対策する知識を習得する。		
	公衆衛生学Ⅱ（各論）		公衆衛生は人の集団を対象とし、病気がケガを予防し、健康の維持増進のため、地域社会や企業、メディアや行政等が連携し、その課題の解決策を発見し、解決に取り組む。公衆衛生学Ⅱでは、公衆衛生学Ⅰで修得した知識を踏まえ、健康に関与する要因の分析方法、疾病の予防対策、医療保険制度および関連する法律等を学び、公衆衛生行政（例えば、保健所は地域住民の健康を支える中核施設であり、疾病の予防、衛生の向上等、地域住民の健康保持増進に関する業務を行っている）についても理解するとともに、環境衛生公衆衛生の実践活動で応用できる疫学の原理と方法についても学ぶ。特に疫学と保健・医療・福祉政策の各論となる知識を習得する。		
	生化学（総論）		生体内での様々な化学反応や物質交換によって、生命維持が行われる。生化学は、生物体の構成物質および生物体内での化学反応を解明し、生命現象を探究する学問領域である。本授業では、先ず生体物質の構造決定、その作用機能、代謝の機構などの生命活動の主軸となる細胞や生体物質構造、生理機能について相対的に学ぶ（生体膜、細胞の小器官など細胞の基本構造とその機能、糖質の構造と性質、脂質の性質と分類、アミノ酸・たんぱく質の構造、たんぱく質の生合成・遺伝子発現の調節、酵素、核酸等）。また、食物として外界から取り込んだ物質の利用、すなわち代謝とその調節について学ぶ代謝栄養学での学習に対する基礎知識を習得する。		
	代謝栄養学（生化学各論）		代謝は、生体内で起こる分子の変化、つまり生体内におけるさまざまな分子の合成・分解に関する化学反応のことである。従属栄養生物であるヒトは、その生命維持のために栄養素を外界から摂り込む必要がある。外界から摂取した栄養成分はそのまま使用できるものは使用し、そのまま使用できない成分は必要に応じて分解や合成を行い、生体内で利用できる形に変換する。また、不要となったものは体外に排出する。この一連の化学反応を総括して代謝という。代謝栄養学では、栄養学や生化学等の学びを踏まえ、代謝とその調節、恒常性を維持するホルモンの作用、および免疫のしくみについて学び、生化学における各論部分を習得する。		
	栄養学・生化学実験		○	（概要）栄養学や生化学の講義で学習した栄養素や生体物質の構造、性質および機能について、食品・生体試料の基本的な取り扱い方および分析に関する基本操作等の実験を通し、学びを深める。栄養学実験では、消化・吸収、栄養素の体内動態や代謝の深い理解を目指して、酵素消化実験、自分自身の尿、マウスの肝臓などの生体成分分析を行う。生化学実験では、食品や微生物を試料とし、DNA、タンパク質発現にも踏み込んだ技術習得と併せて生化学成分の定性法について習得する。 （オムニバス方式／全14回） （3大嶋孝之／第1回～第7回） 食品や微生物を試料とし、DNA、タンパク質発現にも踏み込んだ技術習得と併せて生化学成分の定性法について習得する。 （15若本直樹／第8回～第14回） 消化・吸収、栄養素の体内動態や代謝の深い理解を目指して、酵素消化実験、自分自身の尿、マウスの肝臓などの生体成分分析を行う。	オムニバス方式
食品と衛生	食品衛生学		○	人の生活を維持するために衣・食・住が必要な要素であるなか、食領域は生命維持に深く関係し、必要不可欠な要素である。その食に関わる多様な要望のなかでも、安全性は基本的必須条件で、生活に密着している。食品衛生の対象は食中毒を起こす要因だけでなく、食品添加物、器具・容器包装、おもちゃ、洗剤、環境問題なども含まれる。食に関連する微生物学危害要因、化学的有害要因、物理的有害要因の学びを深めることと併せ、食品添加物の安全性と発ガンの問題、食品と感染症や寄生虫との関係などについての理解を深め、衛生管理システムや食品衛生に関わる法律、国内だけでなく、グローバル基準など、留意すべき知識を習得する。	

授 業 科 目 の 概 要					
(生活共創学部生活共創学科)					
科目区分	授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容	備考	
専門教育科目	食科学 食品と衛生	食品衛生学実験	○	食品衛生に関し、講義などから習得した知識を客観的に分析する実験基礎知識を習得する。展開として、一般社会において関心の高い内容に関して、基本的かつ平易な実験手法に加えて、実際取引をされている食品の安全性はどのように確認をしているのか、基準を設定されているのか、食品を扱う・食品衛生の管理を行う・食品衛生管理の指導をする立場として必要とされる食品衛生管理手法を実際の各現場における実用性にも視点をおき、実験手法を通して講義教科で学んだ内容を体得していく。実験を行うにあたり必要となる化学実験における一般的注意事項や試薬・器具・機器の取り扱いについても学びながら、科学的な考え方や技術を学ぶ授業展開も行う。	
		栄養と健康 応用栄養学	○	人の一生を通して発育、加齢や妊娠などの各ライフステージにおける身体の構造変化、生理学的・生化学的な代謝の変化を学び、それらに基づいて各段階における適切な栄養ケア・マネジメント(栄養管理)の基本的考え方を習得する。更に適切な評価、判定を行った上で身体状況や栄養状態に応じた栄養管理の方法を学ぶ。栄養士実力認定試験や管理栄養士国家試験出題基準に従い、管理栄養士・栄養士に必要な不可欠な各ライフステージ別栄養学の基礎知識を理解する。また、運動・スポーツやストレス、特殊環境の特性に基づいた栄養ケアも学ぶ。	
		栄養学各論実習	○	応用栄養学の講義を踏まえ、妊娠期、乳児期、思春期、高齢期およびさまざまな環境に応じた実践的な栄養ケア・マネジメントが展開できることを目指す。各ライフステージ別に設定された仮の対象者の主観的情報や客観的情報から特性を理解し、栄養アセスメントを行う。そしてそのアセスメントデータから栄養診断を行い、SOAPの形式で栄養管理記録表を作成する。さらに、食事摂取基準に基づいた献立作成も含めた食事計画を演習し、調理の実習を通して理解を深める。	
		臨床栄養学総論	○	総論では、栄養管理の国際的な基準としての「栄養管理プロセス」の概要を学び、従来の「栄養ケア・マネジメント」との違いを理解する。そしてSOAP形式による栄養管理記録表の書き方についても学習する。臨床栄養学分野における栄養士・管理栄養士業務について学ぶ。また、臨床栄養学を学ぶ上で、医療制度や栄養評価法、栄養補給法等について学ぶ。さらに肥満症や糖尿病等の内分泌疾患の栄養アセスメント等、基本的知識と手順について学ぶ。	
		臨床栄養学各論	○	各論では、疾患・病態の成立および予防と治療に栄養素がどのように関係しているかの機序を生化学・解剖生理学・病態生理学と関連付けて学ぶ。具体的には、循環器疾患、腎臓の疾患、血液疾患、筋・骨格疾患、免疫とアレルギー疾患、感染症等を取り上げる。さらに、それらの患者に対してどのような栄養学的治療手段が適切かを学び、対象者のQOLを損なわない食事について考える。病状に影響を及ぼす栄養素、食品、調理法を知り、適正な栄養管理を行うための知識を得る。	
		臨床栄養学実習		栄養管理を必要とする様々な疾病の発生病機と病態について学ぶ。さらにそれらの疾病の食事療法の意義と内容について学ぶ。また、提示された症例について、栄養ケアプランの作成に必要な情報を整理し、栄養アセスメントを行う。栄養アセスメントの総合評価としてプロブレムリストを作成し、栄養ケアプラン作成とその根拠の説明、モニタリング、評価・計画の作成、他専門職種との連携を踏まえた栄養管理の手順等を習得する。患者の栄養状態の評価や、その評価に対する栄養管理方法も学ぶ。	
		栄養学実習	○	基礎栄養学の講義では、栄養学の基礎領域である五大栄養素や消化・吸収、エネルギー代謝について学んだ。本実習ではこれらの基礎知識を、各自が被験者となり実験的手法を用いて理解を深め、実験結果を論理的に考察する。食事の違いにより、血糖値や腸内細菌叢、さらに尿中成分が変化することを確認し、さらに基本味の味覚検査をして自分の閾値を確認する。また、自分のエネルギー消費量について生活時間調査票等を用いて算出することで、対象者の必要エネルギーを理解する。	
	栄養の指導	栄養指導論	○	栄養指導の概念、用語、歴史を学ぶとともに、現代の健康・栄養問題、食生活上の問題点を明らかにして、栄養指導の必要性・意義を理解する。具体的な指導対象者とその食環境について把握する方法や、食行動をより良い方向へ変容させるための行動科学理論・技術の基礎と理論について学ぶ。栄養指導を効果的に展開するためには対象者に適した食教材が必要であり、食生活指針や食事バランスガイド等について学ぶ。	
		栄養指導実習	○	人々の健康増進や疾病予防のため、栄養指導論で学んだ理論を基に、健康状態や栄養状態、食生活状況を把握する(アセスメント)方法について習得する。対象者のライフステージ、ライフスタイルに合わせた栄養指導や教育の方法について、個別指導と集団指導に分けて、P(計画)・D(実施)・C(評価)・A(改善)サイクルに沿い、問題解決に向けて食行動の変容を図るための技法を習得する。併せて、コミュニケーション能力、プレゼンテーション能力も習得する。	

授 業 科 目 の 概 要					
(生活共創学部生活共創学科)					
科目区分	授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容	備考	
専門教育科目	食科学 栄養の指導	栄養カウンセリング論	○	食生活や食行動は心理的な側面によっても大きく左右されるため、人々の複雑な心のあり方や心理面を理解し、栄養カウンセリングを活用する必要性について理解する。個人々に効果的な栄養指導を行うため、対象者の自発的な行動変容を促すカウンセリング理論、コーチング手法と技能を学ぶ。栄養カウンセリングの基本である傾聴とその構成要素について学び、人々の気持ちや心に寄り添う方法を理解する。	
		栄養カウンセリング実習	○	個人々に効果的な栄養指導を行うため、栄養カウンセリング論で学んだ理論、コーチング手法等を活用する技術を身に着ける。対象者の自発的な行動変容を促すため、栄養カウンセリングの基本である傾聴や、人々の気持ちや心に寄り添う能力を身に着ける。心理面からの食生活改善のためのアプローチ方法について、ロールプレイング等を介して、これらの技法およびコミュニケーション能力を習得する。	
		公衆栄養学	○	わが国および諸外国の健康・栄養問題の現状、課題およびそれらに対応した公衆栄養政策についての理解を深めることを目的とする。人々のQOLの向上と健康の保持・増進のために、地域・国家のような集団・社会レベルにおける栄養問題と、それらを取り巻く自然や文化、経済的要因等との関連、ニーズを把握し理解する。適切な公衆栄養プログラムを計画・実施・モニタリング・評価・フィードバックするための知識と技能を学ぶ。	
		公衆栄養学実習	○	栄養改善活動をすすめるため、公衆栄養学で学んだ理論を基に、地域の栄養課題・社会ニーズを把握するための社会調査法を習得する。地域診断、疫学診断、行動・環境診断、教育・生態学的診断により、対象地域や対象者にあわせて目的を設定し、調査設計を行い、調査実施、解析、結論を導き出すプロセスを習得する。これらを総合的に表現し、プレゼンテーションする力もあわせて習得する。	
	給食の運営	給食管理学	○	特定給食施設および特定給食施設における栄養士の役割、給食を運営に必要な栄養・食事管理、献立管理、生産管理、品質管理、食材管理、衛生・安全管理、施設・設備管理、原価管理、危機管理等を学ぶことで、対象者の健康や栄養状態の改善・維持・増進等を目標とした給食運営全般のマネジメントを行う能力を習得する。また児童福祉施設、学校、事業所、高齢者・介護施設、病院などの給食施設ごとの利用者の特徴、給食の目的を学ぶ。	
		校内給食管理実習	○	給食の管理・運営について、その計画・実施・販売・提供について校内実習を通して学ぶ。対象者のライフステージや目的に応じた食事計画を実施することは、栄養士にとって必要不可欠なスキルである。食事計画論や基礎および応用調理学実習で学んだ知識・技能を基に、献立作成、調理実習、献立評価などを実習することにより、適切な食事計画を実施することのできる能力を備えることを目標とする。また、その作業工程でHACCPの概念に基づいた衛生・安全管理の実践を学ぶ。	
		校外給食管理実習	○	校外の実際の給食施設（保育所、小学校、事業所、特別養護老人ホーム、介護老人保健施設、病院、自衛隊において、給食を運営する栄養士の業務を実際に体験することにより、実践力を培い、栄養士としての主体的な自覚を養う。総合的なマネジメントについて理解し、給食施設における栄養士の役割と業務内容、他職種との連携方法、他職種の業務内容についても理解を深める。さらに、実習を通して、社会人としての振る舞い、マナー、令状の書き方を習得する。	
		調理科学実験	○	調理学で学んだ知識をもとに調理過程で起こる様々な諸現象について、その諸条件と科学的、物理的変化のメカニズムと嗜好性への影響について実験を通して学ぶ。ここでは、米の種類と形状・浸漬条件と吸水、小麦グルテンの形成要因、各種でんぷんの加熱特性、野菜・果物の色の変化、豆類の種類と吸水膨潤、いも類の扱い方、卵の調理特性、乳・乳製品の凝固、魚肉の調味と加熱による変化、肉類の軟化・硬化、寒天・ゼラチンの凝固特性などについて検討を行う。	
	強化科目	栄養士総合演習	○	食育、健やかな食生活形成として栄養と健康に携わるエキスパートとしての栄養士としてのキャリアデザインを総合的に学習し、栄養士という有資格者としての礎を学ぶ。また、3年次の校内給食管理実習に向けて、集団給食実習室の見学、手洗い方法の確認、水道水の残留塩素濃度測定や消毒液の次亜塩素酸ナトリウム濃度測定などの衛生試験、食品の表面温度測定、適切な調理作業を行うための照度確認に加え、献立作成、試作、媒体の作成等を行う。	
		建築デザイン	○	長屋、共同住宅の設計演習を通じて、設計、CADによる作図、プレゼンテーション技術の習得と上達を目的とする。鉄筋コンクリート造の長屋、共同住宅の図面のエスキースやボリューム模型の作成、平面図、立面図、断面図などの作図を行い、作図法だけでなく、鉄筋コンクリート構造の基本をマスターすることも目標とする。さらに模型の作成、パースの作成などを通して、立体としての建物を理解し、立体と図面との関連性の理解も深める。	共同

授 業 科 目 の 概 要						
(生活共創学部生活共創学科)						
科目区分	授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容	備考		
専門教育科目	住環境デザイン	建築設計	建築デザイン演習B	鉄筋コンクリート造の教育福祉施設、展示施設などの大型の設計課題により、大規模建築物のデザイン、基本設計、CADによる作図、プレゼンテーションを行う。平面図、立面図、断面図のエスキースと作図、ボリューム模型、模型の制作などを通して、製図技能の習得、デザイン、計画、プレゼンテーション技法の修練、さらに鉄筋コンクリート構造や設備の基本知識の習得をも目標とする。パースや模型制作などを通して、立体と図面との関連性についての理解も深める。	共同	
			住居CAD演習	○	CADによる設計製図の基本を修得することを目的とした演習科目である。本授業では、社会で広く使用されている建築汎用CADを使用する。コマンド毎の課題を設定し、それに繰り返し取り組むことで、基礎的操作から図面作成のテクニック、レイヤーの概念を理解し、初歩的な3次元オブジェクトの作成、レイアウト技法の習得までを目指す。また、住宅等における基礎的な設計図を適切に表現するための必要な知識と技法を設計演習を通じて指導する。	
			建築CAD演習		住居CAD演習で習得したスキルを基本に実社会に応用できる設計製図手法を身に付けることを目的とし、建築設計におけるプレゼンテーション技法のテクニックを教育する演習科目である。本授業では建築汎用CADや関連ソフトを使用し、設計作業を通しながら、2次元から3次元図面作成のテクニック、さらに効果的に視覚化できるプレゼンテーション技法の習得を目指し、建築をわかりやすく適切に表現するために必要な知識と技法を設計演習を通じて指導する。	
			建築総合演習		住環境デザインコースにおける4年間の学修を確実なものとするために、木造軸組構法、鉄筋コンクリート造ラーメン構造の戸建て住宅を設計・作図する演習科目である。複数の課題出題に対し、定められた条件を解決するような建築図面を限られた時間で作図・表現することを目標とする。また、設計にあたっては、設計者として考慮すべき事項である、構造計画・設備計画及び周辺環境との調和を図り、総合的にまとめあげることを要求する。	
建築計画・環境	建築計画	建築計画	○	建築計画学とは、建築をつくる上での基礎となる技術であり、人間の生活(行為)と空間との対応が重視される分野である。本授業は、建築計画に関する基礎理論を学んだ後、各種建物に共通する基礎的問題や空間性能について具体的な建築としての各種施設を概説しながら進行する。建築計画各論のみではなく、人間の心理・行動と空間の関連についても学び、建築物を計画する際に必要となるさまざまなことについて多角的に検討する力を付けることを目指す。		
		インテリアデザイン論	○	インテリアに関する基本的な知識を習得し、デザインや設計に生かせる実践的な技法をマスターする。インテリアの概要、西洋と日本におけるインテリアの歴史、近代建築家、デザイナーによるインテリアデザイン、合板、石膏ボードなどの基本的な材料、端部の納まり、床・壁・天井の納まり、建具の納まり、建具と金物、カーテンとブラインド、諸設備などのインテリアの基本知識をマスターする。技術的、用語的な解説だけではなく、設計、デザインに関連させて説明する。		
		地域デザイン論		都市や地域は、それぞれの土地の歴史、風土の中で発展してきたものである。地域の住環境がどのように形成されてきたのか、様々な課題にどう対処してきたのかについて知ることが、将来的に発生する課題に対応する力を身に付けるための第一歩となる。この講義では、都市の成り立ちについて歴史的に概観し、都市計画の仕組みについて基本的な知識を習得するとともに、植物をはじめとする地域の良好な住環境形成のために配慮すべき指標について理解する。		
		建築環境学A		建築環境学は建築の内外空間の環境形成を計画・評価する分野であり、建築設計において建物性能を決める重要なポイントのひとつである。この授業では、建築環境を形成する物理的要素である「熱・空気」の基本的性質を学ぶとともに、その環境を評価する我々の感覚の特性を知ることによって、建物・設備性能が居住者へ与える影響を理解する。また、それらの知識を踏まえて、居住者にとって望ましい建築環境を構築するための具体的な手法を学ぶ。		
		建築環境学B		建築環境学は建築の内外空間の環境形成を計画・評価する分野であり、建築設計において建物性能を決める重要なポイントのひとつである。この授業では、建築環境を形成する物理的要素である「音・光」の基本的性質を学ぶとともに、その環境を評価する我々の感覚の特性を知ることによって、建物・設備性能が居住者へ与える影響を理解する。また、それらの知識を踏まえて、居住者にとって望ましい建築環境を構築するための具体的な手法を学ぶ。		

授 業 科 目 の 概 要

(生活共創学部生活共創学科)

科目区分	授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容	備考
専門教育科目 住環境デザイン	建築計画・環境 住居設備		私たちが生活する住まいは様々な設備システムを維持管理することによって成り立っている。その設備システムには、快適性、利便性、機能性、安全性、信頼性、経済性、省エネ・省資源、環境保全性、保守管理性が求められており、住居を供給する立場からも、生活者としても、それらを適切に評価できる能力を身に付ける必要がある。受講者が住居において使用する、給排水衛生設備、暖冷房設備、換気設備、電気・情報設備、防災設備について講義を行う。	
	建築環境システム		私たちが建築物の中で生活するためには、建築設備(給排水衛生・空調調和・電気・搬送・防災)が必要不可欠である。この授業では、安全で快適な居住環境を形成するために必要な建築設備のシステムを学び、建築と設備のかかわりを理解することによって、平面・断面計画上の設備スペースについて知る。また、省エネルギー手法について、エネルギー消費性能とライフサイクルアセスメント(環境評価)及び経済性の関係についても学ぶ。	
	建築法規	○	建築基準法及び施行令を中心にその他の建築関係法令との関連も併せて、理解しにくい法令文や法令用語などを法令集とテキストを使って、マーカーとインデックスを付けながら、平易に解説する。建築関係法令の全体像を理解することで、社会活動上求められる法的知識やインテリア・住宅・建築関連の実務を行う上で必要と思われる法令及び資格取得の重要な項目である建築関係法令を修得する。	
	建築構造・施工 構造力学B		建築(住居)構造力学の基礎編として、建築(住居)構造力学を学ぶ力を身に付け、自らの力で基本的な問題に対し解決できる能力の育成を目的とする。そのために、基本的な事例を題材に(ラーメン構造やトラス構造などを題材に)、反力計算、応力計算や応力図の理解の定着から学び始める。その後、建築材料や部材断面の力学的性質を通して、変形のし方(使用上の支障)や破壊のし方(許容応力度)について学ぶ(建築(住居)構造力学の応用編/建築(住居)構造計画につながる基礎的な内容を学ぶ)。	
	構造力学C		建築(住居)構造力学の応用編として、建築(住居)構造力学を学ぶ力を身に付け、自らの力で応用的な問題に対し解決できる能力の育成を目的とする。そのために、応用的な事例を題材に(様々な静定構造物や不静定構造物を題材に)、反力計算、応力計算、応力図、変形のし方(使用上の支障)や破壊のし方(許容応力度)の理解の定着から学ぶを始める。その後、終局状態(崩壊の考え方や崩壊機構)に対する基本的な考え方について学ぶ(建築(住居)構造力学の応用力を身に付ける)。	
	構造計画		建築(住居)構造計画に対する興味を喚起し、建築(住居)構造計画を学ぶ能力の育成を目的とする。そのために、建築(住居)構造力学と建築(住居)構造計画の関わりを理解することから学びを始める。その後、木造、鉄筋コンクリート造や鉄骨造などの代表的な構造の設計事例や設計演習を題材に、構造ごとの考え方の違いや特徴について、建築(住居)構造力学の復習を踏まえつつ概論を学ぶ(建築(住居)構造分野を総合的に学び、実務の基礎力を身に付ける)。	
	建築材料学		現在のように次々に建築用新素材や新製品が開発されている時代には、各種の建築物の用途に応じた適正な建築材料の選択と使用方法が必要になる。そこで、建築材料の中から、建物の柱、梁などの構造材料として用いられている木材、コンクリート及び鋼材について取り上げて、それらの材料の基本的事項(種類、特徴、性能など)を平易に解説する。また、部位に要求される性能条件と材料の性質との関連性を理解させると共に、建築材料選定に当たっての基礎的知識を養う。	
建築施工	○	建築生産の最終段階である施工について、建築物の主要構造形式である鉄筋コンクリート造と鋼構造を中心として、地業工事(地盤調査、根切り工事、山留め工事、杭工事など)、主体工事(鉄筋工事、型枠工事、コンクリート工事、鉄骨工事など)、防水工事(アスファルト防水、改質アスファルト防水、シート防水、塗膜防水、金属シート防水、モルタル防水など)の順に施工方法を平易に解説する。また、施工する前段階として、施工・管理計画(工事契約、工程表、各種届出)などについても説明する。		
園芸 ガーデニング実習Ⅱ	○	1、2年次の園芸領域の講義と実習で得た基礎的な知識と経験をいかし、実際に植物の栽培管理を行う。ガーデニング実習Ⅰと合わせて年間を通した植物の栽培管理法を解説する。季節に適した植物を用い、その栽培に必要な管理計画を検討し、実習する。安全に作業をするための知識を養う。植物を生活に取り入れ利用する様々な方法についても、文化的な年間行事と植物の関係性に着目して、工夫やその効果を実践を通して解説する。また、園芸や造園の役割を理解し、植物を使った時間的、空間的なデザインを見る目、思考力、判断力の向上を目指す。	共同	

授 業 科 目 の 概 要				
(生活共創学部生活共創学科)				
科目区分	授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容	備考
専門教育科目 住環境デザイン	園芸 ガーデンマテリアルズ	○	ガーデニングやエクステリアデザインでは多種多様な植物が用いられる。植物を使った空間デザインを効果的にするためには、個々の植物の知識が不可欠である。本講義では、特にエクステリアデザインなどで用いられる一般的な樹木を特定する力を養う。熱帯花木、山野草、盆栽、ハーブ、サボテン類、洋ラン等の観賞植物の分類及び特徴と栽培方法、園芸における活用方法を解説する。観賞植物の特徴を、体系的に理解し、正しい情報を入手する力を養う。	
	インテリアグリーン		インテリアとして用いられる室内で栽培可能な植物について、素材、栽培法などを解説する。インテリアの概要、インテリアの歴史、近代の建築家のインテリアデザイン等について知り、合わせてそれぞれのインテリアに対し、適切で効果的な植物の種類、コーディネートを実施出来る力を養う。技術的、用語的な解説だけではなく、コーディネートや設計に応用可能なように、なるべくデザインに関連させて説明する。	
	エクステリア演習	○	建築物の設計において、内部空間のデザインと同様に外部空間のデザインもまた重要である。豊かな外部空間は、建築物全体の快適性を高めるものである。また、エクステリアは建物単体に付随するだけのものではなく、都市の景観を形成する重要な要素でもある。本授業では、植物を使った空間デザインを題材とする。設計課題を通し、玄関や庭などのプライベートな小さな空間や公園など公共性のある大きな空間のデザインについて検討する。エクステリアやガーデンデザインの基本的な力である見る力と表現力の向上を目指す。	共同
	社会園芸		園芸と人間との関わりにおける社会的役割、人々の暮らしや社会を豊かにし、心に安らぎを与える園芸の効用と可能性を学修するとともに、植物を活用するリスクマネジメントである有毒植物についても、具体的な事例を通して学ぶことを目的とする。また、人はなぜ花を愛でるのか、園芸とは何かなど基本的な概念と、生活の中の植物・園芸の効用、植物・園芸によるQOLの向上、療法・福祉への活用について考える力を養う。	
	ランドスケープデザイン論		ランドスケープデザインは、庭園から公園やまちの景観や都市計画まで、幅広い分野である。植物をはじめとする自然環境と建築物などの人工的な要素を組み合わせて美しく機能的な屋外空間を創造するための基本的な原則と理論を、世界各国の事例を紹介しながら解説する。社会的な課題である自然と共生する都市の再生や、持続的循環型社会の実現に向けて、人々が快適で楽しく生活できる住環境のデザインを提案していくための、グローバルな視点を養う。	
生活イノベーション	社会現象と哲学	○	「我思う故に我あり」というデカルトの言葉に倣い、人間はそれ以外のことを全て疑うことができる。また哲学の本質は、「○○とは何か？」という問いであり、その答えは人間の経験的な解釈によって探求される。しかし、一人一人の経験が異なることを踏まえば、物事に対する解釈にズレが生じてくることとなる。本科目では現象を解釈する哲学である現象学の視点を学び、社会現象の中にある「○○とは何か？」に焦点を当て、その多様な解釈や経験的なズレを学ぶ活動を行う。	
	ミュージッキング		風の音、鳥の鳴き声、人の声、車のクラクションなど、「いのち」の営みには音が存在する。それらは、私たちに何を語り、どのようなパフォーマンスを誘っているのだろうか。本科目では、ヒト・モノ・コトに感覚を研ぎ澄ませ、感じたことを音・声・身体の動きで表現することの意味を学ぶ。さらに、ボディーパーカッションやボイスアンサンブルを制作し、他者との同調、非言語コミュニケーションを試みる中で、共感力、協働力、達成力を育成する。(32吉永早苗、30新聞よしみ/第8回～14回) (共同)「ミュージッキング」という参加型パフォーマンスの作品として、受講生によるフラッシュモブにチャレンジする。	一部共同
	ファッション サステナブルファッション	○	ファッションには、新しい価値を創造し、人々を幸せにする大きな力がある。人間の心と身体を取りまく最も身近な環境である衣服の生産から着用、廃棄に至るプロセスにおいて将来にわたり持続可能であるために、衣服における技術的・文化的背景を学習し、地球環境、社会開発、経済発展の調和をどのように取るべきかを考察できる力を育成する。更に一人の生活者として、ファッションの魅力を理解しながら、サステナブルファッションの実現のための課題解決に向けた取り組みを実行できる力を習得する。	
	クールジャパン (日本文化とテクノロジーの融合)	○	日本の伝統文化や、アニメーション等のサブカルチャー、精緻な工業技術といった特色は、いずれも世界の人々を魅了し、注目を集める、有形・無形の高度な知的資源と言える。一方、これらの魅力をどのように表現し、世界に伝えていくかは、新たな発想と技術が必要とする学際研究とグローバルビジネスの開拓分野である。本科目では、クールジャパンのコンテンツとマーケティングについて、身近な地域の成功事例や、「クールジャパン・マッチングアワード」の受賞例などを通じて学び、発想力、開拓力、表現力の基盤を養う。	

授 業 科 目 の 概 要				
(生活共創学部生活共創学科)				
科目区分	授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容	備考
専門教育科目	フューチャリーライフ ユニバーサルデザイン I (生活)		共生社会の実現にむけて、障害の有無や、男女の性別、人種・民族の違い等によって、人々の自由な生き方の選択を妨げる様々な社会的障壁を取り除いていく必要がある。本科目では、ファッションデザインを中心として、身の周りの生活ユーティリティをユニバーサルデザインの観点から再考する。特に障害のある人のファッションを具体例として、そのコンセプト、ニーズ、デザイン、普及・啓発（ショーとモデル）、販路までのプロセスを学び、福祉からビジネスとしてのユニバーサルデザインの転換を論ずる。	
	ユニバーサルデザイン II (環境)		ユニバーサルデザインのコンセプトを、①アクセシビリティ（利用が可能）、②ユーザビリティ（効果的に利用できる）、③エンジョイビリティ（利用を楽しむことができる）の3つの段階で考え、特にエンジョイビリティの向上を目指す次世代のユニバーサルデザインの在り方を論ずる。また、学生自身の問題発見と発想、提案を重視し、公共の施設・設備等の物理的障壁だけでなく、社会の習慣やルールに潜在する問題を含めて、生活環境の課題を議論し、フィールドリサーチと企画提案のグループワークを展開する。	
	アシティブ・テクノロジー	○	子どもや高齢者、障害のある人が利用できる、利用しやすい技術は、実は誰にとっても便利で、利用しやすい技術でもある。従来、こうした特別な技術の利用ニーズは、限られた人たちのものであり、小さな需要と考えられがちであった。しかし、例えば電話の発明者であるグラハム・ベルが、聴覚障害者教育の先駆者であったこと等はあまり知られていない。本科目では、現代の先端的な工学技術を用いたアシティブ・テクノロジーの実際を学ぶとともに、SDGsの観点から、未来共創に向けたテクノロジーの開発と利用について講ずる。	
	アントレ・イントレプレナーシップ		アントレプレナーシップとイントレプレナーシップを学ぶ。前者では、自身で会社や事業を起こすことを目指す資質・能力を育むことを目指す。後者では、企業内での起業や事業創造をリードする資質・能力を育むことを目指す。また共通して、組織をまとめるリーダーシップ、マネジメント力、将来を見越した創造力、社内外のビジネスコミュニケーション、行動力、責任能力を学び、そして新規事業を興すビジネス戦略を体系的に学ぶことを目指す。	
	ビジネス SNSプロモーションとマーケティング		商品やサービスの宣伝、イベントや観光等の宣伝に向けた媒体として、SNSは最も効果的なプロモーションとマーケティング手法の一つとして数えられ、今やSNSの戦略が大きくビジネスを左右する時代となっている。実際にSNSを活用したプロモーションとマーケティングを実施する上では、ターゲットの決定、SNSの媒体の決定、投稿時期、内容、リスク管理等、的確な戦略を立案・実行していく必要がある。本科目ではこれら基本戦略を様々な企業や自治体の事例から学ぶ。また、実際にSNSで商品やサービス、イベントや観光等の集客の宣伝に向けた活動を取り入れ、演習を通じた実践的な学びも実践する。	
感性デザイン	○	デザインにおける人間の感性を重要視するアプローチに焦点を当てる。デザインにおいて、ユーザーの感性や体験にどのように影響を与えるかを理解し、最適なデザインを追求する。具体的には、色彩、形状、素材、ユーザーインターフェース、ストーリーテリングなどの要素を通じて、感性的な魅力を創り出す手法について学ぶ。ユーザーの心理や文化的背景に配慮し、共感を生み出す方法も取り上げる。感性デザインは、製品やサービスの成功に重要で、デザイナーにとって不可欠なスキルであり、この講義は、感性デザインの基本原則と実践的なアプローチを提供し、感性的に魅力的なデザインを生み出す能力を高めることを目指す。		
イノベーションデザイン演習		創造的な問題解決と価値の創出に焦点を当てる。デザイン思考を駆使して、ユーザーのニーズを理解し、問題を定義し、アイデアを発展させ、プロトタイピングを行い、実験を通じて改善するスキルを養う。また、ユーザーセントリックなアプローチとチームワークを重要視し、異なるバックグラウンドを持つ学生が協力して創造的な解決策を見つけ出す。継続的な改善とリスク管理に焦点を当て、失敗から学びながらイノベーションを推進する方法を学び、実践的なプロジェクトやケーススタディを通じて、現実の課題に対処し、市場での競争力を向上させるスキルを磨く。		
ドローン活用とビジネス		ドローン技術と映像制作を組み合わせ、ビジネスに応用するスキルを学ぶ。本科目ではドローンの基本操作から始まり、映像制作、ビジネス機会の調査、映像編集、などを包括的に学んでいく。これにより、学生は航空映像制作ビジネスにおける実践的なスキルを習得し、新たな市場や機会を追求する準備を整える。 (オムニバス方式/全14回) (16呉起東/第1回~3回) ドローンを活用した映像制作の基本的知識を学ぶ。 (47岩井隆浩/第4回~14回) ドローンの基本操作から映像制作、そしてビジネスに必要な知識・技能を学ぶ。	オムニバス方式	

授 業 科 目 の 概 要

(生活共創学部生活共創学科)

科目区分	授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容	備考
専門教育科目 生活イノベーション	ビジネスイノベーション ビジネスイノベーション研究 (ケーススタディ I)	○	企業が厳しい競争に打ち勝ち、存続し発展を続けるためにはイノベーションが必要である。イノベーションは技術革新と訳されることもあるが、例えばヤマト運輸の「宅急便(ヤマト運輸の商標)」により個人向け宅配サービスが広がり、私たちの生活を大きく変えた。これもイノベーションの一つといえる。これほどに大きなインパクトはなくとも企業は日々イノベーションを起こそうと工夫・努力を重ねている。本科目では、これまでの製品やサービスを変革することで、顧客に新たな価値を提供し、その企業自身も成長を遂げる事例(ケース)を通して、企業活動やイノベーションの実験を学ぶ。	
	起業・創業プロジェクト	○	町田市や相模原市等の地域において、創業支援センターや商工会議所が実施している創業支援事業計画とタイアップして授業を展開する。起業・創業に必要なプロセスと「経営」「財務」「人材育成」「販路開拓」の4つの基本知識を習得するとともに、コーディネーターの助言を受けながら事業計画作成の模擬演習を行う。受講者が自主的に希望する場合には、在学中または卒業時、卒業後における起業・創業に対して、地域からスタートアップ支援を受けられるように道をつなげる。	
	地域イノベーション 地域課題を考える	○	地域は様々な課題を抱えている。どの地域にも共通する課題もあれば、それぞれの地域に固有の課題もある。地域は実際にどのような課題を抱え、その問題解決に向けていかなる取り組みを行なっているのだろうか。本科目では、町田キャンパスが立地する町田市、近隣の八王子市、相模原市の3市の市議会議員及び市役所職員によるオムニバス講義を通して、地域が抱える課題とその解決のための取り組みの実験を学び、地域課題に対する理解を深めるとともに政治・行政への関心を養う。	
	社会起業と非営利組織		社会的課題を解決する方法として、政治・行政によるものほか、社会起業(ソーシャルビジネス)と非営利組織による活動が挙げられる。前者については、経済産業省は、社会性を持ったビジネスであり、同時に利益を追求する事業であり、新しいスタイルのビジネスとして革新性があることを定義している。一方、非営利組織は、利益のために活動するのではなく、地域や社会の課題を解決するための団体である。利益を追求するか否かの違いはあるが、どちらも地域や社会が抱える課題の解決を目指すという点で共通している。本科目では、社会起業と非営利組織について、それぞれの役割と課題について、実際の事例も交えて学ぶ。	
	地域イノベーション研究 (ケーススタディ II)	○	企業がイノベーションを通して存続・発展を目指すのと同様に、地域も新たな発想による変革なしには存続・発展が難しい時代になりつつある。急速に進む少子高齢化や過疎化、若者の都会への流出、シャッター通りに象徴される中心市街地の衰退など、地域が抱える問題は深刻さを増しつつある。その一方で、各地でその逆境を跳ね返す取り組みが行われ、成果をあげる地域も現れている。本科目では、新たな発想による変革で地域が抱える課題の解決を目指す取り組みについて、ゲスト講師による講義を交えながら、地域課題に関する関心とイノベーションに対する理解を深める。	
	地域イノベーション演習 (PBL)	○	様々な地域の公共施設や商店街、動物園や遊園地、観光施設等、大学が既存の施設やサービスと連携し、短期間で実施が可能な地域活性化のアイデアと、その具体的なプランニング、試行までを学生が地域と協働で実践する。テーマ毎にグループを編成し、連携する地域の施設や機関と協議を行いながら、グループワーク、フィールドワークを中心として授業を展開する。	
	国際貢献活動		国際貢献には、海外に向いて実地で支援を行う直接的な貢献活動と、日本国内において異文化理解の啓発や在留外国人の支援、支援資金を行うような間接的な貢献活動がある。この科目では、前者の例として国際協力機構(JICA)の青年海外協力隊による海外ボランティア事業の実験を学ぶ。また後者の例として、支援物資の調達や、栄養改善分野の情報整理等を行う国内事業について学ぶ。これらの経過を通じて国際協力業界のキャリアに対する関心を高め、在学中または卒業後の国際貢献へのチャレンジに道を開く。	
卒業研究・卒業論文	アドバンストゼミA	○	卒業研究を見据えて、所属するコースでの学びを中心に、各研究室で展開されている具体的な研究課題、研究内容、研究方法を学びながら、研究室配属のための準備を行う。生活共創学部における、生活イノベーション、住環境デザイン、食科学をはじめ、こども教育も含む様々な研究領域において解決すべき現代的課題を知り、教員や学生同士の対話や先行研究に触れることを通じて、自身が取り組みたい課題を発見することを目的とする。	
	アドバンストゼミB	○	配属となった研究室でゼミを実施する。4年次に開講される卒業研究A・Bの履修に先立ち、各自が取り組みたいテーマを検討するとともに、研究活動を進めていくための基礎となる資料の収集、講読及び仮説の設定や探究したい点の絞り込み、論文の構成や書き方等について学ぶ。また、教員や学生とのディスカッションを通じて、自己を表現したり新しい知見を得たりして専門分野への知識・理解を深めていく。	

授 業 科 目 の 概 要				
(生活共創学部生活共創学科)				
科目区分	授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容	備考
専門教育科目	卒業研究A	○	所属する研究室において、先行研究を踏まえつつ自らの研究課題を設定し、研究方法を吟味し、研究計画に基づいて調査・データ収集等に取り組む。中間報告会では、それまでの研究成果をプレゼンテーションし、卒業研究Bに向けての課題を明らかにする。授業内容の詳細については各指導教員の指導によるものとする。	
	卒業研究B	○	生活共創学として、学科やコースを超えた学びを通し、深い専門性、他の専門領域への興味関心、それらを通して培った能力を活かした研究を行う。先行研究に学び、独自の研究課題を設定し、研究計画を立て、調査などを通じてデータを収集し、データの整理、分析、考察を行い、研究の成果をまとめた研究成果の要旨を作成し発表する。卒業研究発表会では、最終的な研究成果を口頭で発表し、質疑応答を行う。	
	卒業論文・卒業制作	○	卒業研究A、Bの成果を論文にまとめる。論文は科学的かつ論理的であると同時に、研究対象への人権的な配慮など倫理的要求にも応えなければならない。このプロセスを通じて、専門知識を深めるだけでなく、データ分析のスキル、論理的思考力、文章と図表を使った表現力、計画遂行能力など、将来のキャリアに備えておくべき資質・能力を向上させることを目指す。	

(注)

- 開設する授業科目の数に応じ、適宜枠の数を増やして記入すること。
- 専門職大学等又は専門職学科を設ける大学若しくは短期大学の授業科目であって同時に授業を行う学生数が40人を超えることを想定するものについては、その旨及び当該想定する学生数を「備考」の欄に記入すること。
- 私立の大学の学部若しくは大学院の研究科又は短期大学の学科若しくは高等専門学校の収容定員に係る学則の変更の認可を受けようとする場合若しくは届出を行うとする場合、大学等の設置者の変更の認可を受けようとする場合又は大学等の廃止の認可を受けようとする場合若しくは届出を行うとする場合は、この書類を作成する必要はない。
- 「主要授業科目」の欄は、授業科目が主要授業科目に該当する場合、欄に「○」を記入すること。なお、高等専門学校の学科を設置する場合は、「主要授業科目」の欄に記入せず、斜線を引くこと。
- 高等専門学校の学科を設置する場合は、高等専門学校設置基準第17条第4項の規定により計算することのできる授業科目については、備考欄に「☆」を記入すること。

授 業 科 目 の 概 要					
(生活共創学部こども教育学科)					
科目区分	授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容	備考	
共通教育科目	リテラシー		<p>(概要) レポート・論文を作成する技術の習得を通して、大学教育に対応できる基礎力を育成することを目指す。演習形式で具体的な作業を経験しながら実践的に学ぶことを通じて、主体的な学びの姿勢を身に付けさせるとともに、高校までとは質の異なる大学での教育へとスムーズに移行させる橋渡しの役割を担うこともはかる。レポートの形式や表現/テーマ設定の方法やアウトラインの作り方/文献検索の方法や文献の利用方法/表・図からの読み取りや表・図の使い方を扱う。</p> <p>(オムニバス方式/全14回) (32森朋子・31千葉一博・13原田晋吾・47小野春奈/全8回) 第1回～第4回：レポートの形式や表現を扱う。 第5回～第8回：テーマ設定の方法やアウトラインの作り方を扱う。 (33澤田雅彦・12末松加奈・36佐々木麻紀子・47小野春奈/全6回) 第9回～第11回：文献検索の方法や文献の利用方法を扱う。 第12回～第14回：表・図からの読み取りや表・図の使い方を扱う。</p>	オムニバス方式	
		リテラシー演習			
		データサイエンス入門		データサイエンス・AIやデータ倫理等の基礎を説明し、また学内の情報ネットワークに接続したパソコンでデータリテラシーを養う演習に取り組む。説明の理解と演習により、データ・AIを活用する上での留意事項や新たなビジネスやサービスを知り、またデータを適切に読み解き扱うことができるようになることを目指す。社会や日常生活が大きく変化していることを理解し、ビッグデータとその活用、活用の結果生まれる新しい価値等についても、事例を通して考える。	
		デジタル&AI基礎		学内の情報ネットワークに接続したパソコンで、基礎的なプログラミングの演習に取り組む。演習により、デジタルリテラシーを向上させ、デジタル技術を有効に活用することができるようになることを目指す。アルゴリズムとデータ構造を理解することから始め、自らコーディングすることに取り組む。また、AIを応用する演習にも取り組む。演習により、自らの学修や創作活動のスキルを向上させることができるようになることを目指す。AIの機能を理解することから始め、その利用方法を学ぶ演習に取り組む。	
		情報リテラシー基礎		学内の情報ネットワークに接続したパソコンで、情報検索の演習に取り組む。演習により、検索結果の評価に関するスキルを向上させることができるようになることを目指す。プライバシーや著作権に関わる情報の取り扱いを理解し、使用する情報を適切に管理することを学ぶ。また、情報社会における脅威を理解し、セキュリティ対策を適切に行う演習にも取り組む。情報検索やセキュリティ対策の演習により、情報倫理に関する理解を深めることを目指す。	
		コンピュータ演習a		学内の情報ネットワークに接続したパソコンで、文書やプレゼンテーションを作成する演習に取り組む。演習により、コンピュータを自ら利用して、簡単な文書やプレゼンテーションを正確に作成できるようになることを目指す。タイピングやメールの送受信を練習することから始め、文書作成ソフトウェアで文章を入力して適切に編集することに取り組む。また、図表を処理する技術も演習を通して身に付ける。さらに、プレゼンテーション作成ソフトウェアでスライドを作成し、プレゼンテーション全体を適切に編集することにも取り組む。	
	コンピュータ演習b		学内の情報ネットワークに接続したパソコンで、表計算の演習に取り組む。演習により、コンピュータを自ら利用して、表計算による情報処理が正確にできるようになることを目指す。データや関数を入力して数式の基本を理解することから始め、データや数式による計算結果を元にグラフを作成することに取り組む。また、データの整列や抽出、条件判断や検索に基づく処理も演習を通して身に付ける。さらに、簡単なプログラミングも確認する。		
教養教育	哲学入門		<p>ひとは生まれつき「知る」ことを欲する。生活のためだけでなく、娯楽のためだけでなく、「ただ知るために知る」ところに「知る」ことの真の意味がある、と人は言う。そこで自己自身や、そして自己を取り囲む自然・世界に心の眼を向けるとき、さまざまな疑問や問題が生まれる。この授業では、哲学についての知識を深める中で、「何故?」、「どうして?」、「何のために?」などの問いを自分自身に発する姿勢を養う。ここから「哲学」が始まる。忙しい現代社会の中で、私たちは自らに問い掛けることを忘れがちである。「知る」ことを恋い求めることこそ、「哲学」であるといえよう。</p>		

授 業 科 目 の 概 要				
(生活共創学部こども教育学科)				
科目 区分	授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容	備考
共通 教育 科目	心理学		心理学の起源は古代ギリシアの哲学にさかのぼる。20世紀に「行動の科学」として自立した学問となり、科学技術の進歩と密接に関係しながらさらに発展しようとしている。この講義では、行動の生理・生物学的基礎、知覚、認知、情動、学習と記憶、動機づけ、パーソナリティ、社会的行動などのテーマを取り上げ、「心と行動の謎」についてその基礎的知識を学び、現代社会で起こっている様々な話題と心理学との関連を学習することで、豊かに生きるヒントを得ることを目指す。	
	世界の歴史		多数の国家・地域や民族がどう関係し合いながら人類の歴史をつくってきたかを学ぶ。世界の歴史の大きな枠組みと流れを、日本の歴史とも関連づけながら理解し、文化の多様性と現代世界の特徴を広い視野から考察することによって、歴史的思考力を培う。ヨーロッパやアメリカ、中国の歴史に片寄らず、イスラーム、アフリカ、ラテンアメリカ、東欧諸国にも触れ、横断的な広い視野から世界史が本来もっている面白さを理解できるよう努める。	
	ジェンダー論		ジェンダーの基礎を学ぶことから、男らしさや女らしさにしばられず、個人の能力を伸ばし生きていくことの大切さを学ぶ。ジェンダーの問題は女性だけの問題ではなく、男性にも大きく関わっている。女性も男性も、またセクシュアル・マイノリティの人々も自分らしく生きることの大切さについて考える。また、ジェンダー問題と深く関わるリプロダクティブ・ヘルス/ライツ(性と生殖の健康と権利)について歴史的経緯や制度・政策面も含め学ぶ。以上のことから、人は一人ずつ異なる存在であり、尊厳をもって生きることの大切さを考える。	
	人権と平和		日本国憲法を含む法の意義と機能を明らかにし、憲法を含む法に規定されている人権に関するものの見方や考え方が身に付けられるよう努める。従来の体系にとらわれず、現実の人権問題を直視して、その構造的な特徴を明らかにし、そこから理論を帰納的に形成し、今日の社会に存する「人権と平和」に関する問題を解明する契機を見出したい。主として女性のあらゆるライフステージ(就職、結婚、子育て、離婚、介護、相続など)に関わる「人権と平和」を考察する。	
	法学入門 (日本国憲法)		はじめに、法の基礎を概観し、私たちの生活の中で法をどのように活用すればよいのか、法的作用や役割を考えてみる。次に、日本国憲法の理念から現実の憲法政治の問題状況を分析する。とりわけ、国民主権のもとにおける国会の機能、行政の肥大化現象と地方行政、裁判所の人権保障機関としての役割などについて考察する。後半は、憲法訴訟における人権の憲法判例のリーディング・ケースを考察し、今日の基本権をめぐる問題状況を明らかにする。	
	法とくらし		私たちが安心してくらするのには法によって社会の秩序が保たれているからである。法なしにくらしは成り立たず、社会で生きていくためには法に対する理解が不可欠である。授業では、弁護士である法実務家が、憲法、民法、刑法などの法律に加えて、会社などの組織で働く際に知っておくべき労働法など、これからの生活に必要と考えられる法律をとりあげ、それぞれの法律の目的や基本的事項について、判例(実際の裁判例)なども紹介しながら解説を行う。法がくらしにどう関わっているかを理解し、法的な思考の基礎を身に付けることを期待したい。	
	経済学入門		人間が現代社会で生きている長い年月の間、経済と関わらない一日はない。人が生きていくためには、何らかの経済取引を重ねていかなくてはならない。言い換えれば、経済と生活は、表裏一体で営まれ、社会をつなぎ、命をはぐくんでいくのである。このことを、国の経済・政府の機能・私たちの納める税を通して学んでいく。自分の財布と経済と社会が敏感に関わりあい循環していることを学ぶ。生活理解→人間理解→社会理解へと、思考が展開し多角的な思考をもつことを狙いとする。	
	基礎数学		高校までの数学は、どの分野も生きる上で役に立つ重要なものばかりである。授業では、高校までに学習した数学Ⅰ・数学A・数学Ⅱ・数学B・数学Ⅲ・数学Cの中から特に重要な項目を選び出して復習し発展させることで、知識・技術・思考を確実なものとし、それらを自然科学や社会科学のみならず日常の様々な事象に応用することで、数学の大切さを学ぶ。また、この科目を履修することで、公務員試験やSPI試験で出題されるテーマを大まかにフォローすることができる。	
	基礎統計学		統計の基礎を学び、データを適切に処理でき、かつ得られた結果を正しく理解、解釈するために必要な知識・技術を学ぶ。まずは、記述統計学としての1変量の標本データの要約ができるように平均値、分散、標準偏差に代表される基本統計量を学ぶ。次に、2変量のデータ解析の基本として相関分析、回帰分析を学ぶ。最後に、離散型確率分布や連続型確率分布などにおける確率計算および大数の法則・中心極限定理を理解し、推定、検定の考え方につながる推測統計学の基本的考え方を学ぶ。毎回の講義では、事例を複数提示し、様々な事象への応用に触れる。	

授 業 科 目 の 概 要				
(生活共創学部こども教育学科)				
科目区分	授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容	備考
共通教育科目	基礎化学		化学は、物質を扱う学問であり、自然科学分野における中心的役割を果たしている。また、私たちの生活は化学に支えられているといっても過言ではない。「物質とは何か」、「物質の性質を決めているのは何か」、「なぜ物質は変化するのか」等、物質を分子の目から捉え、物質の変化におけるエネルギーの役割を学ぶ。本講義は、科学的に物質を捉える力を養うとともに、有機化学など化学的素養が必要な専門科目を理解するための入門科目である。	
	基礎生物学		生命の基本単位は細胞で、細胞自体の基本構造は生物によってほとんど差が見られない。そこで、この授業ではまず細胞について学び、次いで、細胞が集まって作り上げる組織やいろいろな組織が集まって作り上げる器官などの構造や機能を学ぶ。その中で、私たちの生活、生命を支えるしくみについて理解を深める。	
	環境と資源		毎日のように、新聞記事やニュースで環境や生態系に関する話題が取り上げられている。その多くは地球温暖化やオゾンホール、野生生物の絶滅など好ましくない話題ばかりで、環境問題は日ごとに深刻化している。この授業では、地球環境とそこに生活する生物の関係、生物同士が与え合う関係、人類を含む生物が環境に与える影響などについてわかりやすく解説し、環境・資源の利用・保全の実態と問題点について理解を深めることを目的とする。	
	自然科学に親しむ		自然科学の教養は、私たちが日常生活を送る上で必要不可欠な知識である。しかしながら、それらが生活の中で当たり前存在であるがゆえに、私たちはその不思議に目を留めることが少ない。そこで本講義では、学生の皆さんが、身近な自然科学への理解を深め、科学的な思考を促し、より科学的な視点を持つことを目的として展開する。具体的には、科学の基本的な原則や方法論、自然界の理解、科学技術の日常生活への応用や現代社会への影響、科学的な思考などについて、事例を紹介しながら、自然科学の魅力と実用性を伝える。	
	現代社会と家政学		家政学はすべての人が質の高い生活を維持し、生きがいをもって人生を全うするための方法を、生活者の視点に立って考察し、提案することを目的として発展してきた。授業では、家庭生活や家族関係の変化を学び、生活と社会の関わりについて理解を深める。また、グローバルに生活を捉えるための視点を身に付けてもらいたい。家政学の理念や基本的姿勢を学び、現代社会が直面する問題を解決するために自分には何ができるのかを考え、今後の学習につなげていくことを目標とする。	
	色彩論		色彩に関する科学的な基礎知識について学ぶとともに、デザインや美術の分野における色彩の扱い方に関して考察を行う。色彩について感覚的に認識するだけでなく、色が見える仕組みや色の知覚についての考察を通して、色とは何なのかという問題を論理的に分析し、理解することを目的とする。あわせて、インテリアやファッション、食品など、生活の中のさまざまな場面で色彩を効果的に活用する力を養い、色彩に対する感性を磨きあげていくことも目指す。	
グローバルスタディーズ	英語コミュニケーション1		英語を使った教室活動を通して、英語によるコミュニケーション能力を養うことを目的としている。授業では、身近なテーマについて、言語の4技能（「聞く」「話す」「読む」「書く」）を総合的に用い、我々が真のコミュニケーションで通常行っているコミュニケーションに近い形で学ぶ。教室活動のタスクを完了するために必要な音声を訓練し、語・文法・表現を学ぶことで、より正確でなめらかな英語の習得を目指していく。また、英語によるコミュニケーションでの応答表現や英語圏の習慣・文化についても学んでいく。	
	英語コミュニケーション2		英語を使った教室活動を通して、英語によるコミュニケーション能力を高めることを目的としている。授業では、複数のテーマについて「説明する」「比較する」「自分の考えを述べる」「質問する」「質問に答える」などの機能を学び、最終的に自分の選んだテーマで発表（ミニレポート、ポスター、口頭など）する。その過程で必要な音声を訓練し、語・文法・表現を学ぶことで、より正確でなめらかな英語の習得を目指していく。また、英語でよく使われる応答表現や英語圏の習慣・文化についても学んでいく。	
	英語セミナー		英語を使った教室活動を通して、短期留学や地域・ビジネスの場でも対応できる英語コミュニケーション力を習得することを目的としている。授業では、相手によって使い分けが必要な丁寧さのレベルなども学び、コミュニケーションでより的確に表現する力を養う。また、「調べる」「まとめる」「自分の考えを述べる」「他者に伝える」というプロセスを行う中で、英語による思考力を高めていく。公的な場での応答表現やプレゼンテーション術も実践的に学び、「日常会話」を超えた英語力を目指す。	

授 業 科 目 の 概 要				
(生活共創学部こども教育学科)				
科目区分	授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容	備考
共通教育科目	グローバルスタディズ	韓国語コミュニケーション1	日本と韓国は政治、経済、文化などあらゆる分野で密接な関係にある。そのため人の往来も活発であり、日本国内における韓国語学習の必要性は高まってきている。この科目では、韓国語・ハングルを初めて学習する学生を対象とし、文字、発音、初級文法などを学ぶ。授業では発音や聞き取りの確認テストを繰り返し、韓国語の基礎を一つ一つ確実にマスターすることを目指す。あいさつなどの基礎的な文章を勉強するうちに、日本語と韓国語がよく似ていることに気づき、韓国語に親しみがわくことを期待したい。	
		韓国語コミュニケーション2	日本と韓国は政治、経済、文化などあらゆる分野で密接な関係にある。そのため人の往来も活発であり、日本国内における韓国語学習の必要性は高まってきている。この科目では、韓国語・ハングルの文字、発音、初級文法を確認し、基礎会話などを学ぶ。授業では発音や聞き取りの確認テストを繰り返し、韓国語の基礎を一つ一つ確実にマスターすることを目指す。あいさつなどの基礎的な文章を勉強するうちに、日本語と韓国語がよく似ていることに気づき、韓国語に親しみがわくことを期待したい。	
		中国語コミュニケーション1	日本と中国の関わりの歴史は長い。現代では、日本との経済的な結びつきもますます深まってきているため、日本国内における中国語学習の必要性も高まってきている。この科目では中国語を初めて学ぶ学生を対象とし、「現代漢語標準語」を初歩から学ぶ。まずは発音の練習を重点的に扱い、正しく発音できるようになることを目指す。基本文型・文法も確実に身に付くよう反復的に学習し、中国語学習の基礎固めをする。	
		中国語コミュニケーション2	日本と中国の関わりの歴史は長い。現代では、日本との経済的な結びつきもますます深まってきているため、日本国内における中国語学習の必要性も高まってきている。この科目では中国語の発音や基本文型・文法を確認し、より複雑な文法も身に付くよう反復的に学習する。また、中国語の簡単な会話ができるようになることを目指す。	
		異文化コミュニケーション	グローバル化が進んだ現代において、情報・人・物が国境を越えて交わりあう現象は日常茶飯事の出来事である。文化に対する理解が不足していれば、異文化間における不意な接触は緊張や摩擦を生み出すきっかけにもなる。では、文化背景の異なる人々と好ましい人間関係を維持するためには、どのようなテクニックが必要だろうか。この授業では異文化の語現象に直面したとき我々はどうのように考え行動すべきか、また文化の違いをどのように調整したらよいか、異文化コミュニケーションの視点から学ぶ。	
		異文化交流a	英語圏の大学またはそれに準ずる英語教育機関で短期英語&文化コースを受講する。同時に研修地の名所旧跡の視察、生活様式の体験、現地でも出会った人々との交流を通して、異文化理解を深め、英語によるコミュニケーション力を高めていく。研修前には事前授業が行われ、サバイバル・イングリッシュや研修地の文化等を学ぶ。	共同
		異文化交流b	海外の大学生とオンラインで交流する。家庭、大学、社会における暮らしぶりを互いに紹介し合う中で、人間としての共通点および文化の違いによる相違点についての理解を深めていく。また、地球規模の問題をともに考えることで、よりよい未来を構築するための認識を共有していく。	
※ 日留本学生・科目事情		アカデミック・ジャパニーズ1	留学生在が大学で学ぶ上で必要な思考力および技術力を身に付けることを目的としている。授業では、複数のプロジェクトに取り組む中で、テーマについて理解し、自らの考察を加え、他者に論理的に伝えていくという訓練を繰り返していく。また、その過程において、「アイデアの出し方」「アウトラインの作成」「情報収集の方法」「レポート・発表の構成および表現」「資料の作成」等の技術について学ぶ。「日本語で」学ぶプロセスにおいて、大学生として必要な日本語能力の向上を図っていく。	
		アカデミック・ジャパニーズ2	留学生在が大学で学ぶ上で必要な思考力および技術力を高めることを目的としている。授業では、複数のプロジェクトに取り組む中で、「情報を的確に集め理解する」「理解した情報をもとに自分の考えをまとめる」「他者に分かりやすいように伝える」というプロセスが自分でできるようになるための訓練を繰り返していく。プロジェクトのテーマには、社会問題や地球規模の問題などを取りあげ、最後は所属学科の学びに関連したテーマを自ら設定する。「考察を深める」ことに重点を置き、よりレベルの高い日本語表現の習得も目指していく。	

授 業 科 目 の 概 要				
(生活共創学部こども教育学科)				
科目区分	授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容	備考
共通教育科目	※留學生・日本事情 グローバルスタディーズ 日本の歴史と文化		日本の歴史や文化についての知識は、大学における様々な勉強を理解するための背景として必要であり、また留學生自身の日本社会への適応にも重要な要素となる。しかし日本文化に育った者が大学入学時までに身に付けているこれらの知識を、留學生は意識的に学ぶことで蓄積していかなければならない。「日本の歴史と文化」では、日本の歴史を学ぶことで、日本の政治的、文化的変遷を学び、更にそこから読み取れる日本文化の特徴および日本人の思考形式について理解を深めていく。	
	社会人としての日本語		留學生の中には、卒業後日本での就職や進学、母国での日本関連企業等への就職を希望する者が多い。本科目は、卒業後、日本と海外との架け橋として活躍する可能性のある学生に対し、社会人として求められる日本語力を養成することを目的としている。授業では、敬語の文型および用法を理解した上で、実践を意識した練習を多く取り入れていく。また、日本語の言語表現を通して、日本人の思考形式への理解を深め、日本社会における円滑なコミュニケーションの方法を身に付けていく。	
キャリア	キャリア形成概論		生涯キャリア発達の視点に立ち、社会変化の激しい現代を生きる学生が、自律的に自己のキャリア形成を構築するための知識と実践力を学ぶ。本科目は、キャリア形成の基礎として、自己の生涯にわたるキャリア発達プロセスを理解するとともに、社会活動に関する実践的知識を深めることにより、社会における自己の役割と意義を認識し、労働観、職業観を醸成することを目指す。また、本科目学習後に履修する実践演習を行うための基礎的業務知識も修得する。	
	キャリア実践演習1		社会参加、社会改革意識を持つシティズンシップ教育の一環として、社会活動に参画しながら、大学における学習や活動を社会に還元し、自己の所属するコミュニティに貢献する方法を実践的に学ぶ。本科目(実践演習1)は、学生が所属する最も身近なコミュニティである大学内の多様な職場、事業運営に参画し、大学コミュニティに貢献する。職場運営や就業制度等の基礎的理解を体験的に学ぶとともに、学生個々の主体性や行動力、企画力や協調性、リーダーシップなどの能力を育成する。個々の学生の指導育成は、各部署の職員と科目担当教員が連携して行う。 (19佐々木ひとみ/14回) (20佐野潤子/4回) (共同) (12末松加奈/4回) (共同)	一部共同
	キャリア実践演習2		社会参加、社会改革意識を持つシティズンシップ教育の一環として、社会活動に参画しながら、大学における学習や活動を社会に還元し、自己の所属するコミュニティに貢献する方法を実践的に学ぶ。本科目(実践演習2)は、学外の多様な職場、事業運営に参画し、社会コミュニティに貢献する。社会の多様な組織の実践活動を通して、社会活動の現状と課題を体験的に学ぶとともに、学生個々の主体性や行動力、企画力や協調性、リーダーシップなどの能力を育成する。個々の学生の指導育成は、各受入先の担当者と科目担当教員が連携して行う。 (19佐々木ひとみ/14回) (20佐野潤子/4回) (共同) (12末松加奈/4回) (共同)	一部共同
	キャリアアドバンストゼミa		大学生のアカデミックスキルとしても重要であり、また社会人としても有用なキャリア実践スキルを修得し、より自律的で高度な実践力を持つ人材の養成を目的とする。本科目(アドバンストゼミa)では、特に授業内で文章の作成法、発表、討論を繰り返し実施し、論理的思考力、表現力、キャリア構築力、自己管理力の修得を目指す。また、修得過程では実際の就職活動場面で使用する書式や企業研究事例を題材とし、実際の将来の選択肢の探索に役立つように工夫する。	
	キャリアアドバンストゼミb		大学生のアカデミックスキルとしても重要であり、また社会人としても有用なキャリア実践スキルを修得し、より自律的で高度な実践力を持つ人材の養成を目的とする。本科目(アドバンストゼミb)では、特に授業内で企業等に関する調査、発表、討論を繰り返し実施し、学習習慣を育成するとともに、企業や自治体、NPO/NGO等の機能や役割、実際の事業活動の理解を深める。実際に各組織の関係者等を招聘したり業務施設を訪問したりし、社会の現状と課題を実践的に理解する機会を設ける。また、修得過程では多様な社会活動およびそこで働く人々を知ることで、実際の将来の就業先の選択肢の探索に役立つように工夫する。	
ウェルネス	心と身体の健康		私たちの心と身体は深いところで重なり合い相互に影響し合っている。生涯を通じて心身ともに健康であることは、私たちが自分らしくよりよく生きる(=Well-being)上で重要な意味を持っている。本授業では心と身体それぞれの健康について基本的な知識を学ぶとともに、健康であることの意味や健康であるために必要なことについて理解を深める。その上で、現代社会において私たちが生涯にわたり健康に生きていくことについて、臨時的な視点を取り入れながら考えていく。	

授 業 科 目 の 概 要				
(生活共創学部こども教育学科)				
科目区分	授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容	備考
共通教育科目	ウェルネス	健康スポーツ演習a	自己の心身の健康を高め、生涯にわたって運動やスポーツに親しみながら自己を成長させる力を身に付けることを目的に、様々なスポーツ種目やレクリエーションスポーツについて、事前事後学習や実際の運動体験を通じ、その知識技術を修得する。同時に、身体活動を通じた他者との関わりや自己との対話を通じ、自己理解を深め、社会性を醸成することを目指す。なお、本科目では春～夏の気候に応じたスポーツの実践と安全管理についても取り上げる。	
		健康スポーツ演習b	自己の心身の健康を高め、生涯にわたって運動やスポーツに親しみながら自己を成長させる力を身に付けることを目的に、様々なスポーツ種目やレクリエーションスポーツについて、事前事後学習や実際の運動体験を通じ、その知識技術を修得する。同時に、身体活動を通じた他者との関わりや自己との対話を通じ、自己理解を深め、社会性を醸成することを目指す。なお、本科目では秋～冬の気候に応じたスポーツの実践と安全管理についても取り上げる。	
		健康スポーツ演習c	一人ひとりのライフスタイルや年齢、性別、体力、興味などに応じて、誰もが、いつでも、どこでも、誰でも気軽にスポーツに親しみ、スポーツを楽しむことのできる生涯スポーツを取り上げる。生涯スポーツの目的、特性、方法を理解し、自ら実践することは、スポーツを通じた幸福で豊かな生活を営む基盤となる。また、生涯スポーツを楽しみ、生涯スポーツを通じて仲間とふれあうことは、生涯を通じた健康の維持増進につながり、人生を豊かにする機会となる。	
		体育講義	子どものからだと運動能力について理解していく上での基礎的な知識を学ぶ。子どもの発育発達にもなる、遊びからルールをともなったスポーツへの参加がどのように身体的・精神的に影響を及ぼしていくのかについて考えていく。運動の効果や評価の方法についても具体的な事例を取り上げながら学んでいく。また、小さい頃からのエリート教育・才能教育について運動環境、指導者、プログラムやスポーツ障害といった観点から考えていく。	
		体育実技	幼児と一緒に運動やスポーツを行うためには、自身が運動やスポーツの楽しさを知り実践しなくてはならない。子どもたちは勝ち負けよりも運動そのものを楽しんでいる。運動やスポーツがコミュニケーションの形成や自己効力の向上に大きな効果を上げていることも明らかである。子どもと一緒に遊べる運動やスポーツを実践していく。室内運動や屋外での運動についても取り上げ、環境に応じた運動やスポーツ種目を実施していく。さらに伝承的運動遊びも実施していく。	
		森の体験活動	都市化やデジタル化が進む現在、豊かな自然環境下での体験活動の機会が減少している。森林などの自然環境での滞在・活動は、人間の心理的、身体的な健康の維持増進に肯定的な影響を与えるとされ、ウェルビーイングを高める方法として近年益々注目が高まっている。本科目では、多様な自然体験活動を実際に体験し、自然体験活動の実施方法に関する知識技術を修得すると同時に、自然を五感で感じ取ること、他者と協働すること、自己と対峙することなどの体験を通じ、そのなかで生じる感情（こころ）・身体（からだ）・認知（あたま）の動きに焦点をあてて省察することで、生涯にわたる心身の健康と自己成長に寄与する力を修得することを目指す。	
学部共通科目	生活科学	生活共創学部概論	<p>(概要)「生活共創学」の教育目標は、「生活」が人々のくらしの基礎であり、社会を構成する基盤であるとの認識に立って、衣、食、住、こどもを中心とする生活諸領域に関する知識・技能とともに、それらを活かして生活者の視点から、多様な人々と協働し、身近な変革や新たな価値の創出を通して地域・社会の持続的発展に寄与する能力を養うことである。本授業では、生活諸領域に関する学問の最前線、地域・社会が抱える課題、協働・変革・価値創出に必要な要素について、広く関心を持ち、「生活共創」に込めた思いや意義を共に考える。</p> <p>(オムニバス方式/14回)</p> <p>(4 吉永早苗/第1回) 生活共創学とは何か</p> <p>(20佐野潤子/第2回) 家政学の歴史と生活共創学の意義</p> <p>(22花田朋美/第3回) 衣の役割と持続可能性への考察</p> <p>(35伊藤有紀/第4回) 地域の食文化と持続的食生活</p> <p>(18小池孝子/第5回) 持続可能な住環境と地域づくり</p> <p>(26井上清美/第6回) 子育ての環境と持続可能な教育</p> <p>(23三澤朱美/第7回) 地域・社会との連携を通じた大学の学び</p> <p>(22花田朋美/第8回) 地域課題の発見と理解(ワークショップ含む)</p> <p>(22花田朋美/第9回) 地域課題の解決策の共創と提案(ワークショップ含む)</p> <p>(27岩本直樹/第10回) 地域・社会との連携(食と教育)</p> <p>(36佐々木麻紀子/第11回) 地域・社会との連携(ものづくり)</p> <p>(10柳瀬洋美/第12回) 地域・社会との連携(子育て支援)</p> <p>(28小川圭子/第13回) 地域・社会との連携(街づくり)</p> <p>(22花田朋美/第14回) 地域・社会での持続的な価値創造 学びのまとめと今後の展望</p>	オムニバス方式

授 業 科 目 の 概 要				
(生活共創学部こども教育学科)				
科目区分	授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容	備考
学部共通科目 生活科学	食科学概論	○	「食」は健康で心豊かな生活を送る上で、最も大切な生活の要素の一つである。一方、現代では、科学が食の世界に大きな影響を与えていて、食科学を基本から理解することが生活視点においても必要になってきている。この講義では、食科学の基礎的な知識として、食品成分の種類と保存調理加工による化学変化や物理変化、食品の栄養・嗜好性・健康機能性を学んだ後、食品の分析と食の安全や、培養肉や遺伝子編集食品などの新しいテクノロジーなどの現代的課題について学ぶ。また、クラス全体で各テーマについてディスカッションし、SDGsやQOLとの関連について考え、より良い生活に必要な食を科学的に考え判断・選択する力を養う。	
	住環境デザイン概論	○	住居は個人や家族の生活の拠点であり、人間生活を営むための最も基本的な場である。現代においても住居に関する様々な課題が存在している。この授業は、住居全般についての基礎的知識を習得することを目的に、個人・家族の生活の拠点である住居について、様々な角度から検討を行う講義科目である。人間にとって住まいとは何かを考え、人間らしい生活を送るための空間としての住居のあり方について検討するための基礎的知識を講義する。	
	被服学概論	○	被服に求められる機能は、社会・心理的快適性に関わる機能と、身体・生理的快適性に関わる機能とから成る。したがって、被服について学ぶには、被服材料学、被服管理学、被服衛生学、服飾デザイン、被服構成学、服装史等、多角的に学ぶことが必要となる。本講では、家庭、地域、社会、及び教育の現場で求められる知識や能力を身に付けることを目的として、被服領域全般における基礎的事項を概括的に学ぶ。さらに、現代そして今後の衣生活に求められている課題について考える力を育成する。 オムニバス方式（/14回） (22花田朋美/7回) 被服に要求される保健衛生的快適性に関わる機能について概説する。 (25富田弘美/7回) 被服に要求される社会心理的快適性に関わる機能について概説する。	オムニバス方式
	こども学概論	○	こども学の対象である「こども」とは何か。私たちは「こども」についてどのように考え、関わっていけばよいのか。ヒトの発達や人間社会における「こども期」の意味や価値、こどもと共に育つ保育・教育のあり方、おとなや社会の果たすべき責任と役割などについて問い、考えながら、基礎的かつ多面的な「こども理解」を促す。さらに、現代社会のこどもを取り巻く諸課題を現実の生活と関連して捉え、解明に向けて知識を深め、身近な生活の中で自ら実践する力の向上を目指す。	
	生活イノベーション概論	○	最先端の研究成果を私たちの生活に併せていくことによって、我々は、生活のイノベーションを思考・計画・実行していくことが可能である。本講義では、本学の教員によるオムニバスの講義を実施し、各教員の専門領域から生活をイノベーションしていくことについて学ぶ。また、最先端の研究成果を知ることで、自身がどのようにその研究成果を生活へ応用していくかを思考し、アイデアを共有し合うアクティブラーニングを実施する。 (オムニバス方式/全14回) (28小川圭子/第1回) 住環境の視点からイノベーションを考える (27岩本直樹/第2回) 食の視点からイノベーションを考える (28小川圭子、28岩本直樹/第3、4回) (共同) グループ・ディスカッション1、2 (1江田裕介/第5回) こども(特別)支援の視点からイノベーションを考える (24嶋田芳男/第6回) 福祉の視点からイノベーションを考える (1江田裕介、24嶋田芳男/第7、8回) (共同) グループ・ディスカッション3、4 (14松山直輝/第9回) 健康科学の視点からイノベーションを考える (4吉永早苗/第10回) 音・音楽の視点からイノベーションを考える (14松山直輝、4吉永早苗/第11、12回) (共同) グループ・ディスカッション5、6 (28小川圭子、27岩本直樹、1江田裕介、24嶋田芳男、14松山直輝、4吉永早苗/第13・14回) (共同) 生活者が生み出す身近なイノベーションをとりまとめ、グループ発表を行わせる。	オムニバス方式 一部共同 講義13時間 演習17時間

授 業 科 目 の 概 要				
(生活共創学部こども教育学科)				
科目区分	授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容	備考
学部共通科目	生活共創基礎	AI時代の生活科学	○	急速に進化するAI(人工知能)により私たちの生活はどう変わるのだろうか。AIに関わる研究者や実務家によるゲスト講師による講義を交え、そもそもAIとは何か、これまでの情報技術と何が違うのか、私たちの暮らしにどのような恩恵をもたらすのか、その一方でいかなる課題があるのかなどについて理解を深めた後、AIが生活を大きく変化させつつある事例を学び、AIを上手に活用することで私たちの生活をより良きものにするために何が必要かを共に考えてみたい。
		リーダーシップ基礎		リーダーシップは管理者や上位者だけに求められるものではなく、あらゆる組織、コミュニティ、地域社会など様々な場面において、立場を超えて必要とされる大切な要素である。このような考え方に基づき、リーダーシップとは何か、どうすればそれを身に付けることができるかについて、研究で生まれた理論と具体的な事例を通して、共に学び、考えてみたい。その際の重要なキーワードは「信頼」である。信頼があるからこそ、人はその人についていきたいと考える。そして、誰もがリーダーシップを発揮できる可能性を有している。これらのことを理解し、実践につなぐ学びの場としてこの授業を活かしてほしい。
		マーケティング基礎		マーケティングとは、顧客とのコミュニケーションを通して、顧客の真のニーズとは何かを理解し、顧客にとって価値あるモノやサービスを提供するための組織的な活動である。この考えは企業活動だけでなく、教育機関や医療機関、政治や行政など幅広い分野の活動において活かすことができる。経営学の分野でも日々進化・発展しつつあり、実務に役立つ学問の一つということができる。本授業の目的は、基礎的な理論と具体的な事例を学ぶことでマーケティングの本質を理解し、「顧客の視点に立ち、顧客に価値を提供する」という最も重要な考え方を身に付けることである。
		データサイエンス基礎(生活とデータ)		現代の生活において、人々の様々な行動がデータとして蓄積される時代にある。例えば、私たちがスマートフォンを持ち歩く事で、1日あたりの歩数や位置情報等のデータが日々スマートフォンに蓄積されている。また、このような一人一人のデータを収集したビックデータは、私たちの社会にイノベーションを起こすヒントとなり得る。本授業では、生活に対する個人データやビックデータを活用し、より良い暮らしについて考察していく。
		ロジカルシンキングとデザイン思考		私たちは生きていく上で日々様々な問題に直面する。個人だけでなく、組織や社会も多様な問題に直面し、その解決を求められる。「問題解決」は個人にとっても組織や社会にとっても大切な営みといえる。問題を解決することは新たな価値を創出することでもある。そのためには解決すべき問題を認識し、問題点を把握し、解決策を着想・検討・選択し、実行につなげることが必要である。本授業においては、そのための思考法としてロジカルシンキングとデザイン思考をとりあげ、問題解決のための考え方や基礎的な方法を学ぶ。
専門教育科目	ゼミナール	初年次ゼミA	○	学生が大学での学業と生活にスムーズに適応し、有意義に過ごすことができるよう、大学での学びのスタートアップを行う。大学という場、大学で学ぶということについて理解すると共に、学科を超えた少人数(20名程度)のゼミのなかで、大学での人間関係を構築する。また、各教員が指定するテキストを講読するなかでの双方向的・協働的な学習活動を通し、能動的で自律的・自立的な学習態度への転換を図る。なお、一部の授業回は共創プロジェクトゼミに合流して協働し、学年を超えて問題解決に取り組む。
		初年次ゼミB	○	15~20人の少人数で学生が教員を囲み、ある特定のテーマについてグループディスカッションやプレゼンテーションを通じて、理解を深めるとともにコミュニケーションスキルの向上を図る。協働して探究学習を行うなかで、ホスピタリティの意義と実践方法を学ぶ。また、将来の進路や目標について考える機会を提供する。
		共創プロジェクトゼミA	○	プロジェクトベースラーニング(PBL)を中心に据えたアプローチを用いて、学生は、教員と共に実際の問題解決に取り組む。チームで協力し、リアルな課題に対処しながら、自己指導力、チームワーク、コミュニケーション能力、プレゼンテーション力、プロジェクト管理スキルを向上させるなかで、「思考力・判断力・表現力」「主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度」を養う。なお、一部の授業回に参加する初年次ゼミの1年生と協働することを通し、共創3×3の力に繋げていく。
		共創プロジェクトゼミB	○	PBLの手法を活用して、学生が主体となり、地域社会の課題やニーズに対処し、持続可能な変革を促進するためのスキルを磨く。地域社会への貢献を通して、実践的な経験を積みながら、リーダーシップ、協働力、共感力、達成力、コミュニケーション力などの能力を高める。

授 業 科 目 の 概 要				
(生活共創学部こども教育学科)				
科目 区分	授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容	備考
専 門 基 礎 教 育 科 目	S T E A M 森を学ぶ・森から学ぶ	○	自然の中での様々な体験・遊びは、身体を通して五感に働きかけ、幼児・児童期のこどもの心身の豊かな成長を促す。本授業では、園や学校などの身近な自然を活用した自然体験活動を効果的にかつ安全に指導するための知識技術を修得することを目的とし、基本的な理論や個々のプログラムの運営方法、安全管理の考え方、キャンプカウンセラーなどの指導法を学ぶ。また、実際にこどもを対象とした指導を体験することを通じて、実践的な指導力を修得する。	
	音感受の世界	○	身のまわりのモノの音や人の声、音楽からその印象を感じ、共鳴し、感情が起り、さまざまな連想を引き起こしている「音感受」のプロセスを事例を通して解説する。音は、聴覚で感じるだけではない。体の諸感覚で、音を捉え、音と戯れ、音でつながるこどもの「音感受」の世界に学びながら、こどもの頃の感性に体験を通じ再会することで「いま、ここ」を実感する。その上で、音を介した感性のコミュニケーションと私たちの豊かなくらしとの関係について、具体的な事例を検討しながら考える。	
	ヴォーカルレッスン		歌唱スキルと音楽表現力の向上をサポートする授業である。まず、コミュニケーションにおける「声」の存在に着目し、感情と音声表現の関係について考える。また、自分の声の個性を知り、それを活かした発声法を学ぶことを通じて、歌唱力の向上を目指す。さらに、こどもに親しまれている曲を、ピアノ伴奏を弾きながら歌う活動を通じ、保育者や小学校教諭に求められる音楽的知識や技能の基礎を身に付けると共に、自らの感性や表現力を豊かにしていく。	共同
	ものづくりと教育	○	(概要)「ものづくり」は私たちの生活、社会を形作り、そしてより良い生活を営むために欠かせないものである。「ものづくり」の理念を学び、「ものづくり」が教育・保育の営みをどのように豊かなものになっているのか、実践を通して理解を深める。 (オムニバス方式/全7回) (12末松加奈/3回)遊びや学びを充実させるための「ものづくり」を学ぶ。 (33澤田雅彦/2回) 学習環境を充実させるための「ものづくり」を学ぶ。 (1江田裕介/2回)こども一人一人が充実した学びを実現するための「ものづくり」を学ぶ。	オムニバス方式
	ヴィジュアルコミュニケーション	○	こどもが身近な造形文化に親しみ、美しい生活や社会をつくる感性と態度を育む意味について、基礎的な造形活動を通して考える。こどもの造形活動に立ち合うための基礎的な知識・基本的な技能を身に付けるとともに、形や色を言葉のように使い伝え合う「ヴィジュアル・コミュニケーションの価値や喜び」を体験的に理解する。特に、多様な素材の特徴や可能性、材料・用具の適切な扱い方を確かめながら題材活動の要件を探る考察を基に、こどもの造形表現と社会的な芸術との関係づくり、地域の特色ある素材や伝統技法の導入、身体感覚に根ざす造形プロセスの認識、身近な生活や遊びと表現を結ぶ「場の設定」などの視点を生かす資質・能力を培う。	
	数学トピックス	○	身の回りにはたくさんの「不思議」がある。A4サイズの紙の縦と横の長さの関係、パソコンの中身で行われている処理、複利の借金の怖さ、GPSの仕組み、規則性をもつ幾何模様、神社に奉納されている数学の問題の存在、ドレミファソラシドの起源、オンラインショッピングのレコメンド機能、囚人のジレンマなどである。高校まで学んだ数学を有機的に結合させることで「身の回りの不思議」のいくつかを解決することができる。トピック的に取り上げて、「先人たちのアイデアや知恵」や「数学のおもしろさ」を体験的に味わいながら、数学と実社会との関連について理解を深め、数学を主体的に生活や学習に生かす資質・能力を培う。	
保 育 の 本 質 と 目 的	保育原理	○	(概要) 保育の基本的概念、理念について理解する。さらにその理念に至るまでの国内外の保育の思想について、どのような歴史的変遷があったかを学ぶ。保育の環境、内容、方法や形態、計画や記録などについて学ぶ。現代の多様な保育ニーズやこれからの保育課題についても理解する。 (オムニバス方式/全14回) (5和田美香/7回) 主に海外の保育思想や保育の内容、記録について講義する。 (12末松加奈/7回) 主に国内の保育思想や保育の方法について講義する。	オムニバス方式
	児童福祉論		すべて児童は等しくその生活が保障され、愛護されるべきという児童福祉法の理念と意義を理解する。家庭内の問題・子どもの発達上の問題・生活上の問題など多様な問題から家庭で暮らすことができない児童への施設サービス(児童養護施設、乳児院、母子生活支援施設等)や障害児に対する在宅・施設サービスへの理解を深める。また、すべての児童が健全な発達をするために実施されている子育て支援サービスや、少子化や児童虐待といった課題に対応するための施策について学習する。	

授 業 科 目 の 概 要					
(生活共創学部こども教育学科)					
科目区分	授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容	備考	
専門教育科目	保育の本質と目的	社会福祉	○	社会福祉は、従来のような限定された福祉から普遍化された福祉へと変化し、とくにその傾向は高齢者福祉領域において顕著となっている。また、近年では高齢者福祉領域において、他の多くの分野との連携の必要性が強調されている状況でもある。このため、授業では、社会福祉全般の制度概要とそれら制度の近年の動向および課題を提示することで、基礎的知識を習得するとともに、今後の社会福祉のあり方についても考えていく機会を提供していく。	
		社会的養護Ⅰ		社会的養護について、原理、理論、援助方法、課題などの視点から総合的に教示する。特に施設養護に注目し、児童福祉施設における支援の実践例を通して、子どもの育ちとケアの方法について理解を深める。さらに児童虐待の問題など現代社会における子どもを取り巻く養護の諸問題に対して保育士としてできることを考える。	
		発達心理学	○	人は生涯を通じて発達の過程に変化していく。その発達の過程を、特に心的活動の変化に焦点を当てて学習する。まず、発達心理学の考え方や研究法の基本、発達の諸理論を学ぶ。その上で、胎児期から老年期に至るまでの各時期の発達課題や発達の特徴について、具体的事例や視聴覚教材も参照しながら基本的知識を身に付ける。人の発達に関する知見を、保育・教育実践に結び付けることができるよう、事例や自分自身の体験とも関連させながら具体的に理解し、考えを深める。	
	保育の内容と方法	こどもの理解と援助	○	保育者の専門性として、一人ひとりの子どもの内面を理解し、信頼関係を築き、発達に必要な経験を子ども自ら獲得しているような援助が求められる。この授業では、こども理解が保育・幼児教育のあらゆる営みの基本となることを理解し、幼稚園、子ども園、保育所における乳幼児の生活や遊びの実態に即して、乳幼児の発達及びその過程で生じるつまずき、その要因を把握するための原理を理解し、援助の方法を考える。	
		乳児保育Ⅰ	○	乳児保育の意義・目的と歴史の変遷及び役割等について理解するとともに、保育所、乳児院等多様な保育の場における乳児保育の現状と課題について理解する。3歳未満児の発育・発達を踏まえた保育の内容と運営体制について理解するとともに、乳児保育における職員間の連携・協働及び保護者や地域の関係機関との連携について理解し、豊かな保育内容を探求するための基盤づくりをする。	
		乳児保育Ⅱ	○	乳児保育の基本的な理論を、具体的な体験をしながら、その実際について理解する。子どもの発育発達を踏まえた生活と遊び、保育の方法と環境について、園児学やグループワークなどを取り入れながら、実践的に理解していく。最終的には、保育の計画についても子どもの姿をイメージしながら作成できるようにする。その際、環境構成や乳児保育における配慮の実際について、具体的に理解できるようにする。	
		児童文化		わが国独自の概念として成立した児童文化について、時代と共に変化する児童文化の歴史をたどり、その重要性を問直す。そして、子どもとおとなが共に作り、共に遊び、共に楽しみ、伝え合っていく文化を創造するにはどうしたらよいかを考える。具体的には、児童文化の歩み、子どもの遊び・遊具・玩具、子どもと表現活動・造る・描く、子どもと文学・絵本、現代の子どもの生活と文化、児童文化を支え・育む活動について考察する。	
		こどもと健康		子どもの心身の健康を守り育て、生涯にわたって健康に過ごすための基本的な習慣や態度を養うことは、保育者の重要な役割の一つである。本科目は、領域「健康」（健康な心と体を育て、自ら健康で安全な生活をつくり出す力を養う）のねらいと内容について解説し、その実践に必要な知識・技能を学ぶ。講義に加え、グループワーク、グループ発表などの主体的な学修を通して、「健康」の概念、乳幼児期の子どもの健康課題や心身の発育発達、生活習慣や食習慣の形成、運動技能の発達や遊びの理論を学ぶ。	
		こどもと人間関係		幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領に示された領域「人間関係」のねらい及び内容について学び、理解を深める。現代の乳幼児を取り巻く人間関係をめぐる課題を理解し、幼児教育に求められる教育内容について理解する。乳幼児期の人と関わる力は、大人や仲間など他者との関係や集団における経験の中で育つことを理解し、保育者としての援助に関する基礎的な知識・技術を知る。	
		こどもと環境		子どもを取り巻く環境は、保育者、保護者、友達等の人的環境及び玩具等の物的環境、自然環境や社会環境等子どもを取り巻くすべてが相互に関連しながら構成されている。子どもを取り巻く環境の現状を踏まえ、幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領に示す領域「環境」及び乳児保育における三つの視点に示すねらい及び内容、内容の取扱いについての理解を深める。また、その指導のもととなる環境に対する感性を養い、必要な知識・技能を身に付ける。	

授 業 科 目 の 概 要					
(生活共創学部こども教育学科)					
科目 区分	授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容	備考	
専 門 教 育 科 目	専 門 基 礎	保 育 の 内 容 と 方 法	こどもと言葉	領域「言葉」の基礎となる考え方を理解し、「言葉のもつ意義と機能」「言葉の感覚を豊かにする実践」「児童文化財の活用」の視点から、どのようにしたら乳幼児が豊かな言葉や表現を育むことができるかを考える。具体的な事例を通して、実践的にイメージしながら理解する。	
			こどもと表現	子どもの素朴な表現の姿、乳幼児の感性やイメージ、創造性の育ちについて学び、それらの発達の基盤となる保育者のかかわりや援助、環境構成のあり方についての理解を深める。保育者には、子どもの姿・行為を「表現」としてとらえ、受け止め、共感し、応答する「感性」が求められること、また、保育者自身の感性や表現の豊かさが子どもの感性と表現を支える「環境」となることをふまえ、様々な表現を感じる・みる・聴く・つくる・楽しむ体験を通し、自らの感性を磨き、表現力・創造性を養う。	共同
	教 育 課 程 と 教 科 指 導	国語科研究（書写を含む）		「言葉による見方・考え方を働かせ、言語活動を通して国語で正確に理解し適切に表現する資質・能力を育成する」という小学校国語科の教科目標をふまえ、「知識及び技能」と「思考力・判断力・表現力」の各指導事項で整理された内容を基に、国語科学習の特色と意義について理解を深める。特に、「語彙指導」「情報の扱い方」「我が国の言語文化」に係る「知識・技能」、「話すことと聞くこと、書くこと、読むこと」の言語活動を通して育む「考えの形成」、我が国の言語文化」として示される書写や読書及び漢字指導の充実など、改善・重視される学習内容の取扱いを検討する。それにより、実社会や実生活との関わりを重視した学習課題を明確に言語活動の中に位置付けたい国語科の指導観を身に付ける。	
		社会科研究		小学校社会科が目指す「公民的資質・能力の育成」の目標の趣旨及び「地域や我が国の国土の地理的環境」「現代社会の仕組みや働き」「地域や我が国の歴史や伝統と文化を通した社会生活の理解」などに区分される内容領域について理解を深める。児童が、社会的現象の意味や相互の関連を多角的に考え、社会に見られる課題を主体的に解決しようとする「社会的な見方・考え方」を働かせながら、社会への関わり方を選択・判断する力を育む学習や指導の実践事例や育てたい児童の姿を検討し、よりよい社会の構成者としての人格を育む学習の価値観や指導観を形成する。	
		算数科研究		「知識及び技能」、「思考力・判断力・表現力」、「学びに向かう力・人間性」の三つの柱に基づいた「数学的な見方・考え方を働かせ、数学的活動を通して、数学的に考える資質・能力を育成する」という小学校算数科の目標をふまえ、「数と計算」「図形」「測定」「変化と関係」「データの活用」および「数学的活動」の教科内容の背景にある専門的な知識および技能を身に付ける。具体的には、学びの連続性の観点から小学校から高校までに学習する算数・数学のカリキュラムの系統性を理解し、教材研究を行うことで、教師に必要とされる教材観や指導観を形成する。また、就学前後の連携・接続の観点から、インフォーマル算数についても考える。	
		理科研究		自然に親しみ、自然の事物・現象について見出した問題を観察や実験などの手続きを通して解決する科学的な見方・考え方を育む小学校理科の目標と内容、学習活動の構成について学ぶ。知識を科学的な問題解決に生かす「理科の見方・考え方」を働かせ、自然を愛する心情を育む教科の特性を理解するとともに、教材研究や指導計画、教材・教具についての基本的な知識と基本的な技能を身に付ける。児童の発達段階に即した課題解決学習について理解を深めるとともに、各分野における観察・実験等安全指導を含めた内容の取扱いについて体験的に理解する。	
生活科研究		小学校教育課程の生活科で取り扱われている基本的事項について理解を深める。身近な生活に関する見方・考え方を生かし、自立し、生活を豊かにしていく資質・能力を育成することを目標とした生活科教育の特性を理解し、幼保小の接続のあり方、「総合的な学習の時間」への接続を視野に入れた学び。そのため、可能な限り、学内や学外での踏査を通じた演習を取り入れ、体験を通して小学校低学年の児童を対象とした生活科教育に役立つ知識、概念、技能を修得する。			

授 業 科 目 の 概 要				
(生活共創学部こども教育学科)				
科目区分	授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容	備考
専門 教育 科目	専 門 基 礎 教 育 課 程 と 教 科 指 導	音楽科研究	(概要) 学習指導要領にある「音楽的な見方・考え方」と教科で身に付けさせる資質・能力について、体験を通して学ぶ。各学年における音楽教材の表現や鑑賞、音楽づくりを経験することを通し、学習指導要領の内容を理解し、小学校音楽教育の意義を考える。学生自身が音楽表現を楽しみ、より音楽的な表現を追求するなかで感性を磨き、音楽を通して協働することを経験すると共に、児童への指導方法について考える。 (オムニバス方式／全14回) (4吉永早苗／7回) 学習指導要領の内容を読み解くことを通し、小学校音楽科の目的について考える。ボイスアンサンブルやボディーパーカッション、図形楽譜の表現と演奏など、協働して音を音楽につくりかえていくプロセスのなかで、自身の音楽的感性・表現力を育むと共に「音楽的な見方・考え方」を理解していく。 (68塚本 恭子／7回) 小学校音楽科の教材をとりあげ、リコーダーや鍵盤ハーモニカの合奏、音楽づくり、合唱や指揮等の基礎的技術の習得を目指す。また、具体的な音楽の授業を視聴したり事例を学ぶなかで、児童の音楽的発達を理解、具体的な指導の方法、特別支援教育における音楽活動の意義などを考える。	オムニバス方式
		図画工作科研究	小学校図画工作科の特性を理解し、学習指導要領の目標と内容について学ぶ。A表現「造形遊びをする活動」、「絵や立体・工作に表す活動」、B鑑賞の領域における「造形的な見方・考え方・感じ方」を働かせ、身近な生活にある造形文化のよさや美しさを味わう力を育む造形活動の意味や価値について考察する。「形や色、イメージ」など、造形的な特徴に着目する美的な感性や心身の発達や地域の実態に応じた「内容の取り扱い」に関する基礎的な知識と基本的な技能を身に付け、ICT教材やビジュアル・コミュニケーションツールを含む材料や用具を活用する実践指導力を高めていく。	
		家庭科研究	家族・家庭、衣食住、消費や環境等について科学的な理解を図り、身近な生活問題を解決したり工夫したりする見方・考え方を育む小学校家庭科の目標と内容について学ぶとともに、実際の指導内容や教科特性について歴史的な側面を踏まえて理解する。学習指導要領や実践事例等を通して家庭科教育の現状を理解し、これからの家庭科教育の在り方等についても視野に入れながら考える。特に、①家庭科教育の変遷と今日的意義、②小学校家庭科における目標と内容、③家庭科における教材研究と授業展開、④家庭科教育における評価基準の活用等について、理論と実践を結びつけて理解を深める。	
		体育科研究	体育や保健の見方・考え方を働かせ、心と体を一体的に捉える学習を通して、生涯にわたってスポーツライフを営む資質・能力を育む小学校体育科の教科特性について考え、心身の成長と発達に応じた体育科学習の「目標と内容」について学ぶ。特に、様々な特性に応じた各種の運動の行い方、身近な生活における健康や安全に関する理解、基本的な運動の技能に関する知識・技能を身に付けながらスポーツに親しみ、健康や体力の向上を目指す主体的な生活態度を育てる体育科学習の役割について理解を深め、実践事例の体験などを通じて教科の指導観を形成する。	
		外国語科研究	社会や世界との関わりの中で物事を捉えたり、外国語やその背景にある文化を理解して場面に応じてコミュニケーションを行う見方・考え方を育む小学校中学年における外国語活動の目標や内容、教材活動や場面設定の特徴等について学ぶ。外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ、「聞くこと・話すこと・読むこと・書くこと」の活動を通して情報を整理したり、多様な人々と対話したりする力を育む外国語科の学習に期待される役割と特徴、指導の実践、多様な活動事例や内容の取扱いについて理解を深める。	
		教育 の 理 念 と 方 法	教育原理	○
教育心理学			発達段階に即応した教育を行うために必要な教育心理学の基礎的事項を学ぶことを目的とする。取り上げる主な内容は、子どもの発達を理解するために必要な基礎的概念、学習を理解するための基礎的概念、クラス集団を理解し指導する方法、教育的指導の理論と実際の方法、発達障害児を理解し指導するための基礎的概念、及び教育評価の理論と実際等である。できる限り具体的な事例を提示し、視覚的方法を使用したり、課題への解答を求めたりするなど、積極的な関与と深い理解が得られることを目指す。	

授 業 科 目 の 概 要				
(生活共創学部こども教育学科)				
科目区分	授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容	備考
専門基礎 教育科目	教育の理念と方法		(概要) ICT (情報通信技術) を活用した教育の在り方について、社会的な背景を踏まえ、その意義や理論への理解を深める。また、保育・教育現場におけるICT活用の実際を、遊びや学習指導、園務・校務の推進、ICT環境の整備、情報モラルの育成といった観点から学ぶ。 (オムニバス方式/全14回) (12末松加奈/12回) 主に、ICT活用の意義や社会的背景、そして保育・教育現場におけるICT活用の実際を、遊びや学習指導、園務・校務や整備、情報モラルの育成について学ぶ。 (13原田晋吾/2回) 主に、特別支援教育におけるICT活用について学ぶ。	オムニバス方式
	ICT活用の理論と実践	○	(概要) 教師・保育者の仕事について具体的に学ぶ。 (オムニバス方式/全14回) (6齋藤義雄/全7回) 教師の指導観の基本的な基本は、「子どものためになるかどうか」である。優れた教師の実践を振り返り、教職とは何か、教職の意義とは何かを学び、理想の教師像を議論する。教師の1日や1年の仕事の具体的な内容について、教師の仕事の実態を理解させたい。反省的実践家としての教師は、日々の授業を振り返り、常に改善を図っている。職場において、若手の教師が抱える悩みや不安についてアクティブラーニングを通して、理解を深めたり改善策を考えたりして、教育実習や教職への意欲の向上を図る。 (2新開よしみ/全7回) 専門職としての保育者の制度的位置付けとその特徴、職業倫理等を踏まえ、様々な視点から保育者の役割・専門性について具体的に検討する。また、実習や保育経験を通して学び続け、成長していく保育者のキャリア形成について、自己の将来像と結びつけながら考える。	オムニバス方式
特別支援教育の基礎と応用	教師・保育者論	○	様々な障害に関する基本的な知識を学び、障害の多様性を知る。また、障害のある人における教育や生活上の困難について主体的に考える。さらに、障害のある人とない人が共に生きる社会を築く上で重要となる考え方や合理的配慮について考える。授業全体を通して、自身の障害者観を差別や偏見の観点から見直すことを目標とする。	
	障害の基礎的理解	○	全ての保育所、幼稚園、学校において実施されている特別支援教育について概説する。保育所、幼稚園、小学校等に在籍する発達障害児等も含めて、一人一人の障害の特性や状況、学習や生活上の課題に応じた適切な指導や必要な配慮について学ぶ。インクルーシブ教育、合理的配慮と基礎的環境整備、ICFによる障害の捉え方、小学校特別支援学級・通級による指導・特別支援学校における教育課程編成、カリキュラム・マネジメント、主体的・対話的で深い学びに向けた授業改善、障害種別に応じた指導内容・方法、学習指導案作成について理解を深める。	
	特別支援教育総論		(概要) 知的障害の要因となる病理面 (遺伝的要因や外傷等) や、併存症・合併症 (てんかん、発達障害等) について、ダウン症の発生要因や自閉スペクトラム症との併存例などを取り上げて学習する。また、言語、視覚、記憶、コミュニケーション、運動等の心理面及び、生体の機能的側面から知的障害の特徴を理解し、それらを把握する方法を知るとともに、家庭、学校、社会の生活のなかで適応行動に困難さを示す知的障害者に対して、家庭や医療機関と連携しながら支援を行うことの重要性について学ぶ。 (オムニバス方式/全14回) (13原田晋吾/全10回担当) 知的障害の定義、発生要因、心理的・生理的特徴について講義する。 (41飯野 彰人/全4回) 知的障害の病理面、発達障害との併存/家庭や医療機関との連携について講義する。	オムニバス方式
	知的障害者の心理・生理・病理		特別支援学校学習指導要領に基づき、知的障害特別支援学校の教育課程編成を中心に教育課程編成・実施・評価・改善について概説する。知的障害の障害特性や学習・生活上の状況、教育課程編成とカリキュラム・マネジメント及び学校評価、小学部各教科の3段階ごとの目標と内容及び指導法、自立活動の指導、個別的教育支援計画や個別の指導計画の作成・活用、年間指導計画、週時程、学習指導案の作成についてエピソードを通して学び、教育課程編成や授業について理解を深める。	
	特別支援学校教育課程論		視覚機能の基本的事項について学ぶとともに、盲や弱視といった視覚障害が発達の諸側面に及ぼす影響について理解する。また、視覚障害者における学習及び生活上の困難と支援の方法について知る。困難さの理解については、定位と運動並びに環境の把握に焦点化した疑似体験を行い、感じたことを整理することで理解を深める。さらに、学校教育における教材の工夫や教育課程の特徴について、具体例をもとに理解する。	
視覚障害の理解と支援				

授 業 科 目 の 概 要				
(生活共創学部こども教育学科)				
科目区分	授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容	備考
専門基礎 教育科目	特別支援教育の基礎と応用 聴覚障害の理解と支援		聴覚障害とはどのような障害かという点について、聞こえの状態、発達上の特徴や課題について学ぶと共に、特別支援学校（聾学校）や特別支援学級（聴覚学級）、通級指導教室（聞こえの教室）といった各教育機関の役割や教育・指導上の特徴について講義を通じて学習する。また、学習指導要領の内容を踏まえ、自立活動および教科指導の側面を中心に教育・指導の理念や方法を巡る今日的課題について学習する。	
	発達障害の理解と支援	○	学習障害、注意欠陥多動性障害、自閉スペクトラム症の特性や状態を学び、障害の程度や状態及び発達段階に応じた指導や支援方法について理解する。幼稚園・小学校（通常の学級・通級による指導・特別支援学級）・特別支援学校における指導事例を取り上げ、障害が及ぼす学習面・行動面・コミュニケーション面への影響や二次障害について理解し、自立活動の視点を取り入れた具体的な指導や支援の方法を学ぶ。また、特別支援教育コーディネータを中心とした校内支援、保護者・地域関係機関との連携について、発達障害等のある幼児児童やその家族に対する支援の在り方について考える。	
専門発展	保育・教育実習 こども教育インターンシップ	○	こどもに関する職業の一部を実際の現場で経験することにより、将来の職業選択・キャリア形成に資する力を育成する。こどもや保護者との対話や、専門職員の業務補助を中心とした協働を通して、こどもに関する地域の課題に気づき、知識と経験を融合させながら課題解決の方法について考える。インターンシップ先は、幼稚園、小学校、特別支援学校、児童福祉施設その他、自治体、企業、非営利団体等が行う活動の場も含むものとし、興味や専門領域に合わせて選択することができる。こどもの視点から社会を捉え、共感し寄り添う力を高めると共に、社会参加や新しい環境での挑戦を通じて自信を高め、最後までやり遂げる力を育成する。インターンシップ先の決定や事後の振り返りに関しては、各領域を専門とする教員のもとで進める。	共同
	STEM こどもとアート	○	こどもの心身の発達に伴う造形表現の変容をふまえ、表現指導の内容と方法について体験的に学ぶ。「身近な生活や遊び」「親しみやすい自然や場所」から「表したいこと」を見付ける題材、「形や色」を言葉のように用いて「表したり伝えたりする喜び」を味わう活動、子どもの「感覚や感性」が生きて働く環境づくり、共感的で形成的な言葉掛けなど、めあてと課題を明確にした実践事例を体験しながら理解を深める。また、多様な造形表現の体験を通して、素材の多面的特徴や出会い方、子どもの表現に適した「材料と用具」に関する基礎的な知識・技能を身に付け、今日的な教育課題に向かう指導者に求められる指導観と実践力を身に付ける。	
専門発展	ピアノのテクニック		ピアノは、鍵盤を押せば音が出る。しかし、どのように弾くかによってその音色は大きく異なり、個性や音楽性が明確に現れる。本授業では、ピアノの音の出る仕組みを理解し、音の響きを意識して演奏する技術を習得する。その上で、保育実践や小学校音楽科において、こどもとともに音楽表現を楽しむための応用力を身に付ける。	共同
	人工知能と教育		人工知能（AI）の進化が教育にもたらす変化に焦点を当て、AIを教育に活用する方法や倫理的問題について学ぶ具体的なトピックとして、個に応じてカスタマイズされた教科学習におけるAI利用、教育コンテンツの個別最適化、AIによる教師の業務改善の他、プライバシー保護や、情報バイアスの問題等を取り扱う。さらに、AIの教育領域への役割や潜在的な展望について議論し、倫理的観点からAIを評価し、教育分野における可能性を探るスキルを養う。	
	科学する心	○	科学とは何か、科学と私たちはどのように向き合うべきかということ、NOS (Nature of Science: 科学の本質) の観点から学び、理解を深める。また、幼児期から学童期にかけての遊びと学びの中で、こども達がどのように「科学」しているのか事例等を検討し、科学の本質を見る目を養う。実際に、自ら「科学」することにより、科学の本質への理解を深める。	
専門発展	保育の本質と目的 こども家庭支援論	○	(概要) 現代において社会的な子育て支援が必要となった背景、子育て家庭を取りまく社会状況、子育て支援体制の現状をふまえ、保育の場における子ども家庭支援の基本について学ぶ。 (オムニバス方式/全7回) (2新開よしみ/7回) 保育者による日常的な支援のあり方、関係機関との連携の実態等について、事例を通して考えていく。 (37赤沼 未佳/7回) 障害のある子どもをもつ家庭が子どもの成長とともに直面する生活課題とその支援のあり方について具体的に学ぶ。	オムニバス方式

授 業 科 目 の 概 要					
(生活共創学部こども教育学科)					
科目 区分	授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容	備考	
専門 教育 科目	保育の本質と目的	保育方法論	○ 従来の保育思想を基本に踏まえながら、現代社会とのかかわりの中で改めて保育理論を構造的に解明し、保育方法の内容を検討し、保育実践を整理・再考する。乳幼児が主体的、自発的に遊び、活動する中で、価値のある学びが生まれ、心身のすこやかな成長と発達が助成される。そのような環境を構成し、価値のある取り組みができるように援助する方法を研究する。幼稚園・保育所における保育の計画や指導方法、ならびに幼稚園教諭・保育士としての役割について学習する。		
		こころの臨床	人は生きていく上で、苦しみや哀しみと無縁ではられない。時には「何がつらく苦しいのか」「何に困っているのか」すら分からないほど困難な状態に陥ってしまう場合もある。本授業では、現代を生きる私たちのこころを巡る諸問題を事例として取り上げながら、基本的なカウンセリングの理論・技法と実践を学び、自己理解と他者理解を深めていく。また、私たちが困難に遭遇した時、問題解決に向けて必要となる「自分自身と向き合う」「自分自身を理解し、受けとめる」ための基礎的な力を演習を通して養っていく。これらの学びを通し、自分に寄り添ってくれる人(援助者・支援者)の存在の大きさを感じ、自分自身も子どもや家族に寄り添うことのできる人となれるような力を養う。		
	保育の内容と方法	こども家庭支援の心理学	○ 生涯発達に関する心理学の基礎的な知識を習得し、初期経験の重要性、発達課題について理解する。また、家族・家庭の意義や機能を理解するとともに、親子関係や家族関係等について発達の観点から理解し、子どもとその家庭を包括的に捉える視点を習得する。その他、子育て家庭を巡る現代の社会的状況と課題について理解し、子どもの精神保健とその課題について理解する。		
		こどもの保健	保育は子どもの命を守り、子どもの健やかな育ちを支えることにある。子どもの身体的な発達・発達と保健について理解するために、具体的な心身の健康状態の把握の方法や疾病とその予防法を具体的に学びことにより、保健的支援を考えることを目標とする。		
		こどもの食と栄養	小児の健全な発達には、適切な栄養摂取と正しい食生活が不可欠である。この趣旨にしたがって、講義と実習・演習を通じて小児期の正しい食生活について学ぶ。小児期の栄養の過誤は、容易に疾病異常の発生につながる。また、食生活は、心の健全な発達とも密接な関係がある。食品の基礎知識として栄養素と体内作用、食品の種類と成分、健康な食生活における食事のとり方を学ぶ。特に乳児期、幼児期、学童期、思春期の発達段階に応じた栄養と食物摂取に伴う方法、栄養的な問題とその対応について検討する。さらに児童福祉施設における給食、栄養教育について習得する。		
		保育の計画と評価	○ (概要)保育所及び幼稚園型認定こども園における指導計画及び全体的な計画の意義とその種類と役割を理解しつつ、保育内容の充実に資する計画と評価の在り方を具体的に学ぶ。乳幼児の育ちを支えるための記録・計画・実践の関連性について理解しながら、よりよい保育のあり方を探ることが目的である。具体的な事例を通じた演習や計画の作成を行うが、これらは3年次より開始する実習と関連する授業であることを踏まえて受講されたい。 (オムニバス方式/全14回) (5和田美香/7回) 主に0～2歳児を対象とした記録や計画について講義する。 (3中田範子/7回) 主に3～5歳児を対象とした記録や計画について講義する。	オムニバス方式	
	保育内容総論	○ (概要)幼稚園教育要領や保育所保育指針、幼稚園型認定こども園教育・保育要領が示す内容を踏まえ、乳幼児期の発達を理解しながら、保育現場で展開されている保育の内容について総体的に学ぶ。また、わが国の保育の基本である「一人ひとりの特性に応じた援助」、「環境を通じた教育」、「遊びを通じた総合的な指導」について、具体的な事例を持ち寄り、討議を通して理解を深める。 (オムニバス方式/全14回) (5和田美香/全7回) 主に3歳未満児の保育内容に関するねらい、内容、内容の取扱いについて理解を深める。各領域の捉え方を理解し、さらにそれらは各領域の間で相互に関連を持ちながら総合的に展開するものであることを理解する。 (3中田範子/全7回) 主に3～5歳児の発達段階に応じた、ねらい、内容、内容の取扱いについて理解を深める。さらに、保育の計画と実践に関する今日的課題を視点にもちながら、保育の計画と指導法のあり方について演習を通して理解を深める。	オムニバス方式		

授 業 科 目 の 概 要					
(生活共創学部こども教育学科)					
科目 区分	授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容	備考	
専 門 教 育 科 目	保 育 の 内 容 と 方 法	健康の指導法	○ (概要) 領域「健康」のねらいと内容及び内容の取り扱いについて理解し、健康な心と体を育て、自ら健康で安全な生活を作り出す力を養うために必要な知識・技術を身に付ける。特に運動発達とそれを促す運動遊びについて理解を深め、実際の体験と模擬指導を通じて実践的な指導力を身に付ける。 (オムニバス方式/全14回) (11佐藤冬果/2回) 領域「健康」のねらいと内容、および内容の取り扱いなど、領域「健康」に関する基礎的な講義を担当する。 (72中島 悠介/12回) 運動遊びが心身に与える影響を体験から学ぶための演習を担当する。また、運動遊びの模擬授業に向けた計画およびその運営を担当する。	オムニバス方式	
		人間関係の指導法	○ 幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領に示された領域「人間関係」のねらい及び内容について、幼児の姿と保育実践とを関連させて理解を深める。その上で、幼児の発達にふさわしい主体的・対話的で深い学びを実現する保育を具体的に構想し、実践する方法を身に付ける。事例や映像を教材として用い、グループディスカッション、事例検討を通して学びを深める。		
		環境の指導法	○ 乳幼児の発達の特性や環境を通じた教育の重要性を踏まえた、領域「環境」のねらい、内容、内容の取扱いに応じた指導法を修得する。乳幼児が様々な環境(人的環境・物的環境・社会環境・自然環境など)と出会い、感じ取り、関わることが深い学びへとつながる。このような乳幼児の発達の特性や園生活における「環境を通じた教育・保育」の重要性を踏まえた保育内容を考案し、屋外や室内での演習やグループワークを通して、理解を深める。		
		言葉の指導法	○ 「言葉」のねらいと内容及び内容の取り扱いについて理解する。さらに領域言葉の側面から、育みたい資質能力を具体的に理解する。乳幼児の発達に合わせた支援の方法を身に付ける。その際、主体的・対話的で深い学びが実現するよう心掛ける。保育の計画、指導、実践、振り返りの流れを理解し、実践力を高める。		
		表現の指導法	○ 乳幼児期に育みたい資質・能力を理解し、領域「表現」のねらい・内容について、具体的な子どもの姿と関連させながら理解を深める。具体的には、子どもが興味・関心をもって主体的に取り組み、楽しみながら展開していく表現活動のプロセスとは具体的にどのようなものを検討し、乳幼児の発達や実態に即した保育内容の展開や指導法について考究する。また、模擬保育やそのふりかえりを通して、さまざまな表現活動を構想、計画、指導、実践する力を身に付ける。	共同	
		小児保健演習		こどもの保健において小児の心身を事故や疾患から守り、健全に発育させるための知識を習得した上で行う演習である。保育の現場で保育士として、小児の保健衛生に関する事が実践できるようにする。健康や清潔を維持するための養育技術の方法と実技・事故防止の方法を学ぶ。乳幼児保育者の中心課題たる子どもの安全と身体の変調に対して、的確な状況判断と対応ができるようにする。疾病の早期発見は早期治療に結びつき、また、事故の場合も適切な応急処置によって、傷害を最小限に食い止められることもあり、最初にとられた応急処置の良否が重要な意味を持つ。故に保健の知識をもとに養育技術や救急処置の指導と訓練を行う。	
		障害児保育		障害児保育を支える理念や歴史の変遷について学び、障害児及びその保育について理解する。その上で、個々の特性や心身の発達等に応じた援助や配慮について具体的に考える。障害のある子どもの地域社会への参加・包容(インクルージョン)及び合理的配慮についても学ぶ。さらに障害児その他の特別な配慮を要する子どもの保育における計画の作成や援助の具体的な方法について理解する。その際、障害児その他の特別な配慮を要する子どもの家庭への支援や関係機関との連携・協働についても理解を深めていく。後半では、小学校との連携、自治体や関係機関との連携についても具体的な事例と共に理解する。	

授 業 科 目 の 概 要					
(生活共創学部こども教育学科)					
科目 区分	授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容	備考	
専 門 教 育 科 目	専 門 発 展 保 育 の 内 容 と 方 法		(概要) 社会的養護を必要とする子どもの状況、生活、治療、自立に向けた様々な支援内容・方法の理解、施設養護や家庭養護の実際、個別支援計画の作成と記録及び自己評価、保育や相談援助に関する実践的な専門的技術の修得、虐待等の防止と対応、今後の社会的養護の課題と展望について実践的な理解を深める。 (オムニバス方式/全14回) (1江田裕介/7回) 社会的養護と人権との関係を学ぶ。特に児童の権利とその擁護について、一時保護所、児童福祉施設、里親家庭等の支援の在り方を、①生きる権利、②守られる権利、③育つ権利、④参加する権利の4つの観点から論考する。あわせてソーシャルワークの種類とプロセスを学び、個別支援計画の作成を通じてケースワークの実践力を高める。 (87横井 義広/7回) 乳児院や児童養護施設、児童心理施設等の福祉養護と、里親や母子生活支援施設等の制度、さらに家族支援の実際を学び、その問題の社会的な背景と時代的な変遷について考察する。またネグレクトや虐待の経過で生じる児童の心的外傷や、DVが母子に及ぼすストレスの影響を理解し、その支援と予防の在り方を検討する。あわせて施設職員や施設運営における現状と課題を論ずる。	オムニバス方式	
		社会的養護Ⅱ		(概要) 保育者として、保護者や地域の子育て力を高めることが社会的に求められている。そのため、保育者は専門職として、保護者・家族支援の中核となる子育て支援の意義と必要性について理解を深め、子育ての方法を保護者に伝え、子どもの育ちを共に育つことができるように、講義・演習を通して理論と技術を修得する。事例分析、ロールプレイなどによるグループワーク演習を通して、保育者に必要な子育て支援の基本的態度・技術を学ぶ。 (オムニバス方式/全14回) (26井上清美/8回) 保護者支援について、相互理解と信頼関係の形成、家庭が抱える支援ニーズへの気づき、直接的、間接的にコミュニケーションをとるための方法や留意点(連絡帳ややりとりの際の配慮)、不安や悩みを相談された際の対応などについて学び、保育所の特性を活かした子育て支援のあり方を検討する。 (49勝山 幸/6回) こどもに関する社会的な問題(少子化、虐待問題、不適切保育等)について、データから実態を読み解き、支援政策について概観する。また、子育て支援の展開として、アセスメントの方法、支援計画の作成、ケース会議の持ち方など一連の相談支援プロセスについて事例を通じて学ぶ。	オムニバス方式
		子育て支援		(概要) 幼稚園教諭及び保育士に必要な資質能力の形成について最終的に確認するものである。学生が保育者としての自分の在り方について考え、不足する部分を補い、課題を見出し、保育者としての資質を高める。そのため、本授業では、複数の教員がかかわり、模擬保育やグループ討議を積極的に取り入れる。これらを通して、保育者として求められる①使命感や責任感、教育的愛情、②社会性や対人関係能力、③幼児理解や学級経営、教職員間の連携及び外部機関との連携、④こどもや家庭への援助方法について、学ぶ。その際には、それまで身に付けた知識や技術を省察し、あるいは活用しながら課題を見出し、問いを立て、解決・改善方法を見出す力を養う。 (オムニバス方式/全14回、一部共同) (2新開よしみ、3中田範子/第1回) ガイダンス・保育者としての使命と責任 (13原田晋吾/第2回) 特別支援教育の現状と課題 (12末松加奈/第3回) 保育とICTの活用 (9丹羽さかの/第4回) 保育現場と小学校との連携 (5和田美香/第5回) 担任の役割と学級経営 (2新開よしみ、3中田範子、4吉永早苗、10柳瀬洋美、5和田美香、9丹羽さかの、13原田晋吾、11佐藤冬果/第6~7回) (共同) 課題探究学習 (4吉永早苗、3中田範子/第8回) (共同) 事例検討①「こどもの遊びと援助」 (10柳瀬洋美/第9回) 事例検討②「気になるこどもへの保育者の援助」 (2新開よしみ、10柳瀬洋美/第10回) (共同) 事例検討③「家庭との連携」 (11佐藤冬果/第11回) 園庭環境と安全管理 (5和田美香/第12回) 学び続ける保育者としての在り方 (2新開よしみ、3中田範子、10柳瀬洋美、5和田美香、9丹羽さかの/第13~14回) (共同) 課題探究学習の成果報告	オムニバス方式 一部共同
	保育・教職実践演習	○			

授 業 科 目 の 概 要				
(生活共創学部こども教育学科)				
科目 区分	授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容	備考
専門 教育 科目	保育の 内容と 方法	多文化教育・保育	○ (オムニバス方式／全14回) (3中田範子／7回) 多文化共生教育・保育を理解し、課題を見出すために必要な知識・ 技能を習得する。 (G1新家 智子)／7回) 保育・教育現場、および地域社会における多文化共生教育・保育の 実際を学ぶ。	オムニバス方式
		発達臨床心理学	人間のライフサイクルを「生涯発達」という連続性のなかで捉え、 乳児期・幼児期、学童期・思春期、青年期、成人期、老年期の各時期 に生ずる様々な悩みや問題について理解を深める。また、直面する課 題に即した臨床実践のあり方や支援に必要な心理臨床の基礎的理論、 技法、実践を学ぶ。発達臨床心理学の意義と課題、子どもの問題のと らえ方、臨床心理学の基礎理論、発達と学習、心理的アセスメントと 援助の方法、事例研究、等から理解し学ぶ。	
		子育て支援実践演習A	学内で実施している近隣在住の0歳～3歳の乳幼児とその保護者を対 象とした親子参加型のグループ活動実習。乳幼児の発達について実践 を通して学ぶとともに、保護者との交流を通し、現代日本の子育て課 程を取り巻く現状について知る。また、個と集団の相即的發展を意識 し、保育者としての役割について体験的に学び、保育者としての実践 力、臨床家としての資質を養成する。	
		子育て支援実践演習B	学内で実施している近隣在住の0歳～3歳の乳幼児とその保護者を対 象とした親子参加型のグループ活動実習。参加者一人ひとりを尊重 し、子育て支援のあり方について理解を深める。また、参加児・者の 抱える個々の課題との取り組みを通じ、保育者としての実践力や専門 性の向上をはかっていく。この他、本授業での活動体験にもとづく集 団討議をおこない、実践研究の方法、論文作成上の諸問題などについ ても考究する。なお、学びを深めるといふ観点から、子育て支援実践 演習Aと合わせての履修が望ましい。	
		自然体験活動実践演習A	こどもの健やかな成長には、自然体験活動等の多様な体験活動の機 会を充実させることが重要である。本科目では、幼児・児童を対象と した自然体験活動をチームで協働し企画・運営するサービスラーニン グ型の学修を通して、こどもの育ちや自然環境、自然体験活動の実践 方法など、既習の知識技術を実際の社会に適用する形で捉え直し、実 際の指導体験とその振り返りを行うことでこどもを対象とした自然体 験活動の意義や課題について理解を深めると同時に、実践的な指導力 を身に付ける。	
		自然体験活動実践演習B	こどもの健やかな成長には、自然体験活動等の多様な体験活動の機 会を充実させることが重要である。本科目では、幼児・児童を対象と した自然体験活動において、そのプログラム内容の立案から人や物、 環境のマネジメント、実際の運営を主導し、リーダーシップを発揮し ながら他の学生達と協働してやり遂げるサービスラーニング型の学修 を通して、こどもを対象とした自然体験活動を主体的に運営する実践 力を修得する。	
教育 課程 と 教 科 指 導	国語科教育法 (書写を含 む)		小学校国語科の目標及び内容を理解し、これらを指導するための基 本的な知識と技能を身に付ける。小学校の発達をふまえた系統的な学 年目標や内容の取扱い、指導と評価活動の連携的な扱い、学習指導計 画の作成や授業展開の要件と実践的な手立てを学ぶ。実生活で「言葉 による見方・考え方」を働かせ、我が国の言語文化に関心をもち継承 する態度、思考や表現の基盤となる言葉を大切に感性や情懷を育 むとする教科の特性と役割を理解し、「話すこと・聞くこと」「書く こと及び読むこと」に関して言語感覚を重視した具体的な指導方法、 情報機器や学校図書館を活用する読書指導、書写指導の基礎知識と基 本的な技能、教材解釈や教具開発、学習形態の工夫などについて、議 論や模擬授業等を通して修得する。	

授 業 科 目 の 概 要				
(生活共創学部こども教育学科)				
科目区分	授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容	備考
専門 教育科目	教育課程と教科指導			
	社会科教育法		小学校社会科が目指す目標と内容領域の指導事項を理解し、学習活動の構成や指導と評価活動の連携的な扱いについて実践的な知識と基本的な指導力を身に付ける。社会的な見方・考え方を働かせて国家・社会を形成する公民的資質・能力の育成を目指す教科の特色を理解し、「地理的環境と人々の生活」、「歴史と人々の生活」、「現代社会の仕組みや働きと人々の生活」に区分される内容について、学習指導計画や指導案の作成・実践・省察・評価の観点と方法を修得する。特に、社会的事象の特色や関連を多角的に捉えて解決に向かう主体的な思考力・判断力を育成する指導の実際、情報機器や調査資料を活かす教材の工夫、地域の歴史・文化財・産業に触れる活動の展開等について学ぶ。	
	算数科教育法	○	「教育的な見方・考え方を働かせ、数学的活動を通して、教育的に考える資質・能力を育成する」という小学校算数科の目標をふまえ、指導および評価に関する基礎的事項を理解し、実践的な指導力を身に付ける。具体的には、生活者の視点から日常のなかにある様々な問題を数学的に解決する教材研究や学習活動の具体的な展開方法、小学校算数科の特性に応じたICT機器の効果的な活用法、児童の実態に応じた学習指導計画や指導案の作成・評価方法を学び、模擬授業を通して実践的な指導力、授業改善の視点を身に付ける。	
	理科教育法	○	自然現象に働きかけ、観察・実験などを行う問題解決能力と自然を愛する心情など、科学的な見方・考え方を養う「小学校理科の目標と内容」をふまえ、学年ごとの指導方法と評価活動について基礎的な実践力を身に付ける。自然に対する関心から問題意識をもち、見通しや問いをもって観察・実験などに取り組むことを通じて、素朴な好奇心を科学的な見方・考え方に変容させる学習活動の具体的な展開方法を理解するとともに、児童の学習状況の把握や教材の作成、安全な観察・実験の準備や指導、仮説や推論と結果を関連づける形成的な評価、実感を伴う理解を促す発問など、カリキュラムの系統性を意識した授業力を身に付ける。	
	生活科教育法		自分と身近な人々、社会や自然とのかかわりについて考え、自立への基礎を養うという小学校生活科の目標と内容をふまえ、具体的な学習指導方法と評価活動を連携的に扱う実践力を身に付ける。「自分と身近な人々や社会とのかかわり」、「自分と身近な自然とのかかわり」、「直接かかわる活動や体験と表現」で構成する内容について、時間的・空間的・心理的なゆとりを重視する学習指導計画の作成、児童の発達や理解に配慮した指導、総合的な学習の時間との接続をしやに入れた活動の展開方法などについて、模擬授業や協議を通して実践的な指導力・評価力を修得する。	
	音楽科教育法	○	(概要) 小学校学習指導要領をその背後にある理論的な考え方をふまえて理解し、音楽科授業について学習指導案の作成と模擬授業を通して実践的に学び、具体的な授業場面を想定した授業設計を行う方法を身に付ける。 (オムニバス方式／全14回) (4吉永早苗／7回) 小学校音楽科の歴史、学習指導要領の変遷について学ぶ。小学校低学年の学習教材とその指導法を考えることで、音楽科における幼小接続教育についての理解を深める。音楽と他教科のつながり、音楽科における言語能力の育成等、小学校音楽科の役割と可能性について考える。日本の伝統音楽を取り上げ、ICTを活用してその魅力を伝えることを考える。こうした活動を通じ、音楽科の授業を構成し実践するために必要な基礎知識、実践力を身に付ける。 (68塚本 恭子／7回) 「歌唱」「器楽」「音楽づくり」「鑑賞」の4領域における学習指導案を作成し、模擬授業を行う。模擬授業の実践と参観参観によって学習者自身が相互に学び合うなかで、授業を深める工夫、評価の視点を学ぶ。	オムニバス方式
図画工作科教育法	○	小学校図画工作科の目標と内容、その指導と評価の実践方法を学ぶ。子どもと図画工作科をとりまく今日的な課題や教育観の変遷を知り、「表現と鑑賞」の題材や評価の事例から教師の役割を考える。そのうえで、「造形遊び」・「絵や立体・工作」などの表現と鑑賞の内容領域を結ぶ指導及び評価活動について協議し、基礎的な理解を深める。また、「材料・用具」の特徴や「学年目標と内容」に配慮する教材研究や題材開発を行い、学習指導案の作成と模擬授業を通して実践的な指導方法の習得と展開・活用力の修得を目指す。		

授 業 科 目 の 概 要						
(生活共創学部こども教育学科)						
科目 区分	授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容	備考		
専 門 教 育 科 目	専 門 発 展 と 教 科 指 導	教育課程と教科指導	家庭科教育法	小学校家庭科の目標と内容について理解し、指導と評価の具体的方法について学ぶ。「生活の営みに係る見方・考え方を働かせ、よりよい生活を主体的に工夫する資質・能力の育成」を目標とする家庭科学習の特色をふまえ、家族・地域とかわりながら日常課題を解決する力を育む活動の展開や評価活動の指導方法を身に付ける。特に、児童が日常生活の中から課題を設定できるように自分の生活を見つめる場面の設定（主体性）、自他の考えをよりよい課題解決に生かす（対話）、生活に必要な知識・技能の高まりを実感する題材構想（深い学び）等の授業を展開するための学習指導案と評価計画、情報機器を含む教材の活用などについて、模擬授業を通して実践的に理解する。		
		体育科教育法	○	「運動や健康について考え、生涯にわたる心身の健康や豊かなスポーツライフを実現する資質・能力を育む」という小学校体育科学習の重点目標や学年のまとまりごとの内容領域について理解し、基礎的な指導力と評価活動を連携的に扱う実践方法を学ぶ。自分の適性に応じて様々な運動やスポーツとの関わり方を考える学習や健康で安全な生活と関連付けられる見方・考え方を育成する意義を捉え、各運動形の特色をふまえた学習指導計画と展開、単元構造図の作成、ICT・情報機器を含む教材・教具の活用場面、日頃の生活行動と健康、けが・病気の予防などに関心をもって取り組む学習活動の設定など、実践的な指導力と評価観を模擬授業や協議を通して身に付ける。	共同	
		外国語科教育法		小学校中学年の「外国語活動」と高学年の「外国語科」に共通する「外国語による言語活動を通してコミュニケーションを図る基礎となる資質・能力の育成」を目指す目標を理解し、発達に応じた興味・関心に即した学習活動の内容と指導方法を身に付ける。外国語を用いて互いの考えや気持ちを伝え合う「言語活動」において、外国語の音声や基本的な表現への慣れ親しむ活動を設定したり（英語活動）、音声のやり取りから文字（読むこと・書くこと）を指導したりする（外国語科）の基本事項に準じた活動を検討する。興味深く楽しめる単元の指導計画、コミュニケーションを行う目的・場面・状況等を明確にした必然性のある体験活動の展開方法、歌やゲームを用いた動機づけ、めあてをもった活動と振り返りを連携的に扱う指導と評価など、実践的な指導力を身に付ける。		
		初等教育演習		初等教育演習では、小学校・特別支援学校でのボランティアや授業見学を通じて教師とはどのような職業か具体的に理解する。また、小学校・特別支援学校の理想的な教師像を明確に自覚し、自信を持って教育を行うことのできる資質の向上を図る。さらに、自己理解を深め、自己に関するプレゼンテーション能力の向上を図る。		
専 門 支 援 教 育 の 基 礎 と 応 用	専 門 支 援 教 育 の 基 礎 と 応 用	教育の理念と方法	カリキュラム論	○	(概要)カリキュラムとは教育課程であり、子どもの学びの経験の総体である。また、計画のみにとどまらず、実践、評価、改善まで含まれる。つまり、カリキュラム・マネジメント（教育課程経営）のPDCAマネジメントサイクルの視点が重要となる。まず、海外のカリキュラムの理論や実践について学び、わが国のカリキュラムにどのように影響を与えたかという視点から学ぶ。次に、わが国のカリキュラムに関して歴史的な経緯を学ぶとともに、現代の教育・保育へどのようなつながっているかを学ぶ。これら一連の学びを通して、小学校や幼稚園のカリキュラムについて理解を深めるとともに、今日的な課題に関してアクティブラーニングを通して考察する。 (オムニバス方式/全14回) (3中田範子/7回) 主に幼稚園でのカリキュラムについて課題や可能性について検討しながら計画を作成し、理解を深める。 (6齋藤義雄/7回) 主に小学校での教育課程について、カリキュラムの類型や明治期の教育課程から最新の学習指導要領まで理解を深める。	オムニバス方式
		特別支援教育の基礎と応用	重複障害の理解と支援		重複障害の概念と多様な重複障害の実態について理解する。なかでも、盲ろう及び重症心身障害（知的障害と肢体不自由の重複）に焦点化し、それぞれの生活及び学習上の困難さについて理解する。その上で、指導法及び指導の実践についてビデオ資料等により知る。加えて、重複障害教育における課題と展望について整理する。授業の終盤には、学生個々が仮想事例を基にした学習指導案を作成する。指導案の作成を通して、重複障害の子ども理解の視点に係る気づきと学びを深める。	
		特別支援教育の基礎と応用	肢体不自由者の心理・生理・病理		肢体不自由の定義、運動・動作にかかわる器官等の発達、起因疾患、肢体不自由児の心理的特性について学び、具体的な発達の支援について事例を取り上げながら、肢体不自由者の運動・動作の発達、起因疾患の種類や病態、心理的特性、動作の心理学的な考え方、実際に支援を展開する際の基本的な方法等について理解を深める。実際の、具体的な理解を促進するために、肢体不自由がある子どもとの教育的係わり合いに関する映像資料を多用する。	

授 業 科 目 の 概 要				
(生活共創学部こども教育学科)				
科目区分	授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容	備考
専門教育科目 専門発展 特別支援教育の基礎と応用	病弱者の心理・生理・病理		(概要) 病弱者の人体の生理、各種疾患や障害の病理、心理的特性について学び、病弱者への適切な配慮、具体的な発達支援について事例を取り上げながら理解を図り、小児慢性疾患を抱える病弱者の人体の特徴等の生理、小児慢性疾患等の病理、心理特性等を理解し、必要な配慮や発達支援の方法について基本的な知識の理解を深める。	
	知的障害者の教育	○	(概要) 知的障害者の障害特性や状況等に応じた各教科の段階ごとの目標や内容及び指導法について概説する。知的障害者の障害特性や状況を踏まえた教科別の指導や各教科等を合わせた指導などの指導の形態、実態把握から指導目標の設定、指導内容・方法、学習評価、学習指導案作成、個別的教育支援計画や個別の指導計画の作成・活用、教材・教具について学び、知的障害者の障害特性や状況に応じた指導について理解を深める。 (オムニバス方式/全14回) (1江田裕介/全7回) 知的障害の障害特性と具体的な支援方法について講義する。 (13原田晋吾/全7回) 知的障害者を対象とした各教科の授業実践や学習指導案の作成等について講義する。	オムニバス方式
	肢体不自由者の教育	○	肢体不自由者の教育における指導について、教育課程や指導の目標と内容について学ぶ。指導における基本的事項のほか、具体的な指導上の工夫や配慮について、実践例や映像資料をもとに理解を深める。さらに、ICT機器や教材の考案を通して、実際の指導計画について考える。授業の終盤には、学生個々が仮想事例を基にした学習指導案を作成する。指導案の作成を通して、肢体不自由者の子ども理解の視点に係る気づきと学びを深める。	
	病弱者の教育	○	病弱者の教育における指導について、教育課程や指導の目標と内容について学ぶ。指導における基本的事項のほか、具体的な指導上の工夫や配慮について、実践例や映像資料をもとに理解を深める。さらに、ICT機器や教材の考案を通して、実際の指導計画について考える。授業の終盤には、学生個々が仮想事例を基にした学習指導案を作成する。指導案の作成を通して、病弱者の子ども理解の視点に係る気づきと学びを深める。	
卒業研究・卒業論文	アドバンストゼミA	○	卒業研究を見据えて、こども教育分野を専門とする各研究室で展開されている具体的な研究課題、研究内容、研究方法を学びながら、研究室配属のための準備を行う。こども教育に関する様々な研究領域において解決すべき現代的課題を知り、教員や学生同士の対話や先哲の考え方に触れることを通して、自身が取り組みたい課題を発見することを目的とする。	
	アドバンストゼミB	○	配属となった研究室でゼミを実施する。4年次に開講される卒業研究A・Bの履修に先立ち、各自が取り組みたいテーマを検討するとともに、研究活動を進めていくための基礎となる資料の収集、講読及び仮説の設定や探究したい点の絞り込み、論文の構成や書き方等について理解を深める。また、教員や学生とのディスカッションを通じて、自己を表現したり、新しい知見を得たりしながら専門性を高め、多様な子どものウェルビーイング向上に寄与する人間性を養うことを目的とする。	
	卒業研究A	○	所属する研究室において、先行研究を踏まえつつ自らの研究課題を設定し、研究方法を吟味し、研究計画に基づいて調査・データ収集等に取り組む。中間報告会では、それまでの研究成果をプレゼンテーションし、卒業研究Bに向けての課題を明らかにする。授業内容の詳細については各指導教員の指導によるものとする。	
	卒業研究B	○	卒業研究Aにおいて得られた研究データの整理、分析、考察を行い、研究の成果をまとめた論文及び要旨を作成する。卒業研究発表会では、最終的な研究成果を口頭で発表し、質疑応答を行う。	
	卒業論文・卒業制作	○	こどもや教育に関する分野で、先行研究を考慮しながら独自の研究課題を設定し、研究計画を立て、調査などを通じてデータを収集し、その成果を論文にまとめる。論文は科学的かつ論理的であると同時に、研究対象への人権的な配慮など倫理的な要求にも応えなければならない。このプロセスを通じて、こどもや教育に関する専門知識を深めるだけでなく、データ収集と分析のスキル、論理的思考力、文章と図表を使った表現力、プレゼンテーションスキル、計画遂行能力など、将来のキャリアに備えておくべき資質・能力を向上させることを目指す。	

授 業 科 目 の 概 要				
(生活共創学部こども教育学科)				
科目 区分	授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容	備考
資格 科目 幼稚園 一種・小 学校一 種	教育の基礎的理解に関する科目			
	教育・保育制度論		人間としての基礎を培う、幼児期及び児童期の子どもの保育・教育は、幼稚園・小学校で行われている保育・教育がどのような社会背景や制度のもとに営まれているのかを考える。現代的な諸問題を取り上げながら、学校安全、地域との連携、クラス経営等について社会的な枠組みから考える。(オムニバス方式/全14回) (3中田範子/7回) 主に幼稚園生活や幼児を取り巻く環境に関連した法制度について学び、課題や可能性について考える。 (6齋藤義雄/7回) 主に小学校の教員の業務について学ぶとともに、教師の服務上の義務や教師を取り巻く現代的な課題について考える。	オムニバス方式
	特別支援教育論		今日、発達障害等のある幼児児童が幼稚園や小学校に在籍しており、個々に応じた合理的配慮や基礎的環境整備が求められている。全ての学校において、インクルーシブ教育システムの構築に向けた特別支援教育の推進が重要である。特別支援教育については、各障害特性の理解、各教科に必要な指導と支援、個別的教育支援計画及び個別の指導計画の作成と活用、校内支援体制、特別支援教育コーディネーターの役割、センター的機能の活用等について学ぶ。また、子どもの貧困や日本語指導が必要な外国籍の子どもの教育について、社会的情勢と関連して学校教育の状況を学ぶ。	
	道徳教育論		「特別な教科 道徳(道徳科)」の目標と内容項目をはじめ、道徳科以外に各教科横断的な道徳的場面や児童の家庭・地域と連携する全体的な「道徳教育」の目標づくりや指導計画の重要性など基礎的な教育観について理解を深める。児童のよりよい生き方の基盤となる「道徳的な判断力・心情・実践態度」を基に、多面的・多角的な見方・考え方を育みたい道徳科学習の特色をふまえて、学年ごとに整理された「個性の伸長」、「相互理解や寛容」、「公正・公平・社会正義」、「よりよく生きる喜び」等の内容のまとまりを実践するための題材設定・教材活用の手立てなどを検討し、模擬授業や協議を通して、教師として必要な指導観と評価観を具えた実践力を身に付ける。(オムニバス方式/全14回) (7立川泰史/7回) 道徳教育の基本的な意義と目標、道徳科の具体的な内容項目、道徳的な判断力・心情・実践態度の育成、全体的な道徳教育の目標づくりや指導計画の重要性、教科横断的な道徳教育の実践方法、題材設定および教材活用について講義する。 (9丹羽さかの/7回) 子どもの道徳性の発達について解説する。代表的な道徳的認知発達理論を紹介し、乳幼児期から児童期にかけて、道徳的判断がどのように変化していくのか、各発達時期の特徴をおさえ、それを踏まえた道徳教育のあり方・授業内容について検討する。	オムニバス方式
	特別活動論		小学校における集団活動を通して、調和のとれた発達と個性の伸長を図り、よりよい人間関係を築く実践的態度を育む特別活動の目標や内容について理解する。集団活動を特質とする特別活動の意義や目標、学級活動、児童会活動、クラブ活動、学校行事等の各内容の特質、指導の方法などについて、具体的な実践事例を取り上げる。児童の発達を考慮した活動の助長や各教科・道徳、外国語活動や総合的な学習の時間などの関連、社会教育施設との連携活用など、地域や学校の特色を基にした指導計画などの工夫や手立てを捉えて、特別活動が教育課程に位置付けられている今日的意味を考察する。	
	総合的な学習の指導法		小学校における総合的な学習の時間は、学習指導要領で、探究の時間としての位置づけの重要性が増している。変化の激しい社会に対応して、自ら課題をみつけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を育てることをねらいとしている。総合的な学習の時間の学習指導の基本的な考え方として、探究的な学習、協同的な学習、体験的な学習、言語活動の充実等の実践事例を広く学ぶ。学習指導案を作成し、プレゼンテーションを行い、アクティブラーニングを通して、改善点を議論する。	
	教育方法・技術論		学校教育で営まれる「学ぶこと」「教えること」の質を高めるために展開した教育思想、今日求められる授業設計と活動・環境構成などについて考える。教科・領域の特色を踏まえた学習目標の設定とその実現に向けた教育方法、目標に準拠した指導と評価活動の連携を具現化する観点や手立て等について検討し、理解を深める。特に、授業設計については、技術革新と情報処理能力の育成に沿う学習環境デザインやICTを活用した学習活動の構成、主体的な学びのコミュニティに参加する協働学習など、実践的な教育の方法・技術の成り立ちや意味について理解し、基礎的な事項を学ぶ。 (6齋藤義雄/5回) 教育思想の変遷と教育技術の発展、教育方法の改善と今日の教育的課題 (7立川泰史/2回) 協働的な学習形態と現代思想、学習環境デザインの方略 (ICT/教材観)	オムニバス方式

授 業 科 目 の 概 要				
(生活共創学部こども教育学科)				
科目区分	授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容	備考
資格科目 幼稚園一種・小学校一種	教育の基礎的理解に関する科目			
	生徒指導論		学校における生徒指導は、問題行動等に対する対応にとどまる場合が少なくない。生徒指導の原点は、まず児童生徒理解であり、予防的指導が重要である。こうした生徒指導の本質を押さえながら、生徒指導の今日的な課題を考える。今日的な課題として、小1プロブレムや中1ギャップ、ジェンダー、命の教育、児童虐待、いじめ、不登校等を取り上げ、理解を深め、実践的な解決能力の向上を図る。	
	教育相談論		学校における教育相談とは、子ども一人ひとりの教育上・発達上の諸問題について問題解決を目指して、子どもや保護者と教師をはじめとする学校関係者が共に考える方法のひとつである。その結果、子どもの発達が促されたり、子どもが充実した学校生活を送る可能性がひろげられる。本授業は、教育相談がどんなときに必要になるか、その内容は？どのように教育相談を進めていくのか、学校内部での連携と、学校外の教育相談機関との連携なども考慮に入れて、具体的に参加者とともに進めていく。	
	進路指導論		進路指導は、生徒が自ら、将来の進路を選択・計画し、その後の生活をよりよくおくれる資質を育てる過程であり、教育活動である。それを包含するキャリア教育は、一人ひとりの社会的・職業的自立に向けて必要な基盤となる資質・能力を育む。進路指導・キャリア教育の視点に立った授業改善や体験活動、評価改善の推進やガイダンスとカウンセリングの充実、それに向けた学校内外の組織的体制に必要な知識や素養を身に付ける。	
	小学校教職実践演習		小学校教員養成課程の科目または学校教育や社会教育等の場を通して修得した知見や技能が、教員として必要な資質・能力として統合的に培われたかについて、履修科目の到達目標や教師像を規準とした自己評価を基に確認する。地域を担う教育職員としての使命感や責任感、学校組織の一員たる協働的な参加意識、教師に期待される児童理解や学級経営のストラテジー、及び教科学習の指導力や評価観等を中心に不足する課題を整理し、基礎的・基本的な実践力の向上と定着を図る。	
	幼稚園教育実習指導		(概要)本授業は、教育実習に先立って行う事前指導と、教育実習が終了してから行う事後指導が含まれるものである。教育実習の意義や教育実習生としての立場と心構えはもとより、幼児理解に基づく計画作成、保育実践(環境構成や援助の方法)、評価、教材・教具の活用などを学び、教育実習の成果を高めようとするものである。こうした学習を通して、教育実習のための基礎知識を学び、教育実習生としての心構え等を身に付けるものである。(オムニバス方式/全14回) (12末松加奈/7回) 初等教育実習Aに向けて、実習の心構えや日誌の書き方などを学び、観察実習のねらいを作成する。実習後には振り返りを行い、課題を見出す。 (3中田範子/7回) 初等教育実習Bに向けて、これまでの実習を経て見出された課題をもとに、部分実習や全日実習を想定した計画の作成等実習の事前準備や・実習後の振り返りを行う。これらを通して幼稚園教育におけるPDCAサイクルを学修する。	オムニバス方式・共同(一部)
	小学校教育実習指導		特色ある教育目標を基に営まれる学校教育に参加することを通して、自らの問題意識を実地で探究する「教育実施研究」について理解を深める。小学校教育実習の意義や目的、今日求められる教育観や目標の設定、教育実習生として見たい姿勢と教育職員としての社会的態度、教科・領域の指導や生活指導、児童の人権・人命を尊重する危機管理能力などを理解し、基礎的な知識と基本的な技能を身に付ける。実習前には、学習指導計画や評価との一体的扱い、研究授業の設定や教材準備、研究協議会を意識した反省的実践の手立て、組織的な児童理解、学校の教育目標と学級経営との関連等を考察し、事後に実習報告会を実施することで、主体的に教師像や教育観を形成することを目指す。	共同
	幼稚園教育実習		実際に教育活動が展開されている幼稚園の中で、園長を始め指導教諭等の指導の下で、観察、保育参加、部分実習、全日実習を3週間にわたって行うものである。この実習を通して、教育として行われる業務に全般的に携わることになる。大学での学習と幼稚園における実践等を関連させて考察しながら、教師としての服務、学級経営、環境の構成や保育者の援助等、総合的な力を身に付けるとともに、教員として相応しい教職観、倫理観、識見を豊かにする。	
小学校教育実習		地域に根ざした教育目標を基に営まれる小学校の教育活動に参加することを通して、学校教育に係る問題意識や今日的な課題について実践的に探究する実地研究を目的とする。大学での学びで得た教育的な観点から小学校の教科・領域の指導、生活指導等を実践し、考察する。初等教育実習の意義はもとより、教師としての使命や服務、学級・学年経営、児童理解に基づく個別最適化指導と評価活動等に関する総合的な実践力と社会的態度を身に付ける。時代や地域に求められる教師像や児童の実態に触れる経験から、自己の適性や資質・能力の涵養に向けた成果と課題を整理する機会とする。		

授 業 科 目 の 概 要				
(生活共創学部こども教育学科)				
科目区分	授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容	備考
特別支援学校一種	特別支援教育に関する科目 特別支援教育実習・実習指導		(概要) 特別支援学校での教育実習に向けての事前指導、事後指導を行う。指導案の書き方、模擬授業、教材教具の研究、指導技術の習得、学習評価の仕方などを通じて、特別支援教育を専門とする豊かな人間性と専門性の高い指導力を身に付けることを目指す。特別支援教育は、特別支援学校だけでなく、幼稚園、小・中学校等においても推進することが重要である。幼稚園、小学校、中学校等に在籍する特別な教育的ニーズを要する幼児児童生徒も含めて、一人一人の障害の状態や学習特性等への理解を深め確かな知識や指導力を身に付ける。	
保育士に必要な科目	保育実習指導ⅠA		保育所での役割や機能を具体的に理解し、子どもとの実際の関わりを通して子どもへの理解を深めるとともに、保育士の業務内容、職務倫理について具体的に学ぶことを目的とした「保育実習Ⅰ(保育所)」に向けて、事前学習として、保育所の概要、子どもの生活、観察の方法、日誌の書き方、指導案の立て方、オリエンテーション等について学び準備する。また、事後学習として実習のふりかえりと自己課題の明確化を行う。	
	保育実習指導ⅠB		保育所以外の児童福祉施設での実習(施設実習)に必要な知識と技術を修得し、実習内容を理解し自らの実習課題を明確にする。事前学習では、子どもをめぐる多様化する課題や問題に関心を持ち、施設の役割と機能について具体的に理解する。実習中は事前学習を踏まえながら実践を通して施設における保育士の専門性や職業倫理について学ぶ。実習後には、実習総括・評価・自己評価・事例研究を行い、次の段階に向けて新たな学習目標を明確化する。	
	保育実習ⅠA		保育所における保育に参加し、乳幼児の生活・遊び・発達等についての理解を深め、保育所の機能、保育士の職務について学ぶ。具体的には、①園の理解：保育所の環境と子どもの園生活を体験的に理解する、②子ども理解：さまざまな子どもとかわりながら子ども理解を深める、③保育職の理解：保育者の子どもへのかかわりや環境構成の工夫、保護者とのかわり、職員間のチームワークの実践について学ぶ、④自己理解：実習生としての自分のあり方を省察し、自己課題を明確化する、⑤学びの往還：これまで各科目で習得した知識と技能を保育所での実践や子どもとの関係を通して再構築し、実習後の学びへつなげる、ことを目指す。	
	保育実習ⅠB		保育所以外の児童福祉施設の機能や役割を具体的に理解する。観察や利用者とのかわりを通して、児童福祉施設で生活する子どもや大人一人ひとりへの理解を深める。児童福祉施設における保育士など職員の役割、職業倫理について理解する。	
	保育実習指導Ⅱ		保育実習Ⅱの意義や目的を明確化するとともに、指導案作成やもぐ授業などを通して実習を円滑に進めていくための知識・技術を習得する。実習後は、実習総括・自己評価・グループ指導・事例研究等によって実習体験を深化させつつ、新たな自己課題を明確化する。	
	保育実習Ⅱ		保育所の役割や機能について、具体的な実践を通して理解を深める。子どもの観察や関わり方の視点を明確にすることを通じて、保育の理解を深める。既習の教科目や保育実習Ⅰの経験を踏まえ、子どもの保育及び子育て支援について総合的に理解する。保育の計画・実践・観察及び自己評価等について、実際に取り組み、理解を深める。保育士の業務内容や職業倫理について、具体的な実践に結びつけて理解する。実習における自己課題を明確化する。	
	保育実習指導Ⅲ		実習施設の社会的意義を理解し、児童を健全に育成する環境整備を総合的に考える。実習や既習の教科目内容との関連性を洞察、保育技術の開発、実践力を培う。観察、記録及び自己評価等を踏まえた保育の改善について実践や事例を通して学ぶ。保育士としての専門性を身に付ける。	
	保育実習Ⅲ		保育実習Ⅰで習得した知識や理論を踏まえて、保育所以外の児童福祉施設、その他社会福祉施設の養護を実践し、保育士として必要な資質・能力・技術を習得する。特に、社会における児童福祉施設の意義や現状、問題点、今後の方向性なども考える必要がある。利用者の生活に直接触れることによって、利用者の福祉的ニーズに対する理解力、判断力を養うとともに、援助のために必要とされる能力を養う。卒業後の進路も含めて学びながら考える。	

(注)

- 開設する授業科目の数に応じ、適宜枠の数を増やして記入すること。
- 専門職大学等又は専門職学科を設ける大学若しくは短期大学の授業科目であって同時に授業を行う学生数が40人を超えることを想定するものについては、その旨及び当該想定する学生数を「備考」の欄に記入すること。
- 私立の大学の学部若しくは大学院の研究科又は短期大学の学科若しくは高等専門学校の収容定員に係る学則の変更の認可を受けようとする場合若しくは届出を行うとする場合、大学等の設置者の変更の認可を受けようとする場合又は大学等の廃止の認可を受けようとする場合若しくは届出を行うとする場合は、この書類を作成する必要はない。
- 「主要授業科目」の欄は、授業科目が主要授業科目に該当する場合、欄に「○」を記入すること。なお、高等専門学校の学科を設置する場合は、「主要授業科目」の欄に記入せず、斜線を引くこと。
- 高等専門学校の学科を設置する場合は、高等専門学校設置基準第17条第4項の規定により計算することのできる授業科目については、備考欄に「☆」を記入すること。

学校法人東京家政学院 設置認可等に関わる組織の移行表

令和6年度	入学 定員	編入学 定員	収容 定員	令和7年度	入学 定員	編入学 定員	収容 定員	変更の事由
東京家政学院大学				東京家政学院大学				
現代生活学部				現代生活学部				
		3年次				3年次		
現代家政学科	130	5	530	現代家政学科	130	5	530	
		3年次				3年次		
生活デザイン学科	80	10	340		0	0	0	令和9年4月学生募集停止
食物学科	70	-	280		0	-	0	令和9年4月学生募集停止
		3年次				3年次		
児童学科	90	5	370		0	0	0	令和9年4月学生募集停止
人間栄養学部				人間栄養学部				
人間栄養学科	140	-	560	人間栄養学科	140	-	560	
				生活共創学部				学部の設置(届出)
				生活共創学科				
				食科学コース				
				こども教育学科				
計				計				
	510	20	2080		517	5	2078	
東京家政学院大学大学院				東京家政学院大学大学院				
人間生活学研究科				人間生活学研究科				
	10	-	20		10	-	20	
計				計				
	10	-	20		10	-	20	